

# シベリア回想録



この「シベリア回想録」は著者のご家族のご好意により『草と闘う』というブログで2007/7/13 より 2007/10/24 まで 103 回にわたって連載したものです。

## 「シベリア回想録」ブログ掲載のご案内

旧満州で満鉄に勤務していた桜堂 泰さんという方が書いた「シベリア回想録」という本が手に入りました。この桜堂さんはすでに故人となっている方ですが、身内の方からお話を伺いました。それによりますと、満州で満鉄勤務のさなか40歳台のとき兵隊となり、やがて敗戦。その後シベリアに抑留され、つらい体験をしております。その回想録であります。身内の方の了解を得て、この体験記を皆さんに読んでもらいたいと思い、「シベリア回想録コーナー」を設けて掲載することにしました。

今の時代、みんな私たちよりも若い世代になりました。戦争の体験がない世代が時代をリードしています。戦争というものはどんなに過酷なものであるのか、改めて取り上げなければならないという気持ちになります。物書きではない素人の作品です。素朴な視点で書かれていて、当時の世相などがよく反映された貴重な資料でもあります。

またこの桜堂さんは、戦後の混乱で満州に取り残された戦争孤児を、早くから幾度となく満州の地に孤児を探しに出かけた方です。心優しき方です。私のブログの一部を割いて今後順次掲載していきます。

掲載方法はまったく原文というのではなく、今はあまり使わない漢字などではできるだけひらがなにし、現代風に読みやすく工夫をしましたが、書かれている内容には手を入れておりません。

表紙の絵は娘さん、「シベリヤ回想録」の文字はお婿さんが書く。

# シベリア回想録

桜堂 泰

## 緒言

戦後早くも30余年の歳月を経た。終戦にともなう前後の思い出、あるいは当時の記録を見たりして、昔に思いをはせ、私の人生の一端がかようだったのだな、然してまた生死を境にした同僚の果て、また多数の日本人の存否が想いだされてならない。複雑に、人生の思い出が空虚な脳中を去来する現在である。

短期間といいながらも私は帝国軍人となった。一転して捕虜の身になる。それがいまや走馬灯のごとく温かい風に吹かれ、捕虜の身の哀れさを忘れたごとく、横切り去らんとする。忘れがたきあの人生、フィルムのコマずつを記してみてもと重い筆を走らせている。

当時、国策に沿い渡満した幾多同胞のうち、終戦を境として満州に残された婦女子、老人は、現在いかなる生活をしているのだろうか。幸いにして恵まれた生活をしていると聞くと、心温まる思いがするが、半面孤児、寡婦となった人々には心暗くなる思いである。

残された孤児たちは現在30歳過ぎであるはず、日本人であることがわかれば、彼らは何程か父や母を慕っておることだろう。なんと慰問の方法はないものだろうか。かの地に残り満人の妻となった婦人たちにも愛の手を差し延べて、慰問してあげたい。次に捕虜となりロシアの待遇に骨と皮ばかりの体となり、彼の地に永眠した人々の霊を慰めてあげたいものだ。

日本人捕虜の姿は何の写真もないゆえに、お眼にかけることはできないが、アフリカのナイジェリア戦のごとくであった。もし当時（昭和43、44年）のニュース写真を見られるならば、あの衰えた肋骨の一本一本を数えられる人々を思い起こしていただきたい、あの姿が日本人の死亡の姿と同じである。

思い出すたびに襟元が冷え冷えとしてくる。繁栄している今の日本は何か忘れてはいないだろうか。1日も早く対策がほしい。そして彼ら、ロシア以上にあらゆる点で勝ってほしいと思う心は、私だけではないはずである。

感じるままに筆を走らせてみた。一瀉千里の記録不備の点はお許してください。  
(拙文も共に、昭和51年8月記す)

# シベリア回想録 目 次

## 1 在満の生活

渡満と生活 (昭和 13 年 7 月)

お花畑を見る (昭和 14 年 6 月)

ノンジャンの冬 (昭和 14 年 3 月)

北満の娯楽 (昭和 14 年 3 月)

馬賊出現と治安 (昭和 12 年)

平穏な生活 (昭和 15～16 年)

白城子での生活 (昭和 18 年 3 月)

白鳥と鶴の大群 (昭和 18 年)

聖戦と神話 (昭和 18 年 12 月)

大人の悪戯 (昭和 15 年 11 月)

## 2 二等兵時代

赤紙来る (昭和 20 年 5 月)

令状と入隊 (昭和 20 年)

二等兵誕生と生活 (昭和 20 年)

分 遣 (昭和 13 年 6 月)

新兵の心配その他 (昭和 20 年)

鋸と小刀の小屋作り (昭和 20 年)

駅に分遣 (昭和 20 年)

パラソル列車 (昭和 20 年 7 月)

本体へ帰還 (昭和 20 年 8 月)

将兵は苦楽を共にする (昭和 20 年)

特攻隊の出動 (昭和 20 年)

敗戦への道 (昭和 20 年)

退 却 (昭和 20 年)

武装解除 (昭和 20 年)

### 3 捕虜と在露時代

- 収容所と露軍の略奪 (昭和 20 年)
- 収容所の事ども (昭和 20 年)
- 悲しい開拓の人々 (昭和 20 年)
- 捕虜と生活 (昭和 20 年)
- 収容所移動と生活 (昭和 20 年 9 月)
- ロシアへ出発準備 (昭和 20 年)
- 興安嶺越え (昭和 20 年)
- 国境越え入露 (昭和 20 年)
- 露領へ第一歩 (昭和 20 年 10 月頃)
- 露兵の略奪と旅の種々相 (昭和 20 年)
- 炭鉱街の生活 (昭和 20 年)
- 労働の始めと軽作業 (昭和 20 年 11 月)
- アライコフへ移動と作業 (昭和 20 年 12 月 20 日)
- 厳冬の生活と作業 (昭和 20 年)
- 哀れな元旦その他 (昭和 21 年 1 月 1 日)
- 風軍団との闘い (昭和 21 年 1 月)
- 下士の横暴 (昭和 21 年)
- ドイツ人捕虜に会う (昭和 21 年)
- 身体検査とその後 (昭和 21 年)
- ロシア土木と種々相 (その 1) (昭和 21 年 3 月)
- 降格と GPU (昭和 21 年 3 月)
- ロシア土木と種々相 (その 2) (昭和 21 年 3 月)
- 捕虜と農作業 (昭和 21 年 6 月)
- 捕虜の炊事様々 (昭和 21 年 9 月)
- チャイナ本部へ移動 (昭和 21 年 10 月)

宿舎内の生活 (昭和 21 年 10 月)

1ヶ年前の同僚に会う (昭和 21 年)

老大尉と従兵 (昭和 22 年 1 月)

軽作業種々相 (昭和 22 年)

日本人将校の装具検査 (昭和 20 年 10 月)

チャイナールゴールスカヤの街を見る (昭和 22 年 2 月)

ノルマ作業とは

ロシア美人

特殊作業とロシアの組織

#### 4 帰国の種々相

帰国と種々の事ども

ナホトカ到着 (昭和 22 年 4 月)

宿舎生活種々相そして帰国 (昭和 22 年 7 月)

#### 雑記追記

ロシアの飛行場 (昭和 22 年 2 月)

黄熱病患者の幸運者 (昭和 22 年)

# 在 満 の 生 活

## 渡満と生活

私は土木屋である。岐阜県庁を振り出しの土木技手で岐阜県に5年、その後山形県に出向し、また5年勤務した。当時国内は不景気の風に荒らされ、県庁勤務もあまり魅力もなく、同僚も続々渡満し変わった情報が飛び込んでくる。昭和13年7月、ついに意を決して満鉄に鞍替えした。大阪天王山埠頭より大連行きの貨客船は、われら50数名を大連に、井の中の蛙も大海に出て始めて日本の小さいことを感じた。私は対岸の見える連絡所を知るだけであったのが経験というものだろう。

大連市街を見る。物価が安い。特に魚類の豊富なことに驚いた。内地では高価なエビも大連では3分の1である。ここからハルピンへ1車両を特別編成して出発した。人員は50人くらいと思うが特別編成の1車両とはまた格別だったのか、待遇のよいのに驚き感謝した。

見渡す限りの平野、沿線の住宅家屋、いずれも珍しいことばかり、だが最後の身の置きどころは果たしてどのようなところだろうか。ハルピンに行くことは知らされているものの、腰をすえるところはどこか不安ながらも、一縷の希望を持ってわが列車はハルピンに到着した。早速鉄道局に案内され、数人一団となり宿舎の割り当てである。白樺の生い茂る中にレンガ造りの住宅、ベッド住いという。この付近はかような社宅が数十戸並んでいた。道路の向こうは白露人の住宅である。満語も知らず、露語も知らず、誰とも話すこともできない。食事は（体に聞いて）本局の食事に通うことになった。

4、5日して通知が来た。全員ハルピン学院入校という。30歳過ぎた中年を今一度鍛えようというのか。何か哀れになる。しかし仕方ない。給料支給されて学校通いも面白い。学院では、社規および満語の講習のみ、余暇の始末には市内を二巡三巡視他。珍しい馬車に二人で乗り、石畳の道路をひづめの音高く走るのもまた格別であった。かような生活が3ヶ月あまり、競馬に行くものあり、見物あり、トランプ・花札等、そのため給料が足らず、質屋に行くものさえ出てきた。あまりに安住名生活でそこが抜け始めたようだ。

各々は在満中は貯蓄に励み、裕福な老後を考えて渡満してきたはずだ。しかし誰一人このことを話し出すものがない。ただ満鉄は大きいものだななど実に

のんびりしている。その内「赴任地の希望は」と来た。いずれ新米の社員はハルピンに就職することは不可能である。沿線の事務所勤務となることは必定である。私は奥地でもよい、開拓者の多い地区を希望していた。発令されてみると北満の果ての地であった。地図を眺めてみる。日本縦断と同じくらいの距離である。いささか淋しく感じたが、このハルピンのごとく内地に住むと同様な土地より変わったほうがよい。満人の生活もよく見られる。且つ又奥地ゆえ生活ものんびりしていいじゃないかなど、考えてみた。

本局にいきなお調べてみると、沿線には各県の入植者があり、近く青少年の開拓訓練所ができる予定とのこと、これは2年後出来上がり八州青少年開拓訓練所となる。赴任地は竜江省ノンジャン県ノンジャンという寒村であり、部隊の駐在地。部隊長は少将であったのを見ると軍事上の一挙点であったかも知れぬ。

未知の土地へ複雑な感情を内蔵し出発したが、途中を走りながら外景を眺めるのにまたなんとも淋しくなった。目にはいるものこれ草原であり、人家が見えない。車中はほとんど満人であり、草原がどこまでも続き、草原がどこまでも続く。駅間は約30キロ位、それでも駅につくと人が集まっている。下車するものもある。この人たちはどこから来て、どこへ行くのか。穴居生活ではあるまいと考えながら、ままよ、この広い満州に着たのだ。何をくよくよする。今から新天地を開拓するのだ。

チチハル駅についてようやく安堵した。

途中同僚と二人だが、この情景に押され何を語ったのか覚えがない。チチハル駅で二人で宿泊したのも覚えがない。よほど脳中が混乱していたのかも知れぬ。翌日早々種発した。彼は途中の駅で下車した。その後は自分ひとりの旅、駅間はやはり30キロくらいであるため、内地の列車よりスピードはあるが、いかに停車時間の長いこと。本局より800キロあまりの道のりの奥地が勤務地である。この付近まで来ると、左右が低い丘陵地となり小高い山あり、谷間あり、地形は内地と変わらない風景である。ノンジャン工務区、この終点が私の拠点であり、保線以外の土木関係の担当者となった。ここより北方に向かって国境沿いの新線が工事中であった。

満州事変の一方の巨頭、馬占山の根拠がここにあったという。



## お花畑を見る

赴任以来担当区域の巡回を度々行い、モーターカーを走らせて見た。運転手は満人であり。車両もさほど重くなく、列車が来るころには踏み切りで線路からはずし、通過後また元通りにする。

便利この上なし、また線路のため自動車などよりはるかに乗り心地がよい。随時出発あるいは停車ができるのでよく魚釣りに利用した。装甲列車も走る。状況左程危険ではないようだが、この列車は年中駅に来ている。内地ではお目にかかれない。

車両の編成が変わっている。機関車および炭水車は一列車の中央部にあり、車両の両端に兵隊が乗れるようになっている。奇襲に備えたものと思う。ことにこの地方のごとく丘陵のある場合は馬賊の奇襲が想われる。

かような所でも春ともなれば、各谷間に百花繚乱のたとえのごとく一斉に開花する。その美しさ、自然の美は内地の人工美とはまた格別である。赤、青、黄、紫、白、黒および緑などの原色が、広い谷間一杯に咲き出すのである。自然のお花畑を私は始めてお目にかかった。その雄大さ、美しさ、すばらしい情景が頭の中に焼き付けられた。

沿線巡回の折、装甲列車と打ち合わせ、途中このお花畑近くで停車し、乗員一同と花を摘み、これを炭水車に乗せて各駅に配布して大変喜ばれたという。ただ、私は黒い花はここが初めてである。

花咲き終わるところになるとこの付近の草原はカモ、あるいはガンの育雛場となり、黄色の雛が付近の水溜りを遊園地にしている。水上で遊ぶ姿は全くかわいいものであった。

## ノンジャンの冬

この地の冬期気温は零下 35 度、最低 40 度となる寒冷地帯、戸外では防寒帽にツララが下がり、眉毛も髭も肌に氷で貼り付けとなる。入室してもすぐに帽子は脱げない。氷のために怪我をする恐れがある。ドアの握り等は、ベタベタと手が金具に張り付くので素手では握れない。

積雪 30 センチくらいだが粉雪である。風の吹くまま飛び散り吹き上げる。また吹き溜まりができる。溜りができたと見ると、翌日は逆風で地肌が出ている。なんとも我儘な粉雪である。

地下の凍結深度を調べてみると、1 月下旬の極寒時に 1 日中石炭を焚き、夜業

をかけて少しずつ掘ってみると、2日間によく無凍結深さに達した。その深さ4メートル30センチ、この下は地下水であった。万一この地帯に4メートル30センチより浅く水道管を敷設したとすれば、凍結して通水不能となること火を見るより明らかである。

この寒さのため給水施設にはすべて暖房を通し、列車に付属している管には、日中も夜も絶え間なく蒸気を通してている。漏れた蒸気は所かまわず列車に張り付き、そのため外部は全く汚い模様となる。この寒冷のため線路がところにより湿気の多いところから凍結して持ち上がり、夏季に比べ1メートルくらいは盛り上がる。作業員は大多忙である。レールと枕木の間にほどほどの厚みを持つ板を挟み、自然と緩やかな勾配を作らなければならない。1日2往復という運転とはいえ、この勾配を取る忙しさ、満人線路工夫は綿入れのような手袋で厳冬の中、この作業をする。水道関係は盛り上がりにより引込線の一部がたびたび破損する。水圧のかかった水は水道管沿いに地表面に噴き出す。この修理には前掲の石炭を焚きながら徹夜の作業となる。勿論、室内でも立ち上がり管が破損する。ストーブやペチカで台所全面を暖かく夜通し保温すれば、この危機から逃れることができるが、石炭を節約すれば必ずこの洗礼を受ける。室内立ち上がり管の継ぎ手が破損すると、ここから水が強いシャワーのように台所に吐き出す。台所は水浸しとなる。管が亀裂するくらいだから室内は零下15度くらいだと思う。そこへ強力な噴水であるからこの家の主婦は自分の失策とはいえ、その報復に泣かされたことと思う。小さな台所は噴き出した水が片端から凍る。このときほど満人水道工夫を有難く思ったことはないに違いない。冬季中私宅の石炭消費量は月3トンを下らなかった。ついでに当時の生活の一部を記入しようと思う。当時内地では一人の日給は男60銭、女40銭、大福1個2銭、60センチくらいのカツオ1匹1円50銭、昭和14年の価格である。この年の暮れの31日の夜は若い日本人には、内地に帰るのが大変で独身寮でゴロ寝となる。

かわいいと思い、

私「君らは内地に帰るだけ貯金しないのか。」

若「旅費がないから寝正月を決めている。」

私「お前の出身地はどこか。」

若「私は宮城、私は栃木、私は茨城、私は石川、私は群馬、私は神奈川。」

私「よし、それでは私の宅で暮と正月をやろう。皆、私の宅へ〇時まで来て餅

つきをしてくれ。誰と誰は用件ある故昼食後来るように。」

彼らが来たので同伴して魚の買出し、忙しかったことと値段に驚いた。マグロの刺身 1 切 20 銭、充分でないゆえ笹鰹 1 匹 40 センチ足らずで 15 円である。

餅をつく、大急ぎ丸めて板の上へのせ、ドアの外に 10 分間も冷やすと石のごとく硬くなり、床に打ち付けるとカーンと音がして、変形どころか傷もつかない。安かったのは肉である。ワラジのような大きなカツレツがこの若い連中を喜ばせた。酒は日本酒を利用したが、満州には有名な白酒という強力なものがある。日本人ならばほとんど口にした筈である。なかには愛用している者もいた。料理店では白酒を注文するとボーイは皿とトックリを持ってきてテーブルに置き、皿に少しの白酒を注ぐ。それに火をつけるとアルコールのごとく青い炎がたつ。そこへトックリを置くとひとりでに爛がつくという仕組みである。白酒のアルコール度数は 70 を越えるという。アルコールの兄弟である。これを日本酒流に愛用すると腰をとられる。気持ちよく戸外厳冬の中で一服していれば、あのオランダのマッチ売りの娘のごとく、心地よく天国にいけるといふ。またその通りの現場も見た。満人の宴会は彼らも騒ぐことに変わらないが、深酒はしないという。日本人は無茶というか、この深酒でどれほど多数が天国にいったことか、それも無切符で。

この寒冷の地中で不思議と思うことがある。戸外の生物のカエル、ミミズ、魚等である。カエル、ミミズは凍結深度 4 メートル 30 センチはもぐらない。春が来れば地表および地下水際から除々にとける。中間部は最後に融ける。地表 40 センチくらい融けるとミミズが上層部にいるのである。

また魚類は如何と思ひ、土取り後の水溜り 3 メートル位は底まで氷であり、その下まで土が凍結しているのであるが、いざ融け去った水溜りには魚がいるのである。釣り上げることが出来るとすればいかなる天の摂理か寡聞にして判らない。人間はペチカだ、ストーブだ、暖房だと室温 24~25 度の中でなければ生きていけないのに彼らは如何にして越冬するものだろう。

## 北満での娯楽

われら担当線は往復午前 1 回、午後 1 回のまことにのどかな線路である。冬期間を除けば仕事らしい仕事がない。

碁・将棋・マーじゃん。魚釣り・ハンティング・映画は時折会館に来る。照国一行が部隊の慰問に来るので、日本人家族共、参加したこともあった。釣り

に行けば、銀色のコイ様のもの、銀色のマス及びタイの形体をしたフナがつれる。小物も釣れるが、大きなものは魚店で出ているナマズである。体長 1 メートル位、頭は 3 歳児と同じ程度のものであった。魚網でとったものだろう。

ハンティングの対象は、ノロというメス鹿、ガン及びカモ、その他キジ類である。時に山七面鳥もある。カモ及びガンは沼地の水辺に黒くなるほど集合している。1 発で 3 羽から 5 羽くらいは落とせる。しかしガンは 1 羽 7 キロ位、小にして 5 キロはある。

ノロは 10 頭から 20 頭の集団で、女鹿のごとく角がない。静かに近づいていく。しかし彼らの目が早い。見つけると 2 メートルくらい飛び上がり一目散に逃げていく。追打ちをかけても当たればこそ、遠くに見えなくなる。

満人がつけたのか、日本人がつけたのかわからないが、山七面鳥と称する鳥がある。これの撃ち方が面白い。彼らは数羽が一団となり草原にいる。大きな鳥ゆえ遠くからも見える。満式の馬車には、それほど警戒しないが人間には 100 メートルも近づかないと打つことが出来ないゆえ、満式馬車を雇い入れ、周囲を箆で囲み、打ち方はこの中に銃を持って隠れる。鳥から見えるものは馬車と御者、箆の囲いである。かくして鳥の集団の周りをぐるぐる廻りながら鳥との距離を縮めていく。100 メートル位まで近づきたいが彼らはまことに警戒する。こちらが近くなると向こうへ遠のく。向こうへ行けばこちらへくる。なかなか 100 メートルくらいが大変で逃げられないように御者に注意しながら静々と近づく。ここかと思いきや全員馬車に立ち上がり、単発弾の攻撃だ。見ると鳥の前後に土煙のみ、首を伸ばして馬車を見るなり、静かに滑走を始め 50 メートル位にして地上に飛び上がった。地上 100 メートルくらいにして彼らは大きく旋回して、また元の位置の地上に来た。これを見て下から撃ちかける。2 羽に命中した。草原でも大きな音を立てて落ちてきた。大きさは 15 キロと 12 キロあった。翼長は 2 メートル位。なぜ、元の位置に戻ってきたか、下に打ち手が待っているのに。多分彼らの同僚が残ってはいはしないかを見るためか、など考えてみた。

なんとなくセンチになり、狩はだめかとも思った。しかしこの鳥の肉はまことに優秀である。内地の七面鳥など比較にならない。肉類の王様であった。線路巡回が夕刻になるとよく狼にあう。彼らは列車からの投棄物をあさりに出てくる。線路から 30 メートル位でモーターカーの過ぎ行くのを眺めている。色は灰色長足短胴で、体型はシェパードと同じである。なんとなく気持ちの悪い動物で狩をするなど出来ない。1 頭、あるいは 2 頭でおり、夕方は特に危険だと満

人は恐れている。

## 馬賊の出現と治安

渡満 1 年半位（昭和 14 年）、聞くとところによれば日軍がノモンハンの戦闘で太敗を喫しているという。このようなニュースが伝わってくると同時に沿線には、馬賊の出没が甚だしいことも伝わってくる。50 キロ先には、彼らは終日屯して休養中という。ためしに満人を連れてモーターカーを飛ばし、現地で眺めてみた。駅より部落までの距離 5 キロ位、住宅 30 戸程度で盛んに煙が出ている。日中このように煙が出ることは馬賊であるという。彼らの食事だ。そのうち騎馬 1 頭がこちらに向かってくる。

「馬賊ではないか。」

と聞くと、彼は

「違う。」

という。この一満人が彼らを見分けることが出来るのか、彼らとの関連者じゃあるまいか、と疑ったがやはり翌日の情報には 50 頭の馬賊が 1 日休養、うどん粉を略奪し、良馬と交換して山中に引き上げていったという。

その後、駐屯部隊も少尉を先頭に 10 名位の部下を連れ基盤作戦と称し、線路の両側を調べ対応策を立てていたようだが、この兵隊に逮捕される馬賊は一人もいない。日軍は何となく物足りなく却って、彼らのほうが敏捷である。満馬は軍馬より逆に小さくて弱そうであるが、高原や湿地、草原にはことのほか強いのである。粗食に耐える丈夫な馬であるが、長距離走破には軍馬に劣る。彼ら馬賊はこの点を研究したらしい。悪条件の湿地帯を逃げることに、乗馬が疲れた時は部落で新馬と交換し、次々にこの手を使えば日軍に捕らえられることはなしという。

おおよそ 50 頭の馬賊の休息個所より 20 キロ遠方のこの地方第 1 の町が襲われた。話によると、300 頭位の大集団で急襲され、急報を聞き街の日人警務課長がドテラのまま役所にはせ参じたはよいが、正門のところまで 1 発でやられたという。この課長にはすまないが、何か手抜かりがあったと思う。相手は生死をかけてくる共産匪「日人を殺せ」という合言葉の彼らなんだ。

翌朝、この赤匪は馬車 100 台くらい徴発し、町中の食料・衣類を略奪して積み込み威風堂々と長い列を整えて山中どこことなく立ち去った。

日軍が到着したときは、影も形も見えない。街にも賊への連絡者がいること



だろう。基盤作戦等は用をなさない。何か抜けている。その内、また次の事件が起こるに違いない。何となく心の動揺を禁じえなかった。

現在の終点駅より北方に新線が工事中であり、露満国境まで続く。その内 90 キロが営業可能と副局長始め、上司が特別編成列車で検分に来た。私も同伴して午前中に終点ホルメン駅につき、所々検分しながら夕刻わが駅ノンジャンに到着した。副局長たちはそのまま帰還した。

その晩、ホルメンが襲われたと通報があった。彼らは迫撃砲で盛んに打ちまくり、社員住宅に入りかっぱらい専門だったらしい。彼らの中に女も 3 人くらい加わり、前導者は満鉄が雇い入っていた満人ボーイだったという。あいた口が塞がらないというのはこのことか、満人にも注意注意。

女匪賊は日本人の嫁入り衣装を捜し求めていた。同地に 10 名くらいの駐屯兵がいたが手も足も出なかったらしい。また少数ゆえ控えたのかもしれない。この事件で日本人死亡者は 2 人であり盗賊匪であったが、われら一行を襲う目的であったが、もしそうだとするならば半日違いで危難を逃れたことになる。満州はやはり危険なところだ。

ある夕刻、日本人線路技術員が日没後モーターカーで帰所途中、わが駅より 15 キロほどの丘陵の谷間に、30 頭ほどの馬賊の集合を見たという。ヘッドライトがその谷間を照らしたらしい。彼らは大急ぎで西方に逃走した。この情報が本部に届いた。満人に聞くと、また当街に来るかも知れぬなどと恐ろしいことをいう。紅匪なら危険である。早速日本人社員の集合となり、警護隊より銃 30 丁を借用、社宅および駅舎の警備につく。暗い戸外で二人ずつ一組となり各所を静かに巡回した。各社宅では窓側には畳を立てかけ、防弾準備をし、男子は交代で警戒体制をとった。

かような警戒で 2 週間も過ぎたころ、突然老山駅（隣の駅）がやられた。以前谷間で発見した場所より約 10 キロ先の駅である。早速行ってみる。レンガ建ての駅舎は丸焼け、骨のみ残り満人駅員は馬賊、馬賊といって震えている、満人住宅を見ると女たちが何か言い合っている。ここの警備分隊には日本人の警長 1 人のほか満人巡警 4, 5 人ほどでは、又手も足も出なかった。浴衣 1 枚で就寝中に裏窓を破られたので応戦したが、多勢に一人、表から飛び出して門まで逃げたがついに殉職した。裏窓で短銃数発、表門でも数発の薬きょうが散乱している奮戦の跡が歴然としている。

状況を見て暗然としたのは私一人ではなかった。馬賊騒ぎに中、この僻地の

警戒を厳重に出来なかったものか。彼は北海道出身で新婚早々の身、実に情けなく感じた。

寒さに向かうため、かの馬賊は食料の備えに忙しく兵隊はノモンハン、警備が弱い手薄の地を目標にした。鉄砲が足りないので近くの部隊に行く。在隊兵は少ない。皆出動しているために銃器は貸与するほどない。貸し出し不能と断られた。匪賊はこれを知っている。だからかように堂々と暴れまわるのだ。毎日の警備は怠りなく続く。

北満に漸次安住の地を求めようと計画したが危険が一杯。内地生活の窮屈さを逃れて悠々と生活する場所はないのか。しかしながら、ノモンハンの騒乱がなくなると馬賊もピタリと行動を停止した。兵隊は続々帰ってきた。度々駅頭に兵隊を迎えに出た。なんと兵隊のやつれたことか。涙が出た。1 中將の戦地報告を聞くに日軍は、全く手も足も出ない。

「優秀な兵力で機械化部隊である。日本人はあちら全滅、こちら全滅、仕方なくビールビンにガソリンを詰め、これを近づく敵戦車に投げつけ発火させてタンク消失を図ったが、逐次見破られて人命のみ損失したと言う。私の体には弾丸 7 発が入っている」

という。しかし、彼の中將は講演中に一言も「日軍は敗けた」とは言わなかった。日軍には「敗け」という言葉がなかったかもしれない。後程いろいろ考えるが、中將司令官のもと（第何軍か判らない）、敵の状況が事前に判らないものか。判らないとすれば、兵員機械等の充実をはかる必要があったと思う。部外者の私など噂に聞くと、荻栖中將は増員を求めても作戦部は反対のため小部隊だったとか。いずれの手落ちにしても多数の兵を殺すことは一小事件では済まされないのではないかと思う。

## 平穏な生活

### 昭和 14 年

ノモンハン事件は残念至極の終局を迎えたが、兵隊も帰り馬賊の姿も見えなく安泰な生活が続く。我が家の家族構成は全員 5 人、長男は幼稚園児である。天気もよし、日曜である。小輩を連れ、町の日本人商店に何か珍しいものでも買って与えようと乗合馬車を雇い、中心街に行き好きなものを買おうと品定めさせこれを買ひ、満人飯店で昼食を取り、また別の商店でお土産品を買うべく日本製造菓子求めた。日本製品は「目の抜けるほど」と言う通り、驚くほど高

価であった。価格は満鉄生計所よりみれば 5 割くらい高価である。内地では日給 7、80 銭くらいと思うが、柿の種混合菓子 20 円くらい買っても、両方の小指に下げただけ、商人もどれほど利益を上げていたものか。

帰りはバスを利用して子供たちと後部に席をとった。乗客はまことに少ない。運転席の方に日本人が 2 人いる。盛んに私のほうを眺めている。そのうちにづかづかと私のほうに来た。

彼「あなたは桜堂さんではないか。」

突然のことなので、

私「ハイ、私は桜堂です。して貴方は？」

というと、

彼「私は、山形の鈴木です。しばらくですね。」

といった。

私「言われてびっくり、顔見て思い出した。」

よく顔を見ると鈴木君だ。山形県庁時代の同僚技手である。車中いろいろな話の末、「何でこの僻地へ来たのか、今夜の予定はどうなんだ。」しばらくぶりの同僚ゆえ、私宅に泊まることになる。広い世間も案外狭い。悪いことは出来ない。この広い満州で内地からの同僚に会うなどは思いもよらぬことである。彼は満州国に奉職し、今回は 100 頭の馬車と 30 頭のラクダ隊を引き連れて、ノンジャンを超えて大興安嶺の調査に赴くところであった。江岸に兵糧、動物および人員を集結させているということで明朝は出発という。私より遅れて渡満したので、その後の内地の状況や現満州国土木技術の話で夜をふかし、明朝の出発を考慮し種々の注意やら注文をした。特に集団の馬賊について注意したことを覚えている。

## 昭和 16 年

寒い地帯も 3 年たてば暖かいほうに変わり、子供の成長に合わせなければと思いつき転勤を申請した。申請を認められチチハル局に勤務となる。ここチチハルは北満一の都会である。

局舎や日本人住宅はまことに立派である。内地ではお目にかかれない。私たちの住宅も暖房付のもの。居室も広く申し分ない。本局社員も多数であり、みるどころ皆裕福そうである。中には腰弁当で下級社員ながら、15 万円もの大福を達成したものもある。みんなの羨望の的である。当時内地で 1 万余あれば大体生活できた時代である。ホルメンに副局長と同行の折、貯蓄を聞いた。副局長



は高専卒以来 25 年の由、外遊経験者にしてその返事が愉快である。「私は 25 年勤務者だが、入社以来最低基準の社員貯金を出しているが、4 万を越したところだ。来年は満 25 年になる。来年表彰式には満鉄刀と金一封をもらえる」。当時金一封は不明なるも 1 万以上の由、副局長は 4、5 万になるだろう。

副局長は淡々と話を続ける。区長は貯金がいくら出来たかに返事はしにくそうに、「1 万もありますかな。桜堂君はいくら。」「そう私は奉職 2 年ばかりで誠に少々でお知らせは出来ません。」と、「そうか、私が表彰を受けたときは、祝いの電報を打ってくれ。」という。「そうしましょう。」といったが区長も私も電報は打たなかった。

当地に来て以来環境の変化により子供たちは病気、入院の繰り返し、小児科の先生と親しくなってしまうそう。なかなか全快しない。勤務後病院へ、朝自宅への繰り返しが 4 ヶ月続く。ある日子供を 2 人連れて保養病院に向かう。ここは呼吸器専門病院で、特殊の療法を行う。3 日に 1 回くらいの通院を続けた。この時、内地実母の死亡を伝えられるも、然し帰国が出来ない。出棺時を見送らう三人で東方に向かって合掌礼拝した。ここは駅のホーム東端で忘れることが出来ない。

親不孝ものはただ詫びるしかないものだ。

北満一の都会とはいえ駅舎や社員住宅は良好であるが、これは鉄道局の管轄区域であり、その他は満州流の土塀に土の家屋である。

商店のみ店らしく見えるが、到底内地と比較にならない。2 年足らずの生活だが子供たちの病気には降参した。暖かに地方へ移るより他なしと転勤希望、あまりに短期勤務と思ひ希望通りにいくか否か心配したが、希望通り許可されて昭和 17 年白城子へ転勤となる。愉快的ことに社員転勤の折は貨車 1 両無料貸与されるのである。前回チチハルに転勤の折も同様支給された。ただし条件は貨物として 70 個以上という。われわれの荷物をながめると 30 個内外であるから規定に程遠い。種々話を総合するに個数さえあればいいとのこと、早速悪智恵を働かす。できるだけ個数を多く作る。すなわち、1 個を 3 個に、石炭 1 トンを 15 袋、洗面器 1 ケ、たらい 1 ケ、靴 2 足 1 ケの如くして、70 個を誰も見ないうち貨車に運び込み駅員を呼んで施錠した。駅員も同じ穴のタヌキ易々諾々として発送した。

## 昭和 17 年 白城子での生活

白城子に来てみると、気候も予想通り暖かく、毎日子供たちものびのびしている。私も安心だ。ここは駅より続く例の泥家作りの満人住宅と日人除けばすべて草原であり、山は全然見えない。北方に日人開拓者、20 軒ほどの集団が見えるのみ。ここは鉄道の十字路にして、北方はチチハルへ、西は例の激戦地ノモンハンへ、東は首都新京へ、南は奉天大連へと続き、列車も多く軍用列車もよく通る。夏も冬も苦力列車・軍用列車いずれもここで給水給湯する。私も責任上駅頭に出てみる。苦力列車のごときは有蓋貨車に押し込み、施錠して逃亡を防いだらしく、駅についてみると水の欠乏か病弱か2、3人が死亡しているという。

軍用車も有蓋貨車である。すべてが軍命であり如何ともしがたいが、今になって考えればいまい少し人情味を持ち、ハガキ一枚の兵隊とはいえ、死に行く若者を大切に作る気がなかったものかと思われる。

この列車到着となれば、憲兵が出動して一般人は近寄れない。厳重な警戒体制である。

昭和 19 年 11 月上旬と記憶するが、一軍用車が到着した。駅頭には大釜を構え、湯を沸かしてある。車両のドアを開けて湯場に来る兵隊を見て驚いた。戦闘帽に夏服、地下足袋に竹製の水筒を持って下車したのである。兵隊の一人に尋ねてみた。「出身地は?」「名古屋で招集兵」「職業は?」「洋裁師」「行く先は?」「ハイラル」。逆に彼らは私に質問する。「ハイラルとはどんな所なのか?」「寒さは?」短時間の問答で詳しく話すことは出来なかった。この時期になればハイラルは零下 15 度になっているはず、この装具で、彼の地まで行くのか。して竹の水筒はどうしたものだろうか。心中暗澹たるものがあつた。

春も早々、余暇を見て釣りに出かけた。竿を担いで草原の水濁りに糸をたれる。小魚が来る、大物は沙汰なし。大河ならと思ひ。枯れ草をかき分けかき分け嬾江（松花江の支流）を見た。流氷の山だ。ガランゴロンと大きな音をたて、大小の氷塊が重なり合って流れている。到底釣りにはならない。然し氷塊の間に多数の死魚が見える。川中にいっぱい鱗を散布したような状態である。早速考えた、この魚は凍結深度のどの辺に棲息していたのか、どうして死んだものなのか、絶えることない流氷の音と死魚にただ啞然とした。

## 白鳥と鶴の大群

竿を担いで流氷を眺める。何か詩的に感じられる。ここは川幅 200 メートル程度と推測するが、この氷に見え隠れして前方の川岸に白鳥が悠々と泳いでいるのがわかった。なるほど、河岸が湾曲している。流氷が届かない。数羽の白鳥が自然の中で遊泳しているさまは、絵画の中でも見たことがない。釣りを忘れ氷の山を前にして白鳥と自然を眺め、しばらく腰を下ろして眺めていた。われを忘れたとはこのことかも知れない。初めての経験であり、内地では考えられないことである。

帰り支度を始める。もう釣りは打ち切りと腰をのばして立ち上がる。するとどこからかコーコーと鳥の鳴く声が聞こえてくる。探してみる、天上を見上げた。いるいる、鶴の大群だ。推測ながら高さ千メートル位、円を描き、円径は直径 300 メートル位、その数 7、800 羽と思われる。帯状の円を描きお互いコーコーと呼び合い、静かに円が移動し西南方面に遠くなったのである。絵画その他から見る概念では、鶴の飛翔は雁のごとく列をなすものと考えていた。これを見て私は全く呆然となった。短時間に二つの真実が植えつけられたからある。この鶴の大群について疑問とする。これは、この多数の鶴が今まで 1ヶ所で棲息していたものではあるまいということ。とすればどのようにして集合したものか、そしてまた何処へ行ったものなのか、円形飛翔は彼らの天性なのか。

このときの鶴の鳴き声が、現在でも私の頭から離れない。私は空前絶後の経験を得た。何か神秘的な行事が目前に迫りくるように感じられた。

## 聖戦と神話

軍の輸送列車が西へあるいは北へと行く、いずれも竹の水筒、地下足袋である。この服装ではなんともやりきれない気持ちである。毎晩のラジオは皇軍の大戦果を放送している。

われわれは部下満人に聖戦の意義を教え、毎月彼らの給料日には 1 円程度の飛行機献納資金に協力を求めた。1 円は彼らから見れば一日の給料であるが、誰も反対するものはいない。だが、われらの努力を陰で笑っているようである。前後の事情をのちほど分析してみるに、昭和 19 年 7 月頃我が家の虫乾し中、満人古物商が来て妻に「このモーニングを売ってくれないか。」という。妻は「お前が買ってどうするんだ。」と聞けば「近く米軍が来るので大連まで着て出迎え

る。」と言ったという。あるいはまた「山海関（万里長城の基点）に持っていけば千円で買ったとしても3千円で売れる。」という。

北支と満州はここを境として、物価は満州の3倍であり、給料も3倍である。北支よりきた社員に聞いたところ、コーヒー1杯15円位が北支では120円とのこと。モーニングも昭和9年に山形で13円であった。今は満州で古物屋が千円であり、北支では参千円という。皇軍は大勝利となると何がなんだかわからない。胸中大混乱である。然し古物商は不屈である。日人を見下げおる。本人と対談してみたいと思うが姿を見せないし、一満人に迷わされるのも面白くないので黙殺した。

一般の生活も不自由になり、甘いものが少なくなり子供用菓子がなくなった。満州の菓子を買ったことがあるが、内地よりのニュースと比べれば上の部類と思う。

「日本が勝利を収めた暁には、協力してくれた満人には米国製の金時計を1ヶずつ進呈するゆえ献金してほしい。」と呼びかけた。だが毎晩のラジオニュースでは、大本営の発表は待たれる中に有望であるが、なぜ戦域が縮小されるのか。

内地の空襲を聞くに及んで流言多々である。日本の天皇は満州に退避されるとか、伊勢神宮の神馬が宮中を駆け回り、天皇の御身を守り続けているとか、あるいはもろもろの武神が陛下の枕元にたち、国の安泰を告げられたとか。

どこから出るものやら全くの神話が流布していた。いまさらとは思えどもおぼれるものは？の様に信じたいものであった。

戦局が逼迫するにつれ、内地爆撃のニュースが多く、北方太平洋上より潜入のB29が郡山市を爆撃、原町市もやられたという。何か背中の薪に火がついた様な気分である。

## 大人の悪戯

白城子の周囲は大草原にして天上よりみれば、この草原の中には住宅あり、湖沼あり、畑ありと思われるが、直立してみる限りは草原しか見えない。が、遙か彼方に泥柳の姿あり、鳥類の営巣場所ありである。秋が来る。野原には背丈以上の雑草が枯れている。思い出せば昭和15年秋頃であるが、例のモーターカーに同乗して沿線巡回の折、一職員がモーターカーを止めた。何をするのかと見ていると、線路そばの雑草にマッチで火をつけた。彼は何も言わない。想

像するに線路傍の雑草焼き払いだなど思った。然し火はどんどん北風に吹きま  
くられてゆく。10時ごろの着火が、午後二時ころは30キロ位横帯状の火勢で、  
南に伸びてゆく。その火足の速いこと、幅は2キロはあったろう。猛烈な火勢  
がどこまで続くやら、そして何処で消えたやら、草に隠れて見えない満人住宅  
は何ほど恐ろしかったか、胸の痛む思いがした。

## 2 二等兵時代

### 赤紙来る

満州事変勃発地、興安の奥地は川マスの棲息地。魚長 30 センチ位より 60 センチ位のものが釣れる。ここより 1 泊の予定で奥地に行き、一日中釣りながら下流駅の近くまで来て帰ったことがある。そのときの戦火は麻袋に 80%位であり、一人では列車に積めず 3 人で貨車に積むほどである。後始末に困り近隣へ分けてあげたことがあった。

味をしめて何時か行こうと思ったが一人では無理ゆえ、満人工夫一人を連れて行くこととして、前日用意万端工夫に依頼し、明朝第○号列車に乗車することを約束してわかれた。

名目は○○方面巡回、○列車で行く、と次席に依頼したが彼は万事納得しているらしい。

満人からでも聞いたのであろうと思った。

笑いながら返事をしていた。私も笑った。

当日は予定通り○号車に乗り込んだ。車中釣り場の位置を考えながら 3 番目の駅に着かんとしている時、日本人駅長が上着をつけながらとんできて、○号車に乗り込んだ。そのあわてる姿が面白くて心中笑っていた。私は窓側に位置していたが、顔も見ず次の車両に入った。しばらくして戻った駅長は私の車両で大声を張り上げて「桜堂さんはいませんか。」ときた。

今度は私がびっくりした。「ああ、ここに降ります。」瞬間、さて私に用があるとは？近づく駅長に「私に何か用件在りますか。」と尋ねると、彼は「本所よりの電話で用件が出来たからすぐ帰れ。」とのこと、幸い列車は次の駅で交換だからそれに乗車されるようにとの話であった。

その時の私の心中は如何ばかりか。駅長に礼も言わず満人はそのまま交換列車に乗り換えた。心を落ち着けていろいろ考えた。事務の件ではボーナスはすでに決定済み、工事の件は何の支障もない、とせば万一あれが来ているんじゃないか、内心の不安を覆い隠すことが出来ない。

「万一あれが。」と思うと駅頭の竹の水筒が目の前を動揺する。然し私は早や 40 歳にならんとしている。第 2 国民兵で私等まで召集せねばならんとせば、日本も終局に近づいたな、等種々思い巡らし帰所した。



わが事務所はホームの北側にあり、線路伝いに東の入り口から入ると所内全部が見える。

ドアを開けた入り口に立った私を、所員が全員で眺め、まもなく顔を机の上に落とした。

これはただ事ではないと思い、自分のテーブルに行き次席に何の用かと聞いたところ、彼即座に「所長さんが待っている。」という。ハハーン、所長室に行くか、これは赤紙だ、間違いない、よし来た腹を決めたがなんとも落ちつかない。

## 令状と入営

所長室のドアを開け「至急用件の由、何かあったんですか・」と挨拶抜きでたずね、赤か白か急いで問うた。「赤だ。」と重い口を開いた。

予想的中万事終わりとなる、「分かりました。ではこれから自宅に帰りますが、私の残務をお願いします。そのままにして帰ります。なお、家族6人を残しますのでご迷惑とは思いますが、会社との関連をよろしくお願いいたします。」

令状を受領ハイラル部隊入営となった。

今まで度々地下足袋で竹製水筒持参兵をハイラルに送った。今度は私も彼らの後を追ってハイラルに行かなければならない。あのたくさんの兵はその後どうしたのだろう。私は第二国民兵であり名誉ある兵隊ではないようである。「軽重輪卒が兵隊ならば電信柱に花が咲く」と歌われるほど愛される半端兵なのである。

いずれにせよ入隊せねばならない。

この召集で満鉄から相当人員が入隊となった。

事務所から自宅に電話あり、今回の召集について県公署（昔の郡役所と警察および産業関係の合同したもの）に問い合わせたところ、赤紙ではあるが在満の日人の全部を召集して教育する、8月15日には除隊する予定と軍の返事である由伝えられた。また本局よりの電話として、私の立場は徴兵猶予の範囲にあり、申請しておくのを大急ぎ申請したという、また何をか言わん。今、1、2日で入隊だ！万事休す。

陛下の赤子として入営することは名誉なんだと思えども、残された家族のことが一番の心配だ。何せ異人種の中に、妻1人子供5人を広い満州に残すことだ。心配顔を家族には見せられない。不在中の配慮は手紙最良と考え、それと

なく妻との対話は心を落ち着けられるようにと小事を話し合ったように覚えている。

8月15日解除を目標にしたが、なんとなく日本の戦況が悪化をたどっている。敗戦となれば家族との再会は不可能となる。二人でこのようなことを考え悲しむより書置きに限る。出発後、時々見てくればよいと長文の書置きをしたのを記憶している。

昭和20年5月15日、真っ暗な早朝、5人の子供の寝姿を見、頭をなでて妻と別れた。玄関には妻だけ立っていた。前日来宅して1泊した同郷の助役を同伴して駅に行った。彼も同様入営者だが、私が入隊することなど知らせたこともないのに、私が入営を知り、私宅を訪ねてきたのである。

内地で入営となればバンザイに送られ涙の中に出発するのが、このところでは軍命と称して送別会や駅の送迎は禁止された。平日の出張風景である。胸中では生きて再びこの地に来ることは出来ないだろう、そのときは家族もこの地にはいられないだろう等思いつつ草原の駅を一路ハイラルに向かった。心中やはり穏やかでない、同僚と何を話し合ったのか、周囲の状況がどうであったか総てうわの空で、今も思い出せない状態である。今日は20年5月15日、記念すべき日である。

## 二等兵誕生と生活

駅より3355部隊に向かう。いずれも寡黙にして下を見て歩く。在満者の殆どは主人・妻・子供の家族構成である。その内主人を召集されるとどうなる。まれには老父母の人々もあるが老人は60歳以上であろう。

隊内の大広間に集合する。目前には衣料類が整っている。指令どおり着用した。全員一様の姿になった。これで二等兵誕生となったので新兵の品定めを試してみた。

私は40歳にならんとしているのに皆は全く若い顔、姿より見るに20歳代が殆どであり30歳代もいる。私よりも年長者らしいものもいる。

「ははー、これは教育召集に間違いない、とすれば8月15日には帰れる」と独りで決めた。

わが班は25名くらいである。古参兵から整理整頓の仕方、班より出入りの仕方等、詳しく教えられた。この年になりこのようなことをせねばならないとは……？何の罰当たりか。これで名誉の軍人なのか。若かったなら何の異存もな



く、ご無理ご尤もで通したのであろうが、この生活のどうかする前に批判が先に立つ。上官に会ったときは敬礼すべし、1日何回会ってもそのつど敬礼、上官が小用中でも敬礼、いやはや敬礼づくしである。敬礼がいやになったものは上司の姿を見ると隠れるようになる。二等兵は1日中班内で生活できない。たくさんの用件を言いつけられる。必然的に外部で上官に会うと必ず敬礼だ。欠礼すれば恐ろしいほどピンタが飛ぶ。二等兵は兵隊の人夫だ。これより下の人夫はいないのである。

入隊後数日にして中隊事務室より呼び出され、事務の手伝いを言いつけられる。軍には考科表と称する兵隊の履歴書がある。新兵の考科表を清書する役目であった。老兵であると思ったのであろう、30代の者等新兵7人とこの仕事を1週間位手伝った。種々年齢の職業者が入隊している。調べてみる。45歳の者もいる。私は中隊で3番目の老兵であった。

考科表もやや終わり近くなると、突然班長から「部隊長の指示で、中隊長から当連隊の周囲に土塀を作り、周囲に道路を計画することになったので、これは桜堂が計画施工せよとの命令だ。」という、この時連隊長は43歳、中隊長37歳。班長は26歳と覚える。少佐、中尉階級の幹部の人々であった。

部隊の周りは平坦な草の原であり、計画等は舗装するものではなかろうからお安い仕事、喜んだのは敬礼しなくてもよいことだ。外に出て草原で背伸びをしたほうがいい。早速考科表を見て土木に経験のありそうなもの4人を選び出し班長に申告した。翌日集まってみる。いずれも土木屋らしい人達で、早速機材を準備し二等兵のみの1団が仕事にかかる。

二日目ころと思うが、突然部隊長少佐殿が馬耳に赤色の袋をかけ兵隊一人を連れてきた。隠れようにも隠れられぬ。仕方なし二全員5名直立し、部隊長殿に敬礼の大声を張り上げた。彼は少し笑いながら答礼して過ぎ去った。「多分二等兵はうまくやっているな。」の微笑だったのかもしれない。

計画を完了したので申告した。翌日は輸送馬車を出すから盛土を指示するようにとの命令である。いずれにせよ敬礼から逃れる、これは一番よい方法だ。私は喜んで戸外に立っていた。

みると前方に馬部隊が班長を先頭に続々やってきた。こちらに手振りでこっちだこっちだと合図する。目前に馬本部隊が停止して班長は「伍長で金筋1本星一つ。」シゲシゲと私を見つめていった。「何だ、お前は二等兵じゃないか、お前の命令は聞けぬ。」ああ、そうだったか、私は監督できないんだな、しから

ばどうすればよいのか。「私は命令されてきたのだが。」と言え、「ではお前の班長を指揮すればいい。」といったので、私は黙っていた。彼はどこへ行って盛土をしたものやら、勝手にしやがれと思った。次にきたのがわが班長である。近づく班長に言った。「班長殿、先ほどの班長は私の指示はダメだ、お前の部隊に運んでもらえといい、勝手にどこかに行きました。どうすればいいのですか。」私は腹の中、可笑しくて仕様がな。然し、顔は真面目である。そのときの班長の声が小さく蚊の泣くような返事だったと思う。

## 分遣

夕刻班に戻ってみる。班内が見たこともない装具が机上に並び大変忙しそうに見える。何事かと聞いてみると、大興安山脈の中腹にある小駅近くだという。仕事は馬繋場作りの由、これはしまった。あの面白くない土盛作業より、この方がよい。即座に伍長に申し出たが、すでに人員決定したからダメとの事、まだ押せと思って、伍長に私を連れて行って欲すれば、あの付近は私は知っている付近である。(実は知らない所) 支那町に案内してご馳走も出来るのだが。

班長の顔色が変わった。即座に〇〇は派遣中止、装具一切を桜堂に渡せ、いや現金なものだ。命令だから彼は黙々と装具を渡してくれた。後程考えるに、彼には気の毒をしたと思うが、彼は付近の地理は皆目わからない男だ。

翌朝出発である。私の仕度は一応軍人らしい鉄砲は銃の短い騎兵銃であり、帯皮がない。縄を拾って代用品とし背負い袋の上に乗せ、なるべく上官になるべく合わぬようにと念じながら、わが班の馬繋場のそばを通り抜けようとして馬場を見ると、連隊長始め各中隊長が副官と共に大勢で巡察中である。

「しまった。」

即座に停止して敬礼をした。ところが向こうは知らぬ半兵衛。返礼なし。こんなものかと考え歩き始めた、時間もなくなる。後のほうから早い靴音が聞こえる。振り返ってみるとわが中隊長殿である。また敬礼。彼は、私の胸の氏名を見てそのまま帰っていった。不思議なこともあるものだ。集合地には兵長等は、私が来るのを待っていた。兵長に今の出来事を詳しく報告した。なぜだろう、分からないことばかり。これは新兵の所以か……………？ところが兵長曰く「お前は馬鹿だな、直属の上官の場合はささげ銃をする規定がある。お前は重営倉(監獄)ものだ」という。ハハー、また何か来たなあ、然し、私は今半日先に分遣する身、教えられたこともない事件で営倉など馬鹿らしい。早く分遣だ。

万一営倉なら改めて呼び出しがあるだろう。その後、何の音沙汰もないから、丸く無事解決したのだろう。

派遣先は山の中腹にある小駅より5キロほど奥地の谷間である。先遣部隊の工兵は洞窟の倉庫を作り、衣類、食料の貯蔵庫であり、私等はその材料運搬のため幾中隊か移動することになり、その馬繋場づくりである。降伏当時分かったことであるが、羊肉・ラクダ・菓子・タバコ類の莫大なこと、道路には、乾燥魚・菓子類が足の踏み場もないほどである。降伏がわかればなぜこれほどの物資を倉より引き出し、道路に投げ、骨折損をしたものか。私なら工兵ゆえダイナマイトで最後の数発を倉庫の入り口に仕掛ければ、入り口は閉鎖され、取り出し不能になるものと思った。

毎日馬繋場づくり、また食事作りで日を暮らした。山中ゆえ、何のニュースもない。ボンボンと2週間も暮らす内、家族のことが思い出される。班長の許可を得て2回ほど駅長室より、自宅に電話を入れた。

子供達は喜び口々にお父さんという呼び声が聞こえる。子供には15日を待つように、また面会は山の中であり、子供は面会できないゆえ、来ないように話をし終わるとなんとなく安堵した。

## 新兵の心配その他

新兵の炊事兵である私は何も出来ない。

もっぱら芋皮むき、水汲みくらいで、皆の重石らしい。うまいものといっても何もない、材料がない。ある時、新兵たちを離れた炊事場に集め、残り物を支給しながら、各人現在おかれている境遇を話し合った。入植者が殆どで、サラリーマン3人、入植者には父母・妻の他、子供、父母は60歳くらいが多い。サラリーマンは妻と子供の構成である。予想通り、この中の支柱となるべきものが全員徴兵されたのである。

何れも早々に帰って農作物の収穫を考えねばならぬ立場の人たちである。これが終戦時の惨事を生むとは誰も予想し得ないことだったが、なぜ大動員を在満者にかけてのか軍幹部は口を閉ざして知らぬ顔である。

われら分遣隊員は、全て私より若い人たちであり、子供も小さいから戦局が不利になれば後事を見てくれるものなし、その点我が家も同様だが生活は困らないはず、入植者より安泰である。

さて班長に約束した支那料理の件、幸いにしてこの地方の満鉄生計組合支所

長が分遣員の中にいたので相談した。(彼の住宅に一泊させてもらうこと、私が帰ったら支払う。)何れも了解の上、伍長と私ら二人彼の住宅で散々くいあらしめた。

この効果はてき面に表れ待遇がよい。また、あるときは支所長を利用、全員は除隊後支払うとして組合に電話し、明日〇時まで饅頭一箱を駅長室まで届けるように、各々6、70個ずつ注文した。翌日二人で行ってみる。うまそうなものがきた、私も喜んだ。他人の目の届かぬところで二人して満腹まで詰め、残余は並べなおして宿舎に帰り、夕食時に一人で賞味した。

この山中でこんなご馳走があるとは誰が予想しただろうか。彼らはただ驚くのみ。

翌日から班長兵隊どもは私には頭が上がらない。私は考えた。この兵隊を釣るには食べ物に限る。将校だって同じだろう。老将校ならいざ知らず、若い連中は兵隊と同様と思った。

この山中の夜は真っ暗である。谷間の掘っ立て小屋に毛布3枚で寝ている。心配した蚊もいない。すべてがのんびりの生活で、何の夢も見ない。私が分遣する折、ともに考科表を扱っていた新兵に秋田出身の男がいた。彼は書記終了後は秘密電信係になるという。別れるときはあの8月15日が分かり次第連絡してくれるよう依頼した。彼は約束どおり実行してくれた。8月15日間違いなしと伝言してくれた。何よりもうれしかった。なのでその旨みなに伝えた。みんなも大変喜んだ。

## ノコギリと小刀で小屋作り

本体の通知が来た。2部隊がこの谷間に移動すれば場所が狭い、いかようにするものか。然し来たものは馬車隊のみ。部隊の編成などは分からない。知る必要もない。8月には除隊するのである。それが待ち遠しいのみ。

部隊到着早々宿舎の建設だ。木を切る者。木皮をとる者。藤つるを集める者。建てる、締める、葺く、その早いこと、夕刻までには出来上がった。使用道具はとみればノコギリと鎌、各自持参の小刀で出来上がったのである。

考えた。小刀一丁で大抵のことは出来る。また作らねば成らない。ことに戦地ではかくあるべきと思う。何事も軍人は率先して事を行うべしである。

私は白樺の皮はぎであった。小刀で丸く幹周囲を切り込み、縦に1本切り込めば易々と皮がむける。これで棟木を包めば出来上がりである。隅々の雨漏り

防止にも使用した。

私の場所が一番奥の割り当て、真ん中を通る故に奥は静かな場所であり、下士達、古参のものは中央に位置し、入り口まで全員決まったが、入り口はうるさい場所である。私は特待されたい。夕刻寸前やや太陽が隠れる近く、この新築家屋に登ろうとして落ちている者がある。不思議なことをするものと見ているとまた屋根に登ろうとして草をつかんで落っこちる。これは不思議な男と思ひ声をかけた。

私「おい一寸待て、お前は屋根に何のために登ろうとするのか」

彼「ハイ。私は〇班のものだが鳥目であってもう見えない。班に帰ろうと思うが分からぬ。済まぬが私を連れて行ってくれぬが。」

私「よろしい、連れて行く」と案内した。

ああ、なんと悲しい兵隊だろう。これが日本の精鋭と称するものなのか。このような者まで召集しなければならないのか。軍のより方はいかがなものか。これを見て私は二等兵一人一人を注意深く眺めた。不具の物が、片足不便な者、左指欠落者、目の悪い者、軍は召集するにも程がある。いま少し在満を見てほしかった。若ければ黙って眺めるだけだろうが、私は一番の老兵なのだ。理不尽なことは許すことは出来ない。生一本の私は軍幹部を憎んだ。

## 駅に分遣

うるさい老兵と思われたかもしれない。また、若い者には下級兵とはいえ使いにくい者だったのである。私等満鉄員二人と古参上等兵の3人で近くの駅に分遣させられた。駅近くに蒙古包を組み、乾草を厚く敷き詰めた宿舎である。私は喜んだ。いつでも自宅に電話が出来ること、上官がいない、敬礼する必要がないこと、駅から本隊へ連絡兵であること、連絡がないときは寝ていてもよい。本隊から三度三度食事を運んでくれる誠に有難い立場である。この生活を続けて除隊となれば満点である等同僚と話していた。

この駅には常駐の日人線路工夫長がいるのを幸いに時折入浴を依頼し、なお生計組合購入予定（私自身の注成品、酒、タバコ、砂糖、牛乳の類）品の貯蔵を頼んだ。これは前掲兵隊釣用の餌である。川一つ隔てたところに軍の米・砂糖の貯蔵所がある。私は酒を供給し彼らより白米・砂糖と取引した。

本隊より食事を供給してくれる者は一等兵、若い男が馬に乗り飯盒下げてやってくる。私の息子のような男だ。誠にかわいいものだが彼は私を呼び捨てに



する。この野郎と思うけれど一級上だから苦笑せざるを得ない。ここが軍人、仕方ないのである。心を取り直して砂糖をあげる。部屋に行ったら食べなさい。

1日3回食事運びごとに全部進呈できない。変わったものがくれば何かを進呈した。牛乳やタバコは大部分使用した。その効果はあったが次は上等兵が来る。最後は班長が来るようになった。「オーイ、桜堂飯を持ってきた。」大声で叫ぶのを見ると、班長殿が馬上ゆたかに飯運びである、面白いものである。一方の上等兵等は眼中にない、主役は私なのである。明日来られるなら水筒を持ってきなさいという。翌日は早速、白酒1本を進呈した。ある時は白酒2本を進呈した。その日の夕刻しばらくぶりで本体に帰ってみると、何日ぶりかで同僚と顔合わせができた。

毎日遊んでいるので就寝しても疲れもなく、うとうととしている。多分10時ごろと思う。目が覚めた。隣の同僚が昼の疲れからか熟睡中。

小屋の中ほどに淡い光が見え、4～5人が何か話をしながら酒盛り中である。聞くともなく聞くに、

甲「班長はどこからこれを手に入れたのかえらいもんだなあ。」

長「これは分遣している桜堂がよこしたものだ。」

甲「ああ、あの在満二等兵か？ あれは何者なんだ。」

乙「あの男は満鉄勤務のなかなか顔の広い男だ、家族は白城子においてあるそうだ。でもこの北満でこうして物資が手に入るんだ。驚いた男だな」

ほめられて覆面の男もむずかゆかった。

彼らのこそこそ話を聞きながら眠ってしまった。山は静かに眠っている。馬の音さえ聞こえない。時折目覚めては夜半の彼らの話を思い出し、やはり私の食べ物作戦が当たったんだなと、内心面白くて仕様がなかった。

## パラソル列車のこと

毎日包の中でラジオもなければ何のニュースも入らない。7月半頃と思うが、何の気もなくホームに出てみると、長い編成の無蓋貨車が満員の婦人・子供をのせ、色とりどりのパラソルが夏の太陽を受けて満開である。

驚いた、驚いた、今時こんな列車が走るとは……………？

ホームには偉い人達が見える。私は二等兵、この婦人たちの面前であの連中に嫌いな敬礼をせねばならないとなれば、私の自尊心を傷つけることになる。早々に引き込んだ。いかなる人たちであり、また、何のためなのか知ることは

出来なかった。後程線路工夫長に聞くと、あれはハイラル方面の軍人の家族の引き上げとのこと、なぜ……………？

北満には軍人の他日系警察隊その他多種の日人が多数働き、国境警備に苦勞している人々がおるが、その列車で同じく引揚げだろうか？ 置き放しにしたのではあるまいか心配だった。

全員引揚げとなれば決戦に臨むに足手まといもなくなると自分ながらよく解釈したが、1ヶ月後の敗戦に取り残された人々及び家族は悲惨の限り、軍のみ先行、後は野となれ山となれの横暴であった。

## 本隊へ戻る

8月1日、私に本隊より帰隊命令が来たが、私は本隊へ帰るのが嫌で包生活を続けたかった。

本体へ帰れば作業あり、訓練あり、且つ又、軍馬を扱わねばならない。私は子供のころ(26~27年前のこと)農馬を扱ったことがある。ある程度なれているつもりだが、軍馬は栄養もよくよく手入れも届いている。実に元気がよく車を曳きながら逃げていく。小さな音にも聞き耳を立て鼻を膨らまし飛び出す。押さえきれない。下手をすれば車の下敷きになりかねない。セメント積の重いこと。乾燥積も同様だが車高2メートル50位の高さに積み重ね、それを抑える縄を如何様にかけるものなのか。古参兵は見かねて助けてくれた。8メートルより10メートルほどの丸太の運搬、玉の汗を流し愛馬と努力した。

担当馬は灰色籠目の中隊一大型の体格で、よく私になつき顔を私の背中にすりつけるしぐさをする。また可愛がったので飼料を他の馬より多く、人目がなければまた餌を搔払って食べさせた。

ある晩、私が分隊の不寝番になった。初めての経験である。分遣等ばかりで規則的な生活をしていない。こんなことだから本隊勤務は嫌なんだと思っても、現実にはそうは卸してくれない。

ところでこの不寝番の要領等てんで分からない。同僚に聞くと就寝後入り口に立ち外界を警戒すること、巡察下士官が来たら敬礼し、全員〇〇名異常なし、といえは終わりという。下士は室内を見て帰るから敬礼すればよい。それで万事OKであるという。

それならお安い御用だ、と張り切って立哨していた。来た来た、若い24~25歳の下士、長刀をガチャガチャさせて、そこで教えられた敬礼と報告、彼は室

内に入る。早く帰ってくれと思う間もなく彼は出てきた。これが早く終わってくれれば私も床につけるのだ。

彼は出てくると同時に私の名前を呼ぶが、時折しか会わぬ彼は私を知っていたのだろうか。

彼「桜堂。」

私「ハイハイ。」

彼「二度返事することはいらぬ。」

私「ハイ。」

彼「お前は幹部候補生を志願する気はないか。」

一瞬考えた。40歳の幹候なんて考えたこともない。戦争長期化して軍生活も同様長くなるならば兵隊よりはよかろうが、私は8月15日に除隊なんだ。家族と離れてこのような生活は好ましくない。これは若人のすることだ、思想あるいは体力から私は不適確と考えた。返事をしなかった。

下士「どう考えたか。」

私「ハイ、私は二等兵で結構であります。」

彼は無言で隣の宿舎に行った。

後ほど考えて後悔した。何かもう少し頼りがいある返事ができなかったかな。

然し下士官宿は大笑いしたことだろう。

この頃6頭曳きの山砲が近くの山に引き上げるのを見た。ジグザグに登頂するのだが、屈曲点では車が横転し横になる。これを誘導することは大変な仕業である。御者の兵の真剣さ、見ていて汗を握るとはこのことか？万一車が横転すれば人馬ともその被害は多大である。

どこの部隊でどこに行ったものやら分からない。馬等利用せずにタンクのごときものを利用できないものかと考えてみた。下手な考えか？今の時代、日露戦の絵にあるような馬力本願の方針はいかがなものであろう。あの戦い以来すでに40年あまりすぎた現在、まだこのような状況なのか。私等が例の丸太運びに汗を流している時、道路上の高台に通称別荘が出来、将校大隊長らしきものが3~4人集まり、ビールで乾杯が見える。

羨ましくなり前の古参兵に話した。彼は元将校当番の経験者である。曰く、

「ビール飲みたければ将校になれ」



## 将兵は苦楽を共にする

何をか言わん。食もよし飲むもよし。然しこれは兵隊の見えぬところでやるべきだろう。

8月10日頃と想う。馬繋場で馬の手入れを終了し馬房の背後に立った時、上空でヒューンヒューンと飛行機の音がする。何だろうと見上げると、単葉銀色の小型機2機が私らの上空を旋回している。日本機にしては音が軽く金属音だ。敵機ではあるまいかと思う間もなく1機がわれわれの方向に機首を向け尾部を上げたなと思うと、同時に火を吹いた。プロペラと尾部が一直線ならば弾丸はわれらの方にくるが、外れていると思ったのでみている。続けて他の1機も低空からの襲撃であった。

私等には剣も鉄砲もない。鉄砲は遊挺蓋のない裸ものが5人に1丁、弾は5発、申訳程度の武器である。敵機が低空で来ても撃ってはいけないと叫ぶ声が聞こえるが、一方の中隊では数発の銃声が聞こえる。この襲撃で隊内は騒然となり、敵機より見えない場所への移動との命令。

その忙しいこと、荷物を馬車にして移動したが、どこを回ったやら覚えていない。馬を木々の陰に隠し、幕舎も隙間を見て張った。

落ち着こう落ち着こうと思うが、周りは真っ暗だ。風の音が遠くに聞こえる。時々馬の暴れる音、監視兵の高い声が真夜中の枕元に聞く、あの声は誰だろうな。落ち着かずうとうとする、隣の同僚は、よく眠る若い男。単身で何の心配もない。父母の夢でも見ているだろうか、羨ましいことである。

翌日はどこで手に入れたか1頭の牛を捕らえ、露兵ならず満州牛を銃殺に処した。その肉を煮ることが私の仕事だ。一人で肉を切り石油缶に入れ、ただ煮るだけ、何の味付けもない。薪を拾いながら煮方とはいえ沢山の肉、大多忙の料理人である。お陰でうまそうな部分は腹一杯頂戴した。同僚は何所に行ったやら、留守は私一人であった。その晩、牛肉を鱈腹つめこんだ兵隊は深い眠りに陥ったのである。私は熟睡することはとても出来ない。大小の音はすぐに耳に届く。

## 特攻隊の出動

午前1時頃と思う。蜜語が聞こえるので頭を上げてみると、班長やらその他3〜4人がヒソヒソ話。聞くとともに耳を傾けると、大変なことだ。特攻隊の選定である。私もその選に入ったのだ。誰かがいった。桜堂は満州に家族がいる。

しかも年配者である。若い者にしてはどうか。私は安堵した。午前二時全員起床の号令が静かになった。

命令「今露軍がハイラルより当地に向け進入中である。よって我々はここまでの一本道路の両側にタコツボを掘り、破甲爆雷を抱えて敵戦車接近を待ち、目前にして戦車へ爆雷諸共突っ込み、戦車の前進不能にする任務である。大略このような命令だったと思う。

そして出陣者の名を呼び上げた。ああ、来るものが来た。ノモンハンのときはビール瓶にガソリンだった。今度は爆雷か。あのガソリン戦で何ほどの兵隊を失ったものか。そして赤軍に大敗を喫した。

8名の呼び出された人々の気持ちはどんなだったろう。幸いにして私は間逃れた。このとき支度を整えた人々が8名集まる中から、忘れられぬ小藤という兵長さんがわたいしのところに来て曰く、

彼「桜堂、今夜私は決死隊で出かけるが、明朝8時前後までここへ戻らない場合は、爆雷諸共散華下ということ私の郷里へ知らせてくれまいか。」

と住所宛名の紙片を私によこした。

私「分かりました。然し落ち着いて敵をやっつけて下さい。

幸運を祈ります。」

8名揃って暗闇の中に姿を消した。真に悲壮という他は無い。この人たちは明日はおそらく帰れまい。全員の無事を心から祈った。

全員出撃の後には誰も饒舌なものなし。何となく空々しい。明日は、また我が身かもしれないと各人は考えていたのではあるまいか。

翌朝早々全員無事出帰って来た。その嬉しかった事よかったよかった。昨夜は敵が出撃してこなかったという。幸運であった。

決死隊無事帰還、舎内は食事の支度やら馬の手入れで何の作業も無い。午前11時ごろ、ハイラル方面より大太鼓を打つドーンドーンと音がする。思うに8キロ位遠方の大砲であろう。20発位の弾音である。いよいよ敵さん近くなった。

正午過ぎ重爆が白城子方面より飛来して大興安山脈の線路がブハトの指令所を目標に爆弾を降らせる。現在地よりさほど遠くない距離である。重爆機体より離れる爆弾は、数をかぞえられるが、すぐ見えなくなる。そのうち地球を貫くようにズシンズシンの音が響く。

## 敗戦への道

ああ、我々は8月15日（明日）除隊なんだが、このようなことでは除隊どころか明日は決死隊だと思ふ。家族を想う。重爆が白城子方面より来たのを見ると、彼の地はやられたに違いない。

とすると家族はどうしたろうか。敗戦の心の準備等は到底考えられない。男だ男だと想えども私には迷うばかり、心の動揺甚だしい。

唯々家族の逃げ惑う姿のみ浮かぶ。5人の子供を妻に託したが、全員爆撃で一緒に死んでくれればよいが、万一散りじりになり、野良犬のごとく満人にあしらわれるままに生きているとしたら等、このように思うと居ても立っても居られないものである。おそらく召集の在満家族の全員は、口にこそ出さぬが同じ気持ちであったことと思う。

隊内では何の訓練も無く静かである。班長曰く、  
「どうも日本は負けたようだ。広島、長崎の原爆で陛下は勅旨を出し、全軍停戦だという報告である。だが関東軍は赤軍と一戦交えんと停戦に反対している。次の報告あるまで静かに行動せよとの命令である。」と、また考えた。武器のない兵隊でどうして一戦を交えることが出来るのか。上空は敵機のみ、我が方の飛行機はどうしたのだろうか。5月の召集、7月の召集は唯数を合わせるためなのか。何もかも矛盾だらけの軍の幹部はどうかしているのではあるまいか。

軍不信の念が募るばかりである。

## 退却

退却という言葉は日本にはないという。

これは予定の行動と称するものの敗戦もない。これも終戦と言う。誠に考えた言葉である。真夏とはいえ8月半ばの大興安の密林の夜は寒さも平地とは異なり、2枚の毛布では冷えびえする。眠られぬ夜である。真夜中の人声にふと目を覚ませば、昨夜のごとく分隊長等の蜜語が聞こえ、聞くとともになしに毛布にくるまっておると、また驚く報告である。

班長「今命令を受領してきたが日本が降伏した。明日ブハトの街へ予定の行動に移ることになった。ついては、兵隊、特に在満出身の者が動揺するかも知れぬゆえ秘密にすべきだ」

甲 「それは本当か、今日本が降伏するような状況だろうか。なぜ降伏するのか分からんじゃないか。」

班長「何でも原爆のために市が全滅し、市民は全部死亡のため、陛下は降伏を決められたという。だが関東軍は一戦を交えて満州を死守せんと中央に申請したが許可なし。これで事は終わった。露軍はハイラルを占領後まもなくここに来る。至急平壤までいきたいので抵抗をやめてくれと言っている。」

甲「何とつまらぬことになったな。私は関特演（昭和14年頃関東軍の兵備拡張である露国への威圧作戦兵員170万と称す）以来度々召集され、今度は敗戦か、ええくそ。」

一瞬何か抜けたようだ。本人の苦労を思ってであろう、静まり返って言葉が続かず各人は黙り込んでしまった。

ハイラルより単身草葉にかくれ、夜は狼ほえる広野を出来る限り歩いて原隊までようやく辿り着いた。軍曹の彼の地における戦闘状況を聞いた。

10日頃の戦闘と思うが、わが中隊長は名誉の戦死である。部隊長は鱈腹愛用し小用のたれ流しという。また、自動車隊の中隊長は車両に家具を積み込み、「我先行す」と称して、部隊を逃げ出したそうだ。自家用家具を積んだとはこの部隊長の胸中を測るに滑稽そのものである。

蜜語は止まった。あたりは矢張り山頂吹く北風がはるか天井に聞こえる。頭中は大混乱、教育召集でも現況の日本の立場から見ると、あるいは帰れなくなるかも知れぬと妻に書置きしたが、それが現実となって現れた。敗戦捕虜家族との生き別れ、何とあわただしい胸中の去来ぞ、伝令が来た。命令通達された。

中隊長命令、全員出発準備、車輛〇輛、残余はそのまま、食料〇〇箱、被服は全部携行、ただ今より1時間、点呼、整列、現在時間午前1時、終わり。

かくして、来るものの予定の行動が来た。連行しない馬は放馬せよ。命令品（私は乾パン5箱）を積み整列した。午前2時頃出発したが、何分にも足元が暗くて歩けぬ。馬の口元にぶら下がりながら歩いた。唯家族を思うのみ。同僚の家族持ちも口は堅いが同じだろう。

駅の傍を通るとき狭いながら駅前広場がある。その中には何処から来た兵隊やら、銃を携行した兵隊で満員である。乾燥魚や菓子が広場一杯でそれを踏みつけている。

路傍の兵「君らは何処に行くのだ。」

軽重兵「何でもブハトまで行けらしい。」

兵 隊「今列車が来るから一緒にチチハルまで逃げてはどうか」

軽重兵「私には馬がある。軍律、軍律。」

兵 隊「何ぞ降伏だもの。軍律などおかしい。一緒にいかないか」

軽重兵「これでお別れだ。後は荒野の枯れススキ・あばよ。」

車両は暗い道、魚や諸々の色物の上を音を立てて交代する。真っ暗なためやはり道幅が分からない。前車に続きさえすれば道を踏み外すこともあるまい。家族は今頃どうしているのだろう。

馬の口を押さえながら進む。突然1輛の馬車が暴れだし列外に出た。一散に走り出す音が聞こえる。危ない危ない。「早く前方を塞げ」と叫ぶ声がある。然し真夜中、自分の車を考え塞ぐ者なし。

ようやく先頭の班長が乗馬を横にして塞ぎ止めた。乗車の兵は誰だったか。怪我もなく急ぎ馬に追いついた。班長が叱り飛ばしている。

我愛馬よ、決して飛び出してくれるなよ、静かに行進してくれ。車の荷物に気を配りながら行進する。やや薄明るく道が見える。今我々は大興安の山裾を歩いている。左右の山は樹林が鬱蒼と茂っている。山合いの小道を歩いていたのである。明るくなる。前方はラクダの一隊が右方の山より下りてきている。これを見て馬は驚き、鼻を鳴らし。ホーブルブルと耳を立て飛び出さん勢い。とっさに右側で口元を押さえ頬をなでながら沈静これ努めた。夜が完全に明けた。

明るい中に見えるものは大変な物資である。昨夜から見ているが菓子、魚、タバコの多量なこと。道路一面散布というほどである。大包みのタバコは拾った。菓子は夜露にぬれてダメ、勿体無いほどである。どの部隊が労力をかけてすてたものなのか。後続部隊への贈り物ならば、丁寧に積んでくれれば、甘味欠乏の兵隊は何ほどか喜んだものであろう。何を考えても次に来ることは敗戦の痛さ、情けない痛さ、この状態から見れば今日は武装解除されるんじゃないか、等大声で前後の兵と話し合っ歩いて。私等の前には大部隊が通ったようだ。現時点で6時間くらい歩いたようだ。

後方に飛行機の音がある。上空を見ると複葉の竹トンボがあたかもトンボのごとく軽い音でブーンブーンと我々の上空に来た。敵のものと分かったが誰も隠れないし、また撃とうともしない。先ず我方の弾丸からしてない。方法なし。

この地は満州でも有名な狼の群生地、1年 1〜2回 300 頭位の大群を見ることが、狼も大兵団には恐ろしくて姿は見せない。

今後我等の行動は思いやられる。逃げるも丸裸。乾パン5箱積んで、一人広野を逃げ、妻子の所へ到着することが可能だろうか。否、々、満州には不満な生活を強いられた恨みの満人が途中妨害すること間違いない。殺される憂いもある。

略奪にあえば生命は奪われる。万感胸に迫るとはこのことか。重い足を引きずりながら行進した。重い重い心である。10 時頃予定の街に到着した。昨日までの話ではすで



に当街は焼き落ちたはずだが、壊れた建物など見えない。へんだな。戦闘司令部がチチハルまで後退するなら相当破壊されたのに違いない。と想像してきたがこの状況を見て先ず驚いた。司令官はどなたなのか。何と逃げ足の早いことだろう。南方戦線でもこのようだったのだろうか。これが作戦ということだろう。ハイラル生き残り軍曹の話が思い出される。彼の話によれば途中の山腹には 50 人位の兵が戦死し、タコツボ潜入の決死隊は鉄カブトを打ち抜かれてあの世に行ったそうだ。

路傍に倒れている死者には生草などをかけて冥福を祈った。何処のどなたかも分からない。3日も食料なしで谷間の水を飲みながら、原隊に辿り着いたという。偉い男と言うほかない。

街の外側で休憩中、当地で見習い士官が来た。我隊の隊長と何か打ち合わせしているが、兵隊には知るすべもない。近くに大きな兵舎が見える。兵隊の姿は全然見えない。満鉄社宅から満人が日人用のフンを抱いて出てきた。日人脱出後の後整理か、濡れ手に粟ということなのだろう。

見習い士官はすべてを知っているらしく案外落ち着いている。子供のように振る舞い馬を飛ばしておるのが気がかりだ。思うに戦争終結により帰還し、父母の元に帰れることを喜んでいたのであるかも知れぬ。

当時を思うに露助は帰す、帰すといっていたのを見て無理なかつたことと思われる。

## 武装解除

後方は見えないが1キロ以上の列が続き、われらの順番が来たようだ。軍属姿の日人か朝鮮人か分からぬが鎗をついて我々のところに来て、武装を解除しろという。私は牛棒剣しかない。少し前進するとそこは銃の山、牛棒剣の山、アア、こんなことなら山に捨てて来れば良かった。ここに集積せよとの命令だ。無惨、敵に渡すことの情けなさ、然し今更如何ともなし難し。

今日は武装解除の命令を秘して我々を個々まで誘導し、軍規厳正に降伏の門に入れてくれた。

思うに軍門に下った経験のないものばかりだが、在満者の逃亡ばかりに気を使い、軍規ばかりを呼称していた隊長は、偉いのかバカなのか二等兵には判断がつかない。丸裸の我々を、彼軍属が一人一人身体検査をして歩いている。誠に横柄なやつだ。

兵甲「おいあの奴は何者だ。」

乙 「横柄なところから見ると日人じゃない、負けた兵隊に威張っているから将校かな。」

甲 「それにしてもひどい奴だ。前方の兵隊はあの棒で殴られたよ。」

丙 「敗けたとはいえ日本の軍規は厳正だよ。」

乙 「ハハー、来たな将兵苦楽を共にしか。」

丙 「然り、ビールのみたければ将校になれだよ。」

敗残兵の空しさは、このようにして日ごろの鬱憤を晴らしている。

丸裸の身、馬の口元をとり近くの広場に集合した。12時ごろである。三方山に囲まれた広場だが広大なもの、この中に大変な馬車である。昨夜より朝食なしの行軍、タバコのみでの来場である。大休止、次の命を待てという。飯盒に飯は一杯、菜は昨夜の肉の残り一杯である。山を出るとき炊事場にあった酒2本とビール3本を失敬して馬の首にぶら下げてきた、馬の首より酒入りの袋を下ろし、同僚と飲み始めた。朝飯抜きでも空腹を感じない。この異変がそうさせたのだ。

私は甘党で酒は殆ど口にしないのだが飲んでみた。どうせ運は天まかせ、『飲め。』と思ってやってみると、いくら飲んでも酔わない。ついに1本を平らげたが私の顔は温かい位。真夏の原野でこれはどうしたことであろう。このようなことは生まれて初めてのことである。同僚も興奮しているらしく、或は失望して天の一角を眺めている。そのうち西方からゴーゴと音がする。何かと思い眺めるに、大興安の中腹、昨夜我々が来た道先頭に白旗を掲げ夥しい数の車が下りてくる。

甲「やあやあ、来た来た。奴ら今まで我々の阻止にあい一步も来ることができず我々の後退によりようやく来れたんだな。」

乙「然し不思議だ。先頭の白旗は降伏を意味するのではないか。敵さん降伏かな。」

甲「いや我々は武装解除されたんだ。白旗掲げても降伏を意味しないだろう。次の赤旗、あれは停戦の意味かもしれないよ。わからない。」

乙「それにしてもあの続く車輛の多いこと。何百台だろう、日本のタンクが街の外で3台動けなくなっている。」

甲「心配するなよ。我々には自動車の代用に優秀な軽重隊がある。それがこの我々なんだよ。」

乙「ああそーっだ。なるほど優秀な兵隊であります。乾パン・500食(1箱100食)しか食べないんだからなあ。これじゃ日の丸も泣こうというものだ。」

皆で諦めの捨鉢的な会話で苦しさを忘れようとしておる。それにしても古参兵の何と

朗らかなことか、にくい位だ。やはり内地への帰還を頭にえがいておるのであろう。



## 3 捕虜と在露時代

### 収容所と露軍の略奪

全軍整列の号令で馬車を準備し先頭より3番目で整列した。さて今から何処に行軍するのか。一步でも家庭に近づきたいことを念願した。馬の綱をとり見たところ、何列か後方は見えないほどの大部隊である。他の部隊の合同である。

出発の号令と共に右翼から前進を開始した。1、2分と思う。開始早々ドカンという大音響と共に幅30メートルもあろうか一大火柱が立ち、馬車や馬が空中に飛ばされるのを見た。

天地も裂けるとの言葉もままよ、初めて火器の恐ろしさを見た。我ら縦隊の馬のみならず兵隊も肝をつぶすと同時に、馬は立ち上がりくるりと反転した。綱を引いてもなんのその、全力で車を引っ張り後方に去った。後方を見ると雲の子を散らすの例え、そのまま一大混乱を来たした。馬との間に倒れる者、また車が衝突するもの、転倒する馬車、車の下敷きになり負傷する者、全く敗戦地獄であった。

馬ははるか遠方に逃げたが分からない。指導者もいない。この場合どう処置したらよいものか。唯、啞然とした。事実何もない。裸になった衣服類は馬車に積んである。3人で集まり方法を協議したと思うが、今は覚えていない。蛇にらまれた蛙だ。

咄嗟に思う。露助がこの集団を全滅させるために1発放したのではあるまいか、など考えたが。

砲弾と違うこの大きな火柱、後ほど聞くと、例の破甲爆雷を多量に埋めて隠したものだが、他の部隊はそれを知らず通った結果だと分かった。

しばらくして私の背後で馬の鼻音が聞こえる。振り返ってみる。なんと我馬が荷を積んだまま、然も酒およびビール瓶を首にぶら下げてきているのではないか。うれしいやら可愛いやら、馬に頬ずり感謝した。第1線の戦場の敗走もかような状態なのか。我ら後方部隊も今日は前線兵と同じ苦痛を只今味わったが、前線兵はこんな程度ではあるまい。唯我らは徹頭徹尾武器なき兵隊でした。これは全く軍人として淋しい極みであった。逐次馬も集まり揃ったので前進した。

前方にまた一難来る。

街の両側に夥しい露兵の出迎えである。

先ほど山を降りてきたタンクの兵隊たちだろうが数が分からないほどびっしりである。両側で我々の動作を見ていると思う間もなく、露兵の一人が、将校めがけて腕をとり引っ張り出した。何事と見ていると、腕時計と胸の万年筆の強奪である。

開びやく以来のことだ。ただ唾然とした。強奪は時計、革カバン、万年筆を見つけ次第列外にひきだし、反抗すると2、3人で殴り飛ばす。ここで始めて日本の神様(将校)は全く無力化したことをまざまざ見せ付けられた。彼らのなすことに反対は許されないのだ。勝てば官軍、負ければ賊軍、戦勝国の日本も敗戦の彼らに対してかようだったろうか。慕われるのは日本軍だったろうか。パーシバル中將が山下大将の前でイエスカ、ノーカ、と迫られたあの子の事を思い出す。

乗馬をとられた将校は、黙々と歩く。下士官以上は全部乗馬である。お互いに時計、万年筆を彼らに見せるなど呼びかけながら歩く。見せれば必ず奪われる。

戦闘指令所の中に入れられた。司令官は何日に逃げたのか分からないが、所内は乱雑の極み、所品の軍靴や被服、食料の山であった。よほどあわてて逃げたらしい。焼き捨てるべき参謀部の地図が、地勢等を詳細記入したものが風に吹かれて飛んでいた。一般にはあまり用のないものだが。

## 収容所内の事ども

支那兵の弱さを笑っていたものだが、この期に及んで中將閣下のあわてぶりを思い浮かべ、何となくやり切れぬ感情と成った。

そのうち将校の長剣は全部庭に集積の命令である。神様も丸腰である。愚痴を言っても仕方のない事ながら、今日見た露兵と日軍の服装を比べて見ようと思う。大略ながら次の通り。

彼らにうち、将校らしき者は外套に金筋の幅の広い肩章をつけ、靴はズックの長靴にタールを塗り仕上げたようなもの、外套は土埃だらけ、帽子は防寒帽あり、また正式帽もあるが粗雑であり、兵も同様であるが上衣は満人の苦力が冬着のような厚手の綿服と思うが、肩章が見えない。また帽子は防寒帽での色あせたもの。車輛部隊のためか服装も顔も土ほこりにまみれている。

我方はいかが。見慣れているとはいえ、短胴上衣に乗馬ズボン、何れも美しいラシヤのもの、長剣にカバン、靴は黒皮のナメシもの、日軍の下級将校は黒を利用しているが、在職中に出会った将軍たちは言い合わせたように褐色である。

両方を比較してみる。矢張り彼らは物資極力欠乏の中に生活し、困難に耐え忍び、勝利に導いたもので、我方の参考になることばかり。耐乏生活のその見本はシベリア線で西方に送られるとき、住民の生活を見て考えさせられた。

将校の愛刀は町で手に入れたものやら、伝家の宝刀も沢山あったと思う。戸外に積み上げられたものの中には惜しい名刀もあったことと思う。何せ将校の自慢の種だからである。

そんなこと知る由もない露兵はこれを持ち出し薪切りやら遊び道具とし、一刀のもと松木やポプラを倒して喜んでいたという。

指令所の東方に小高い丘がある。彼らは牽引車で簡単に山砲を引き上げ、砲先は我等の幕舎に向けられた。万一の時は一度で吹き飛んでしまう。先刻の爆発のごとくに。

幕舎の前で乾パンを下ろし、馬は一本の太い綱に繋ぎ止め幕舎入りした。その内、露兵が馬を取りに来て次々と乗っていく。彼らは機械化兵と思うが、馬の御し方が上手なことに驚いた。私らは手綱を引締めて御するが、彼らは長々と垂らしたまま、プラプラの状態で馬を御する。とても我々には出来ない芸当だ。我隊に噛みつく、蹴るなどする恐ろしい馬がいるが、誰も手をつけない。手入れは古参の専属兵が扱い、班長のみ乗る別格のものがいた。露助は知らないから次にきたら何事か起こる。怪我でもすればよいなどと話し合っているうち、露兵が来た。

皆の目が一斉に注がれた。彼露兵は、口でキューキュー鳴らしながら馬に近づく。かじりつくかと思えば、おとなしい。蹴るかと思えば動かない。やすやすと鞍を置いて乗馬し、ゆうゆうと出て行った。見ている全員唖然とした。我々と腕の相違が確然と示された、その無念さ、古参兵は一口も何も言わない。次々と来る彼らに、我愛馬今日まで同行したのを持っていかれた。

愛馬との別れ、塩原多助とは一寸違う。この馬が昭和 24 年 10 月下旬、我が家西方中空に大きな輪を描き、その中に素晴らしい美体で姿を表し、美しい頭を左右に振り動かしながら、逐次遠くに消えていった。が、顔・前足の美しさは、私の脳裏から離れない。夢の中で見る物語のようだ。

一方柵外を見ると 1 台のタンクの上に自動軽機を抱いた兵が見守っている。私はこの銃を始めてみた。我軍のものは、日露戦以来の単発銃である。誰の命名か知らぬ。が、マンドリンと称し、銃の中央には映画のフィルム入れのごときケースが銃についており、中に 70 発が仕込まれている。一人の兵隊が連続 70 発の弾丸を撃つことができるのである。年中首にかけぶらんぶらんしている。これで我々が対決したとすれば、一

発必中にならない限り、我らがアウトになる。

遠く独露戦には、ドイツの発明に係りすでに利用されていたという噂を聞く。今回ロシアからその銃で日本が攻撃を受ける。

また考える。独及露の大使館には、陸軍及海軍の駐在武官として、中将級の者、及びその副官が大勢居ったはずだ。机上の作戦のみ考え、兵器類を頭に入れることが出来なかったものだったのか。我等の馬部隊然り、我らが 6 時間余りの時間で到着したブハトだが、彼らのタンク隊は 40～50 分で来たようだ。

捕虜第 1 夜は幕舎の中で、矢張り昼の残り物と馬が首に下げてきた 1 升である。昼間同様飲んでみた。心身に疲れが来たか、少して真っ赤になった。残余の酒は古参兵へ回した。酔いすぎた。これ幸いと老年兵らしく上も下もない。現在、少し話してやろうと思い大声で言った。大声ゆえ小さな幕舎は静かになった。

「日本は完全に負けた。日本の再起は不可能に近い。理由は多々あるが第一、日本の政治が悪い。松岡とスターリンが中立を結んだとき、松岡は満州里で社員を集めて中立条約の効果をのべた。その時、社員は狐と狸の化かしあいだ、何れが勝つかといったが、ついに松岡は負けた。中立条約なんてロシアは糞食らえではないか。第 2、科学の力不足、精神力だけではダメだ。日本が再起するには東京にいながらロンドン或はモスクーを映し出せるテレビと、前記の土地まで届く殺人光線を他より一足早く完成させることが出来れば、明日にでも日本の再起は可能と思う。」

一気に喋りまくった。酔いも完全に回った。古参兵は聞こえたか否か横にごろりと寝込んだ。朝まで起きなかった。

一夜明けてみる。何と兵隊の多いこと、銀座の歩道より混みあっている。早速飲料水の不足を聞く。くみ上げる水は褐色である。奪い合いの状況である。顔を洗うことも出来ず、炊飲用によくこの水を獲得した。この水で朝食を得たのである。

朝食を済ませた後は何の用事もない。ニュースもようやく、昨夜門前で兵隊が撃たれたという、遊んでいても食事は忘れない。昼になると携行の箱から麦を圧縮したラクガン様なものを取り出し、どうするのか見ていると、ぬる湯にひたし静かにかき回す。余力を入れると糊になる。

頼りない食事だが携行の米はない。朝食で終わりなのだ。これから軍用ビスケットあるのみ、幕舎に寝転んでみる。すぐ家族のことを思う。安否を考えると頭が重くなる。

今までのことを想起すると、関東軍の衣料及食料は莫大なもの、今後 3 年くらいは維持できたとのこと。だが、これに反して少なかったものは兵器と弾丸で、わずかなものと思う。独軍敗戦後の露軍は、全力を東方に向けている。この軍と日軍がどうして戦い得

ることが出来ようか、補充兵を 5 月、7 月の2回にわたり召集してもただ殺すだけである。

## 悲しい開拓の人々

入所以来毎日暗澹たる生活を送り、数日過ぎた頃、私の入営召集に赤紙を手渡した所長がぶらりと現れた。これには驚いた。曰く、「君が入営直後、私は保線科長になり、本局勤務となった。今回君らはブハト収容所に居ることを聞いた。その他の社員多数がここに居るはず故、救援のため米、うどん粉、油、菓子を積んで、総務部長を先頭に立て、1 列車を編成迎えに来たが到着早々露軍に取り上げられ捕虜となった。何の食料もないため困っている。貨車に行くことは禁じられなんとも方法がない。ところで食料のことは君のところで余裕があるまいかという。

それはなんとも気の毒だ。私たちのために苦勞されて申し訳ない。私は同室の古参兵には相談せずに私の箱の中からビスケット5, 6 袋進呈した。古参兵は何も言わない。馬車隊は何か食料を積んできたが、一般の兵はどうだろう。科長の話は続く、ここに来る途中の開拓団のいるところでは、満人が入植者の老人婦人子供を迫りまくり逃げ惑っているのを見つけ、下車して満人を追い払い、この人達を各駅に収容してきたが、私たちは帰れないとせば、あの人達はどのようにして居るのだろうか。空を見て話していたのが私の胸にはっきり焼きついた。

予想はついてしたが、在満留守家族はかような状況下に置かれているのだろう。無蓋貨車のパラソル列車、一方でこの悲惨な話。なんとも割り切れない心境である。

後ほど聞くとところ興安の悲劇、男は殆ど殺されたらしい。満人には妻を買うことの出来ない苦力と言う独身者が沢山いた。彼らはこれ幸いと婦人を略奪し妻とし、子供は育てて売ると言う。よく一般満人と話したとき、娘は売るのではない。結納金の高い方に嫁がせるのだ。美人ほど高いと笑いながら話したことがある。

不思議に思うことは、私が最初チチハル奥に赴任したノンジャン地方には、開拓団や開拓訓練所があり、多数の日人家族持ちがいた。その支柱となる男子が 5 月、7 月の 2 回召集され、入隊していた者の家族はどうだっただろうか。今まで何の記録も見ることがない。興安の二の舞になったのではあるまいか。家族は満人に略奪されたのであろう。考えると誠に心痛むことである。

又東満チャムス方面の将校の話では、駅が日人及び軍人で一杯になり大混雑した。その中である婦人は、真夏とはいえ袖もない上衣に腰巻ひとつで箆を抱えていた。そして、将校に哀願した。聞いてみると開拓者の妻であり、夫は召集され逃げる途中二



人の子供は殺され、私は山の中に隠れながらここまで来た。何とか成らないか。との願いだった。窺の中をのぞいてみると、赤ん坊がくるまっていたと言う。涙なくしては聞けない、胸が痛くなる。

又科長の話进行出す。科長殿は今回停戦の命令が来たので、降伏じゃないとの結論から我々を迎えるにきてくれたもの、5 車両一杯の食料が惜しい。一時的にもこの大勢の兵隊に役立てられればと、露軍と交渉しても耳はかさない。腹が立って仕様がないう言う。

## 捕虜と生活

又淋しい夜が来る。マンドリンの音がする。2発だったり3発だったり。三八式の銃よりはよい。彼らは犬でも撃っているのか、日軍は？

幕舎内は真暗だ。顔も分からない同僚は、水筒に先日の残酒があるから飲まぬかという。この前は数々喋ったが、今回は手探りの宴で、酔うにつれ口惜しいと思いつながら酔いつぶれて眠った。

朝目が覚めると、家族のこと、話に聞いた開拓農民のこと、又召集兵の家族のことが思い出される。彼らもおそらく、この地に骨をうずめる覚悟で渡満したのでらう。今までの困難に打ち勝ち築き上げた地歩が、かような状況の下で、滅すとは誰が想像しようか？天のみぞ知る。敗戦。何もかも滅茶苦茶だ。己たちの前途は真っ暗だ。明日ありと思ふ心の徒桜？

我部隊長の命令が来た。我々はシベリア鉄道を迂回してウラジオに行く。ハルピン東方は馬賊のため列車の運転が出来ない、と。

何を言う。小用隊長、兵隊を馬鹿にするな。と反発した。第一何故鍋の弦のように経費をかけて迂回するのか。清津港に行けばよい。この敗戦から馬賊は解散するはずだ。万一行けねばチチハルから大連にいける。鉄道は同じ広軌の鉄道なんだから、然して満鉄本社は万全な筈。一人で憤慨したが始まらぬ。

又考える。我等の関東軍がここまで在留邦人を苦しめる前に何とか手段を取れなかったのか。226 事件以来 14、5年にわたる軍の横車の結末である。今までの日露の衝突を見れば、張虎峯の敗戦、黒河の騒動、ノモンハンの大敗、松岡の中立条約、何れも日本は正直すぎてバカを見ていることが明らかである。負けるときはしつしつと原因を作っているようだ。

司令所跡の天幕生活も1日ごとに哀れさを増してくる。食料は保存の麦がゆ、またはビスケットで体が変になる。露兵に撃たれて柵の下に倒れている兵隊には、誰も同僚



が名乗り出るものがない。所内は大混雑だから、すべてが御身大切になる。収容所内は水不足、数頭の残された馬が放馬され食料もなければ水もない。炊事用の少量の水を下げてくると後からついてくる。可愛そうだが誰も与えない。柵外に放馬することさえ露兵を恐れて誰もしない。その内庭に倒れる。空気を入れたゴムマリのように膨れ上がり、真夏のハエが真黒くつく。臭い臭いと騒ぐが誰も片付けようとしない。寄り合い所帯で統制の取れない生活である。これで何時の日にも国に帰れるものか？なすこともなく右往左往する生活が続く。この構内で2週間くらい過ぎただろうか。少し戸外で労働でもしてみたい。但し、軽労働だ。重労働でも押し付けられたら降参だ。気晴らし出来ないものかなど考える。

水不足のため柵外に出た兵隊が帰ってきての話、西方へ行く貨車の中から紙片が投げられたのを見る。私は今露領に連れられていく、もし連絡できる時はすまないがこのことを私の故郷へ知らせしてほしい。住所氏名記入してあるが忘れた。だがこの兵隊の念願など出来るはずがない。今は当方も同じ捕虜の身、自由がない。鉄柵の内の牛馬に等しいからだ。

皆はウラジオから帰れると期待をしているらしいが、私は前記の条件から考えて嘘とまで思うが、その先のことは想像もつかない。半信半疑より疑のほうが張々考えられる。四信六疑か？

暇なため種々のことを考える。万一日軍がこの装備、この兵力で勝利を収め、露領に進軍したならば、等空想してみる。日本軍はナポレオン君の二の舞を踏んだに違いない。何故かと言うと、夏ならばこの装備でもよいが冬将軍を迎えたとすると日軍の冬の衣料では動けなくなることは必定である。露軍は寒さに強い。零下40度に耐えるには日本の軍靴は15分くらいである。黙っていることは出来ない。休みなく足ふみだ。彼らにはカートンキーと称する靴がある。これはヘチマの繊維と動物の毛を混合したごときのもので、型で圧縮したものである。在職中の経験から見ると、中に夏靴下、外気温零下35度、モーターカーに乗りスピード35キロで走ってみる。頬に当たる風の冷たいこと、口元は吐く息で真白くなる。

然し足は全然冷たく感じなかった。私は黒川で内部に羊毛を使った長靴を愛用していた。が、靴の先端は冷える。型体は悪いがこのカートンキーはどの靴にも勝る。冬期間はこれを愛用したものである。

彼らの外套だが、冬期には襟の高い足も又隠れるほど長い。裏は羊毛のシューバーであり、この靴と外套で零下40度くらいでは広野で寝ていられる。次に軍馬であるが、この温度に耐えられるか、馬のまつげ、口、鼻は噴出す息が凍りツララとなる。ガランガ

ランと音を立てている状態、我ら兵のズック靴の内面に毛を貼り付けてある。将校は例のなめしの長靴、下士は一枚皮の長靴である、これで乗馬せよというのか。

零下 50 度を経験したが居ても立ってもいけないものだ。大切なことには機械用オイル、酒、醤油すべて凍る。酒のごときは 35、6 度で氷の酒が出来る。凍った醤油ができる。ビンは割れる。50 度の寒さを考えると身の毛もよだつ。

ドイツ軍のモスコウ敗戦も寒さのため自由にならず、食料もなくバンドを煮て食べながら退却したと聞く。この酷寒を征服すると同時に、敵に対決する研究が出来ていたのだろうか。私が皆に、古参兵にかようなことを時折聞かせる。古参は、何を生意気な、という顔である。然し露領で 50 度を超えたときは全く顔色がなかった。

## 収容所の移動と食生活

本部あたりから命令が来た。柵外にある軍官舎に移動せよとのことである。僅かばかりの荷を持って苦力(人夫)よろしく移動を始めた。ここは元軍官舎で、小さな建物が陸の中腹に並んでいる。その 1 棟が私等の宿舎である。玄関、押入れ、台所とありとあらゆる空間は私らの寝床となった。この移動で気がついたが、体が大変弱った。足がふらふらして大地を踏みつける気分ではない。官舎まで来る坂に大変苦勞したので気づいたのである。この頃栄養失調等の言葉は聞かなかった。官舎で畳の上に寝ることはうれしく、特に古参兵は自宅に帰ったつもりだったろう。喜んだ。

官舎に入ったところから古参に心理の変化が来た。特に悪質に見えたのは伍長軍曹の振る舞いである。何故か？将校が兵との宿舎が分離されたが故に、頭上に重いものがなくなったためである。軍規厳正な下士の天下になった。

1、2等兵を手足のごとく使い、一国一城の主となり、工場長のごとく優勢な地位を占めたことである。軍の倉庫から麦1俵、小豆1俵、小麦粉1俵を発見、兵に運ばせて持ち帰り砂糖のない麦オハギやマンジューだ。朝から作らせ誰はばかりとところがない。物あるうちの食いだめか、然も捕虜様だから愉快だったのに違いない。

訓練はないし、将校はいない。寝食放題、私らは老年の新兵余り頼りにならない炊事の火炊き位である。然し 30 歳前の兵はよく動く。

楽あれば苦あり。オハギの次は麦かゆが待っている。小豆が残っているが、誰も手をつけない。これ幸いと私が一人で頂戴した。大好物である。一日は大抵2食となり食い延ばし作戦が続く。新兵は相変わらず水汲みに薪作りに、風呂焚きと続くが空腹である。体が軽く足がフラフラの感じが強くなった。古参は朝から入浴である。こんな仕事に使用されるより戸外で毛布の乾燥でも、と新兵同士裏の草原に行き、毛布を広げ行く

末の話となる。舎内には金筋一本以上の兵ばかり、それでも自由を得て満足らしく帰国の話には花を咲かせている。私は毛布を広げた時には小さな虫には気がつかなかった。

他の連中も盛んに取っている。さて、私の毛布はとよく見ると居る居る大きな奴が頭を毛布に突っ込み尻を天井に向けている。何十年ぶりにお目にかかった大量の虱だ。隣の毛布から越境したに違いない。爪が赤くなる。

狭い居室に反比例してますます増える。想い出す度裏の草原に走る。毛布を抱いて出張する作業が9月 20 日頃まで続く。この間の出来事を記入する。ある夜露兵が3人で靴のまま上がってきて盛んに喋るが分からない。業を煮やした彼らは手当たり次第にかき回し物品の検査である。この時計だなど各自隠す。彼らは何の収穫もなく引揚げた。2, 3回同様の訪問を受けても何もなし。かような恥の中にいつまでいられるのか虱は全滅しない。

突然集合の命令が来た。露兵の指導下に5列縦隊になれという。大体一団5列 150番くらいだから750人だと分かる。ところが彼らは二列ずつ10,20,30と数え始めた。約一時間くらいの間前方より又後方より勘定する。初めてのことなので何のためか分からなかったが、精密な人員掌握をやるものだなと考えた、ようやく終了して聞くところ、近日中に出発のための訓練という。何処へ出発するものかそれは言わぬ。

さあ大変、各々の推理が種々さまざまに飛び交う。

甲「ハルピン経由で朝鮮に行くのではないか」

乙「否々、部隊長は満州里経由で行くと言った」

丙「大連に行かないだろうか」

丁「だが考えてみよ。今日も貨車はハイラル向いて走っている」

乙「あれはハイラルが相当破壊されたので後片付けに行ったそうだ」

然しながら安心は禁物だと思う。過日車中から紙片を投げた兵の後を追うことになりはしないか。一抹の不安が去らない、果たして無事帰れるだろうか、この編成から皆が浮き浮きして故郷のこと、妻子のことを語り始めたがなにか恐ろしいことが居ってくる気がしてならない。お互い心中を語り合う。新兵、古参者は世間の状態が分からない、唯黙って我々の話を聞いているのみ。

各々の想像話の賑やかなこと、朗らかな話の出来たことは愉快の限りであるが、何れが真か又涙の種か。

## ロシアへの出発準備

9月1日頃と思う。突然の集合命令。一切の見回り品を携行すべし。さあ一大変、いよいよ帰れる。嬉しいことだ。方向はどちらか、満州里は御免蒙りたい。鬼門である。ハルピン行きを希望したが、次の伝言は矢張り満州里だという。なぜ満州里？

それなら先日の兵の後追いじゃないか。前途は誠に不安になった。散々荷物を検査され、めぼしいものは全部とりあげられたが、何れ内地に帰れば又入手できると軽い考えでいた。大切にしていた私物・砂糖、バター、安全カミソリ、万年筆、時計等は取り上げられ、残ったものは合羽1着、毛布1枚、ビスケット5袋となった。15トン貨物を2階に区切り、約50名が押し込まれたため寝る隙もないほどだ。先刻より集合だ、検査だ、乗車だ。ふらふらの身は精神的に疲労が甚だしく、乗車して一安心したからか貨車の側板に背を持たせよう持たせようと眠った。

又突然に全員下車という。各車輛から下車し集合した。何事ならんと整列すれば又小用、部隊長か一段高所よりの訓示である。

- 1 軍規は厳正に維持すること
- 2 逃亡者は出さぬこと、違反すれば全員に罰を処されること
- 3 経路は満州里を経由してウラジオに行く
- 4 途中は露軍に逆らわぬこと

過日言ったようなことを隊長は再度訓示した。何を好んで遠回りするか、清津や大連に行けば三角形の一辺になる。経費をかける必要はない。何を好んでこんなことをするのか、騙されたな。

南満では終戦と同時に部隊は解散、自由行動に移ったと聞く。解散しない理由を考えた。解散すれば在満住人は喜ぶが、上級者や下士位のものには淋しい集団となるためではあるまいか。夜中、山中での命令を思い出す。在満者の兵隊は動揺するから秘密にするようにと。

車外は真暗である。露兵が監視しているという。夜中小用を催す。そっと扉を開けてみると、10キロほどの隣の信号所、推定すると4時間はかかったと思う。時計を失い生活はすべて推量となる。夜が明ける。小用にため扉を開けてみる。驚いた。車はまだ信号所の中にいる。車外はマンドリンを抱いた露兵が監視している。扉を開けるなどといったのは逃亡防止であったのだ。

## 大興安山脈越え

つい最近まで駅の近くには包を張り2ヶ月余り暮らしたり、馬と汗水流してこの奥で働

いた。その思い出の駅を今日は捕虜となり行き先不明の旅にでるのである。

「なつかしの興安よ、さようなら」と感傷的にならざるをえない。何故かという、この駅長室から我が家へ電話したり、その他駅長室を利用させてもらった。満人駅長である。又隣の工夫長の宅も種々利用させてもらった。皆と親しかったので特に印象が強いのである。

山を越えてハイラル高原を走る。線路近くに見る満人住宅は破壊されている。激戦の跡が見える。それにこの信号所には露兵が沢山警戒している。満人の姿は見えない。ただ広い草原のみが遠くで空と一致しているのである。興安越えて2日目、北満の1都ハイラルに着く。入隊したところである。徹底抗戦と聞いていたが車から見る限りにおいては壊れた家屋等は見当たらず。駅もそのままである。露兵以外は見当たらず。あの人々が逃げたか地下にもぐったか誠に寂しい街となった。この列車は誠に遅い。停車は2時間位。或は3時間かと思う。

ゴトゴト走る 15 ト、ン車、隙間から冷たい風が通り抜けていく。次の信号所で終わりとなれば明日は嫌な嫌な満洲里だ。運命の分かれ道と思えばなおさら嫌になる。地理など半端に知るから悪いのだと一人で叱ってみる。満洲里など知らないことにする。

## 国境越え入露

だが思い出す。2ヶ年前ハイラル水道工事検査を命ぜられ、検査終了後、満洲里まで足を伸ばしたことがある。その折、同僚の庶務主任の案内で街内を見回った。露兵の領事館を見る。国旗が立ててあり若いキビキビした男が玄関前に来た。

助役曰く、彼らはここまで列車を乗り入れ、満鉄の水道から水を積み込む。協定により水代は当方に支払わねばならないが、南方戦線の利不利を見て納入したり又滞納したりする。なんとも相手の悪い国だという。前方の国境方面を眺めると遙か向こうに小山のごときものが東北と南西に向け延々と続く。何かと聞けば鉄条網の山という。ここは我方の駅の間位と見るところに我方の望楼がある。柵の向こうの露領からは盛んに爆発音がする。主任曰く、多分日軍牽制のためと同時に、道路作りでもあるだろうという。初めて満洲里を見学でき、次は国境を越えて露領に進軍することを考えた。然し今日は捕虜の身である。来てみれば街は何一つ壊れたところが見えない。情けない敵は無血入場である。駅前広場では日本兵二人で材料整理作業である。満州最後の出発だ。心なく前方の広場を見ると前方の広場を見ると我等の貨車に向かい二人の日本婦人がハンカチを振っている。150m 位の距離に立ち別れを惜しんでいる。辺境警備隊等の家族ではあるまいか。パラソル列車を思う。矢張り軍は軍以外の人員を棄てた



んだ。だからかわいそうな人々が沢山出来たのだ。出来ることならこの車で行き先は分からぬが同乗させてあげたいと思うが、下車すれば露兵の鉄砲が火を吹く。見えなくなるハンカチ婦人たちは涙もかかっていたのだろ。何処のどなたか、主人は戦死かまたは露領にいったか。

私もパラソル列車さえ見ていなければ、これほど軍に不信感を持たなかったかもしれない。我等の貨車は今例の鉄条網にさしかかろうとしている。その状態や如何と目を見張る。

推定ながら巾20m、高さ20mの三角形有刺線は、十重二十重で犬も通れない。網の切れ目に満洲へ向かう通路があり、車両通過の跡が一条満洲里へ通じている。鉄条網の両端等は全然見えない。矢張り延々雲と一致している。又思う。私はここを進軍したかったのだ。例の満鉄列車と共に。

## 露領へ第一歩

この柵を越え3キロ位か草原の中に煤けた小駅があり、又少しの距離に信号所らしいところがあった。然し私には何を見ても見えない、聞こえない、唯部隊長の言ったシベリア経由ウラジオへ行く線路の分岐点のことばかりである。もうさほど遠くないところに分岐点があるはず、それを見つけようとばかり一心だ。

シベリア線は単線だから一筋だけ分岐も一ヶ所のはずと決めたが野草が背丈もある。見落とすまいと思ううち小さな鉄橋があり、そのわずか先に分岐があった。余り手入れもなく、もしかすれば引込み線の分岐かと思ったがその他には見当たらなかった。

分岐より列車は西に向かい、1キロ半ほどして停車した。粗末な駅舎である。これで万事休す、全く胸が張り裂けんばかり、しかし方法がなかった。機関車の入れ替えもなく、すぐ西方向かって走り始めたからである。10分も停車しなかったからである。駅の棟には駅に似合わぬ立派な写真、1m角と思われるスターリン、モロトフその他3名位のもものが掲げられている。続く各駅には全部写真がある。何のためだろうか、いよいよ我々はモスクー行きが決まったようだ。遠く独ソ戦を思う。貨車に乗った兵が輸送される。写真、それが今我等の番に来たのである。

3駅位で大休止となる。憲兵も近寄らない。栗が配給になる。炊事を始める。何処から来たのか大釜がある。薪を集め、炊事軍曹は一心に指導する。我々がハイラル出発以後4日ほど経過したが、露兵よりの食事支給は乾パン15ヶのみ、空腹であるが、今後の運命を考えれば不足もいえない。待望の飯が出来上がらんとしたとき露助は出発命令、炊事係は手際よく半煮えの栗飯を各々の小樽に移し終わった。彼らの思惑は



炊事を投げて乗車する。その後始末は住民に進呈となる。意地の悪いものであった。

炊事中集まってくる住民を見た。この寒空に彼らは素足であること、衣服はボロを下げている。この戦争で住民は何ほど節約を強いられたものか。駅に着くたび各駅には忘れなく写真が掲げられている。よくも根気よく掲げたものと思う。翻ってこれを日本に適用したらどうか考える。各駅に総理以下の写真を掲げたことを。彼露国は昔からの強権国家でご無理御尤と来た習慣が続いていると思う。又働かざるは食うべからずの鉄則のもとで。

ノルマ未達成者は配給に預かれないのかもしれない。その結果だと結論した。

## 露兵の掠奪その他

入露以来毎日 1 回は露兵の訪問を受ける。貨車の扉は開けておくことは出来ない。走行中は寒風が入り込むので、停車すると兵隊が来る。時計を出せ、万年筆を出せである。私らは外の景色を見ることは僅かである。停車中に彼らはわれらの車に来てドンドンと叩く、開けない。車内外で彼らと闘う。ついにバールを持参して開けにかかったが不首尾に終わった。全員で扉を押さえたからである。

停車時間が誠に長い、2 時間位もある。彼らはいちいち指令を受けて行動するようだ。この間、地方人との接触も多く毛布が欲しい、強奪である。彼らは地方人に売り、赤い札のやり取りが見える。露兵が来ると扉を閉めて入れない。ホームには素足の男が松の実や、フレップの乾燥物を売っている。内地では思いも出せぬ状況である。

淋しい夜が訪れる。周りの新兵仲間と今後のことなどを話し合う。シベリア迂回の馬鹿げた命令等である。然し我々の車輛は西に向かっているといっても彼らには分からないようだ。それで扉を少し開け、北極星、北斗七星を教えた。「あの北極星が我等の進行方向に対し右側に見える間は、この車は西方に走っている。左側に見えれば待望のウラジオに行くんだから見て居給え」。

私たちは毎晩これを見て悲しみを味わった。

停車した。下車しても何の用件もなし、排泄物の用件在るのみ、駅のホームは無に等しい。客は低い枕木に足をかけヨイコラと乗車する。日本婦人ならば恐らく上から引っ張り、下から押し上げることになるだろう。牽引の機関車は米国製であり満鉄機関車より小型である。これでボロながら貨車 50 輛を引っ張り、たいした力だ。幾日費やしたか月日は分からない。戸外は相当寒い。ワンピースの者、ボロシーバーの者、男は何れも真黒い油汚れの服装で、夏と冬の混合服装である。これと反対にやや服装の整ったものは兵隊、将校、駅の幹部とゲーペーウー(秘密警察)位であった。よく国民は欠乏

に耐えたものと感心した。チラチラ雪しぐれが来る。さて日本の何月か。

いつも兵の搔払いにあうが今日は特別の報告をする。

「誰だ、コラ、何をする」

大声で扉のところの同僚が叫ぶ。みると扉が 20 センチほど開けられ、同僚が着ていた毛布を力の限り抑えているが、外で露兵が力の限り引っ張る。ついに強奪された。露兵は毛布を抱いて反対側に回った。取り返す方法がない。車内は益々警戒を厳重にした。各車両は矢張り大小の被害を受けた。

露領深く来たから逃亡もなし、掠奪物資も少なくなった。警戒が弱くなった。停車すると民間人が集まってくる。捕虜と民間人の接触は禁止だが古参兵は要領よく、何と交換するものやらパン煙草を入手する。殆どの兵隊は交換物なし、ただ諦めるのみである。

毎日貨車輸送が続くが、これに伴い排泄物これまた大変。扉を開ければ掠奪兵が来る。それで考えた。いつでもできる方法、なかなか名案である。古参兵は麻紐を何本かを以って入り口のところ 50 センチ巾に横に 10 筋位張り、ここを利用して放尿する。尻のみ車外に突き出して紐を握りがんばる。走行中の利用方法、もし停車中とせば下車させて扉を閉める。隣人には気の毒だがなかなかの名案である。先行兵の残物は車の下一杯である。みるに枕木等は降灰のため焼けている。又レールも半分くらいは土中に埋まっている。日本などでは考えられない維持状況である。

部隊長は又命令で前言を翻し「シベリアは軍の秘密で通れない、イルクーツクの西方よりウラジオへの線路に変わった故みな静かに行動せよ」と、「小用隊長何を言うか、シベリア北方線等は今工事を始めたばかりではないか、馬鹿野郎」と思ったが唯思っただけ、古参兵は何も言わぬ

極東ロシアの拠点チタという市を何とか見たいと思ったが夜中の通過らしく見る事が出来ない。その先見るべきものはバイカル湖、その西はイルクーツクという大製鉄所街がある。それを越せばウラルだよ。そして炭鉱かもしれない。北極星を見たが同僚は見たという。矢張り右側だ、淋しい話となる。

いずれにせよ炭鉱だろう。ウクライナ地方ならうれしいが、など一人で慰めてみた。ある日、走行中尿意を催したので例の扉を開け綱につかまり放水した。運悪くそこは踏切であり、女の監視が白旗を持って立っていた。そこへ放出である。彼女の前までとんだ。彼女は顔をそむけた。終わって気の毒やら、おかしいやら腹を抱えて話の種と笑った。

チタを過ぎ4時間たった駅に停車したときのことである。早朝露兵がマンドリンを一丁

構え、下車しろ下車しろといったが言葉は分からない。又これは掠奪だなど思い下車しなかったところ、乗り込んできて今にも発砲しそう。時計3個出せ戸のジェスチャーである。再三請求する。皆は沈黙、次に毛布の請求だ。又沈黙、業を煮やした彼らは装具を引っ張り出して毛布、カップ、軽天幕を奪い取り、入り口に20枚ほど重ね、マンドリンで警戒しながら集まった住民に投売りを始めた。握った札は数えるでもなくポケットに突っ込み、目前の商売である。ロシアのみに存在する軍人商売らしい。

大変大変と一人の兵が大声を上げて助を求めた。これを見た一人の露兵は短剣で殴るケルの暴力、恐ろしいほどの制裁であった。我が身は一枚ずつ皮を剥ぎ取られる。売れ残り品を担いで貨車の後ろ側に行った。余りの強奪に黙視できず車輛次々と連絡し指導者に伝達した。露軍の指導者が来た。私たちの車輛の外側を見てすぐ反対側に行った。糠に釘か？彼らは一緒の掠奪集団である。益々警戒を厳重にした。木材を見つけ扉を厳重に締め付けた。そのまま寝込んだ。毎日の掠奪で疲れたからであろう。停車すれば彼らが来る。注意せよとお互いが用心する。そのうち停車となる。

又御出なされた。扉をたたくやら扉を開けようとするが開かない。彼らは退散し、われらは安堵した。二、三駅又停車、このとき貨車の天井でドンバリバリと音がする。彼らはバールで天井を壊し天井から入り込まんとする。又来たかと下から応戦。上下でこぜりあい始めたが我々が勝った。彼らは退却した。我等の防御が固いので物資があると思ったのだろう。先行車の将校団は丸裸にされたというニュースだ。然し貨車を壊してまでとは到底想像し得なかった。

前回マンドリンを抱いた3名の掠奪兵が来たとき、足の踏み場もないほど物品を放り出された。ある軍曹は彼らが帰ったなら整理しよう、それまで待てという。終わってみると彼は片っ端から目ぼしいものを自分の袋に投げ込む。「それは私のものだ」といっても、ああそうか位で返そうとしない。驚いた下士がいた。神奈川県経専出身といていた男だ。

太陽が出る・又淋しい夜が来る。何日は知ったか分からない。栗飯以来食事の氏食うなし。袋の中のビスケットの食い延ばしである。北極星は右側だ。うとうとすれば炉兵の夢、覚めれば我が身は捕虜、車の行く先は？帰国可能なのか？

人生40年は映画のごとく過ぐ。帰国不能となれば何処に眠るだろうか、しかも永遠に。満州においてきた妻子の行末は？同僚に言った「俺様であれば草を食っても生き抜き、いつの日か日本に帰ろう。中立条約のある露助のために血の一滴も流すことはない。惜しんで暮らそう。」友も同感という。北極星が左に来ないか淡い望みの夜である。

この戦争中、ロシアでは女の線路工夫で充足していたという。なるほど、その通り彼

女らは男の代用を勤めたのだな。だが、この国は男女同権のはずだ。日本の女性に出来るだろうか。

我々の車はバイカル湖目指して進む。見たこともない大湖、日本の琵琶湖の3、4倍位かな。地図の上での想像である。ようやく湖に着いた。見て驚いた。湖岸のさざなみ、崖上の樹木は見えだが対岸は見えない。右方も唯水面のみ、山も見えない、一瞬目を疑った。なんて大きな湖だろう。

これがバイカル湖か。我等の車は湖の南岸に着いたのだ。奥の方で古参が叫ぶのが聞こえる。何事かとよく聞くと「桜堂の大嘘つき、ウラジオに來たではないか、よく見ろ」アア、何をかいわん。この大馬鹿野郎と思うが、私も静かに言った。「ここはバイカル湖で、世界でも1、2を争う大湖なんだ。嘘だと思えば2時間ほど待ってくれ。そのうち湖はなくなる。日本海ならそんなことはあるまい。そして又、少し行けばイルクーツクという大製鉄所がある。しばらく待ってくれそのうち分かるから。」

列車は湖岸の各駅に停車し指令を受けているらしい。その時間の長いこと、私の予想通り湖は見えなくなった。彼らは黙っていた。夜10時ごろと思う。イルクーツクに到着。町全体の夜空は夕焼けのごとく染まっている。恐ろしく大きな製鉄所だ。露軍の鉄材補給大拠点である。

イルクーツク、イルクーツク、部隊長の言うウラジオに向かう新線は何処だろう。ここはイルクーツクより2日走ってきたが、新線は見えなかった。北極星は右手で同じ光を放っている。夜中に同僚が突然私に言う「君、北極星が左に見えるから起きてみろ。一瞬考えた。真に東方に走っていたならば車の左側中央に見える。線路が左に曲がったなら北極星は車の後方に見える筈」同僚に言った。「その星は車の後方に見えるじゃないか」「その通り」という。「では少し待ってみろ、又右側後方に見えるようになる」間もなく右側に見える。それでは本線から分岐して、この車は南向きに進行した、外蒙古の外だと思う。明朝、鮮人や小柄な露人、小柄な赤いドレスの蒙古人が見えるはずだ。注意してみるがいい。露助の掠奪もなくなった。運を天に任せてよく眠る。哀れなる者汝の名は？

翌朝太陽が高く昇り、車の隙間を通す光線が浮かぶ塵を美しく見せている。扉を開けて友は叫ぶ「お前の言うとおりで、赤い着物もいる」私はすべて想像して言っているのだ。それが全ての中するとは、鼻高々だ。だが、哀れに思う。何も得るところのない旅行だ。はるか遠方、東南に向かって白雪の山が見える。雲ではあるまいと思う。

今は10月になった頃だろう。出発以来何日か分からないが、分岐してから3日もたっている。正午ごろ、大変喧しい町に到着した。右方の小高い丘の中腹に屋根が見える



が壁が見えない。不思議な家だが何となく胸騒ぎがする。不安だ。駅にはクレーンあり、コンベアーがあり、騒々しい町である。列車は引込み線に入った。

## 炭鉱街の生活

「全員下車装具一式持参」の命令が来た。来るところまで来た。炭鉱の町だ。屋根上で毛布を広げていた兵は、我等の先発部隊でブハトで車中から紙片を投げた兵もここに来ているかも知れない。町名はチャイナールゴールスカヤ、なんと長い名か。3日前の分岐した所はウラルノヤルスクと教えられた。実は炭鉱など内地及び満州で1回も訪ねたことがない。どうしたものだろう、五里霧中であり、半地下の住宅も始めてである

## 労働の開始

「当分ここが我々の住居地だな」と一人で決めた。ブハト出発以来点呼がない。下車し、初めて点呼だ。人員掌握に大変な時間を要し、宿舎の割り当ても終わり、入室となったのは真暗くなってからである。電気もない、土室へ手探りではいると3段くらいの板のベッドがある。暗いから分からない。最下段に陣取った。夕食の配給がある。150グラムの黒パン、酸っぱいこと甚だし。空腹だが半分も食べられない。隣は誰やら分からない、疲れて眠った。

翌日は1日虱退治、装具整理、人員点呼の雑用ばかりで終わった。聞くところによるとここはドイツ捕虜収容所だったという。一日の食事は黒パンだけで酢っぱいものが嫌いな自分には合わないが、食べるものなし、仕方なく露の命を継ぐだけ。足は全くふらふらする。水以外何もない。

よくもこの遠方まで来たものだ。想像するところ、南はインドかパキスタン辺り、逃げるにはヒマラヤか天山山脈が前途をふさぐ。東と思えば日本海までは何千か、大略8千位はあるだろう。途中は広漠たる原野、或は密林、何れも狼の巣を突破せねばならない。昔、福島中佐が、シベリア横断を決行した。然し、彼は十分準備の上決行した。

それに反し、我らは唯着の身着のままである。いかにしても逃亡決行できるはずがない。万一決行をすれば、ただ死あるのみ、屍を広野にさらすか狼の腹に眠るか、絶対の境地に来た。

伝令が来る。「全員今から入浴をする。向こうに見える炭坑工場の入浴場、1回50名、今すぐに入浴に行く」という。ブハト出発以来1回も入浴なし、虱は喜んでいたのでだろう。余りの環境の変化で虱のことは忘れていた。

露助の風呂は、消毒室は土室で内部は全く暑い。この室に衣類を下げた虱を退治す

るのである。浴場は、ドラム缶2本ありゴムホースで蒸気を送り、缶の中に差込み冷水をブツブツ温める仕掛けである。缶から出る水蒸気で腰から上は暖かいが、足の方は全く寒い。温水をかけようと思うが水はなかなか温まらない。頭は上記の湯気で上気しそうだ。頭上は赤道、下は寒帯である。早々消毒室に戻り衣服を着けたときは生き返ったようだった。支給された牛糞のような石鹸は、使うところがなかった。今日は、朝食1回夕食は午後11時ごろ支給された。全くのパンだけの食事である。他は水だけである。

ブハトの宿舎の訓練が今や実地に役立つ？ 全員集合のとき、壇上の露兵指揮官は通訳を通じ、「天皇陛下は日本兵に150グラムを支給してくれとってきている。」と大声で言った。今まで我食事は何グラムか知らない。量ったことがないのだ。このパンならば量ることも出来る。

今日の食事は何グラムか、ガラスコップの大きさであった。今日から農園作業という。何の仕事か。

農園ならば食物を見つけられるだろうと、期待して整列した。5列横隊の150番であるが、この人数の勘定にしばらくかかる。彼らは70位までしか勘定が出来ない。80、90となるとだめである。何回繰り返してみてもまとまらぬ。上級者が来て出発となる。

到着した畑は6キロほど先の人参畑で、これにはみんな喜んで。作業を始める。抜き方である。外套に泥をこすりつけ、先ず生のまま1本平らげた。少しくらいの土は意に介さない。次々と平らげる。露兵が来れば働く。行けば立って人参かじり。当日は人参で腹が満足した。

隣の畑には女たち30人ほど矢張り同じ作業である。おんぼろのルンペン服、頭には色とりどりの布を巻きつけ、盛んに話すが分からない。ただヤポンヤポンだけ、声は女である。余りに汚い服装だ。何の犯罪者なのか、同病哀れむというが、何となく可愛そうだ。帰途につく。今日は夕食もいらないなあ等、同僚と話しながら門につく。又点呼だ。人員の結末がつかない。1日にして人参畑は終わりとなる。次は麦畑、刈り遅れた裸麦は、地面一杯に落ちている。何程か減少したものか。然しこれは私等の観念では量れない。このようになることを計算して作付けしているのかもしれない。畑面積は20町歩くらいと思うほど大面積であった。ここでも大量に腹に詰め込み、その上少々持参した。宿舎で驚いたことがある。我等の便所は巾30センチ、長さ30メートルの小溝で、これが10数本並んでいる。露天である。これを利用すると人参畑、麦畑の証拠が歴然と現れる。お前は人参畑か、お前は麦畑か、何だお前はキャベツ畑かなど大笑いした。

麦畑は2、3日続いた。裸麦の食べ方も上手になった。往復の途中に住宅がある。片



屋根の半分がない。板屋根である。なぜ修理しないのか。聞けばこれは国家が修理するもので、私等とは関係ないのだと。ああ共産とはこんなことか？雨の少ない地方だからこれでも良いのか。

農民は我々の食料不足を知っているらしく、この豆は生でも食べられるとジェスチャーで教える。早速試す。成程うまい。盛んに食べる。傍ら作業する。機械の投入口から蔓豆を投げ込めばいい。少し多めに投入すると機械は停止する。その間は一休み。なるほどこれはうまい方法だ。豆を食う。体は疲れる。一休み欲しいとなる。多量に投げ込む。休止となる。彼らの労働には休憩はない。時間中は働き続けなければならない。昼食はなし。朝出勤前の食事で昼食は7時、或は8時帰宅後。夕食は就寝前に軽く取るのみだと分かった。我々の手抜きを露助はわからなかったが、3回、4回となると彼は怒り出した。その後は監視が厳しくてやれない。疲れてくるとようやく終了となった。作業長は「今日はノルマが越えたから増食のホービをやる」という。捕虜は別だ。いかなることかとみている。粗末な板の上に黒パン二分の一片位のを並べて各人に渡す。彼らは大切に懐に入れていく。おそらく家族へ持参したのだろう。最後に二片が残った。誰だろうと見ると、若い恋人が恋の最中であつた。食事を忘れてなど捕虜から見れば羨ましい限りであつた。

毎日この付近の作業が続く。鉄条網の柵を出ると必ず兵がつく。先頭に二人中間に二人、後部に二人の護衛がつき「列を乱すな、民衆に接触するな、早く歩け」である。空腹でありノロノロすると銃床で撲られる。外蒙古の兵は露助より悪質である。

馬鈴薯畑の作業に行った。何で掘ったものか？土を底より堀上げ、薯は出ている。これを集める作業。しかし入れて運ぶものなし。外套の裾をまくり上げてこれに入れて運ぶ。また例の通り薯をかじりながらである。拳より大きなものもある。一個食べきれない。勿論生薯だからうまい味なし。ただ腹のため。食べ物が無いと思えば益々空腹を感じるものだ。宿舎に残っている同僚に土産がてらと思い、服装の入れられる限り薯を持参した、外套の裾、頭上の防寒帽の中、ズックカバンに入れ長い道中を柵の入り口まで帰ってきた。入り口前には一列に長い整列、そして身体検査、土産物は片っ端から取り上げられ入口に芋の山が出来た。

これが150グラムの支給の中に計算されるとは露知らず、もし薯畑にいったならいかにして持ち帰ろうか。彼ら露助の裏をかくてやろうといろいろ考えた。大変大きな畑である。我々は交代でこの畑に通った。軽作業なるが休む暇なし。次回、薯畑へ行き帰りには又身体検査があることを覚悟して、各々秘密の方法を考案した。が、敵もさるものなかなか許してくれない。

入り口は長い列である。列の後方に回り露助の見えないところから私は柵内に薯を投げ込んだ。検査後行って見ると努力の薯が待っている。大成功だった。翌日からこれを見た同僚が多量に投げ込む、先頭に入門したものがこれを頂戴する。これは大失敗である。多数の人間に知れ渡るとこれはダメになる。

夜の吹雪で翌朝は真っ白い地面、これを踏みながら薯畑に行く。馬鈴薯の山が沢山見える。煙が立ち昇っている。傍に黒いものが見える。ハハーこれは番人だと思った。私たちの声に驚いたらしく、突然立ち上がり外套を外したのをみて当方が驚いた。なんと女が徹夜で番をしているのである。

麦畑で聞いた話によれば、自転車を持って行き、チューブのないタイヤに麦を入れ替えるところを発見され監獄行きになったという。なるほど食物は野外の積み物を警戒せねばならない。共産とは不便で恐ろしいものだ。

キャベツ畑にも行った。小さなものでも外套の袖に入れる。凍って褐色だ。これはうまいものだ。空腹だからか？

次の仕事はビート畑の集荷作業である。一つ取り食べてみる。アクの強い植物で1本は食べきれない。小型の大根である。

夕刻、例によって土産とする。この運搬方法は防寒帽から外套の裾まで利用しておく。又門で検査を受けること必定である。行ってみれば、入り口の箱に取り上げられている。頭比べと思い検査を見ると、帽子よりはじめ大略服装の前面及びポケット類である。私はズボンのバンドを緩めモモの蔭にビートを詰め込んだ。前面や側面は変わらないが、尻の下が重くて歩けないものである。検査合格、たいした土産量を持って室内に入る。取り上げられて大憤慨のところを見ておかしくて仕様がな。

「君ら馬鹿だな、露助より頭を使え」

股の中から出すビートに、驚いたり感心したり、これが砂糖となる。道理で配給される砂糖は甘味が薄いのである。

幾日かの畑仕事のあとは、水道管理設の掘り方。凍結深度は不明だが、2メートル30センチ位の穴がある。ここを掘り下げるわけであるが、1日スコップ2枚くらいしか掘らない。地下に2人地上に1人の3人組である。地上は露兵の監視役、地下は休息である。交代で地上に出て露兵の来ることを下に伝える。くれば働く動作をする。能率など眼中にない。すべてが御身御大切にの合言葉。又7キロくらいの道を帰らねばならないのだ。毎日寒風に吹かれ、吹雪に巻かれての往復みな黙っている。何を考えているのだろうか一言も喋らない。

帰る途中のこと、新しい道路に行き当たった。朝はなかった道なので、間違っただけでは

ないかと思った。路面を見ると今作ったばかりの新路だ。まだ湯気を立てているようだ。人力で出来ないとせば、機械であるはず。遠くを見ればあった。小山のような機械だ。砂利こそ数がないが両側のV型側溝などは手作りと同じ仕上げである。全巾6メートルくらい、実に驚くより外なしというのみ。シベリア線通過の折に見た満鉄機関車の3倍もあるような超大型機関車を見て驚いたと、同様この道路作りの機械には肝をつぶした。内地では使用不可能である。満州にないのが不思議だ。苦力が籠を2ヶを天秤の両端に下げてのんびり土運びをしていたし、また南方戦線では飛行場の爆撃跡を人海戦術と称して10日もかかる仕事を、米国では2日を以って完了したという。敗戦理由の一端を見るようである。

水道工事現場の近くに板作り半地下式住宅があり、男の老人と12、3歳の娘の姿が見える。何れも全くボロ服であり、顔面洗ったことがなさそうである。警備兵のいないときを見計らい小屋に行ってみた。一枚板の壁、周りは作りつけの椅子、中央は矢張り作りつけのテーブル、板は二枚合わせでその周り一枚板の作りつけ椅子である。テーブル上には素焼きの平鉢3ヶ、釜1ヶ、鉄製鍋1ヶ、石油ランプ1ヶ、壁には外套2枚、スプーン3ヶ、ストーブ一基これが室内にある全部である。

老人は朝鮮人で、赤色革命のため本国に帰れなくなりそのままロシアに残った。頭の軽そうなロシア人を妻として生活している。仕事は牛追いかも知れぬ。言葉が分かればこの人間の人生辺路を聞くことも出来ただろう。然し滅多に近寄れない。露兵が怖い。

## アライコフへ移動と作業

宿舎内ではお狐さんと称する占い師がいて、「け」を立て我々は12月24日には移動するから帰れるかもしれない。うれしいニュースで大喜び。このニュース実現に淡い希望をかけ、その日の来るのを子供が正月を待つ心で待った。

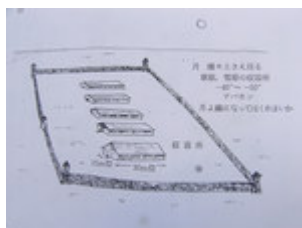
当日が来た。我々は指名され、寝具を担いで整列した。不思議なことに、全員の15パーセントである。我らだけ帰すのか、430名だけか。これは帰国じゃあるまい、移動だ。お狐さんの言うことが当たったが帰国は間違ったと直感した。理由は身体検査の時、私はBである。Bは体格の良い方で作業に当たるものだ。第2、人数がBばかりで少ない。第3は列車が省線電車の如きもので、到底この寒さの中シベリアは乗り切れない。捨鉢的な気持ち、運を天に任せて走る。

この頃は一面の雪であり、零下何度か分からないが日本の軍靴では寒くて足踏みを続ける。何時間走ったやら、日は暮れて一面雪野原の中の信号が新しいところで全員

下車となる。矢張り我々は移動だった。予想したとおりである。白雪の中全員行軍、何処に行くのやら一列縦隊。先頭がかすかに見えるが後方は見えない。疲労と空腹、落胆で転びそうな足取りだ。しばらくして休止の号令だ、おそらく立って休んだものはあるまい。何も見えない。ただ一色の雪原の真っ只中であり幻の世界に來たようだ。自己の生命の限界が見えたような気がする。小休止の後、導かれるまま前進する。1時間くらいして小高い丘に到着した。白一色の中、よく見ると例のドームがあった。全部雪の下である。でも入り口らしいところがある。

引率されるままドームに入る。中は長い板張り二段ベッドが続く。ベッドとはいえただ板を並べただけで、朝鮮人のドームと同じである。結果から見れば我々10ヶ月間の住居地となる。矢張りドイツ捕虜の収容所だったという。鉄条網に囲まれ四隅に望楼があり、井戸1ヶ所、ドーム5棟、炊事小屋1棟の設備である。ここがアバカンという所であった。

ドームの形態を記録しよう。大略長さ30m、中15m、土質は褐色、硬質粘土混じり、壁を垂直に掘り下げて石炭を塗りつけてある。柱は丸太のまま土中に埋め、石炭で塗り白一色、室内にストーブ2基、ペチカ1基がある。採光には壁上60cm位のガラス窓のみ。壁高は2m50位だと思ふ。



ここで毎日の作業は続く。将校は別棟になり下士の王様が出来た。車中他人の荷物を搔払った軍曹が我等の長老になる。

使役に出されるものは、戸外の作業を終わってから毎日交代である。400余人の炊事用水汲みが一番難物だ。井戸の底が水滴で凍り穴が小さくなる。柳籠も通らなくなると、腰にロープを巻きつけ下に降りバールで氷割りをする。我らには出来ない。古参の兵隊はなかなか元気よく作業をこなす。我らはロープ引っ張り役である。

戸外の作業は河川の床堀である。然し、零下40度の寒中では土は石のごとく硬く凍結して、ツルハシを石に打ち付けるようだ。打ち付けたときは手に電気が来たと思うほど、ビリビリと痛むのである。吹きまくる吹雪は隣人の顔がようやく見えるほど、これで人力を利用して効果を上げられようか。寒さに耐えるのが精一杯、唯立って眺めていることは出来ない。10分も動かなければ凍傷間違いなし、間断なく足踏み作業となる。能

率零パーセント。

時間が来る、宿舎に帰ってきて生き返ったようだ。八甲田山の惨劇を思い出す。石室でも作り、エネルギーを蓄えたなら、兵隊を殺すことはなかったのではあるまいか。疲労困憊の身を雪上に投げることは自殺行為である。眠くなる。そのまま静かに冷えて天国行きは間違いない。

ある日突然作業中止となる。午前中だった。すぐ帰国を思い出す。然し違う。今日は零下 52 度である。50 度を越せば作業は休みとのこと、40 度でも 50 度でも我々の体は毎日が 50 度だ。でも休止となれば気分良好である。

## 厳寒の生活と作業

成る程 50 度とはこの寒さか、40 度でも同じ程度の寒さである。私も満州で 40 度の経験があるが、50 度のマイナスは始めてである。古参兵が幾日かけて掘って出来た石室がある。天井は厚さ 1m くらいで、いくら火をたいても落土することはないほど凍っている。

凍結深度は 6m 程度と想像する。又思い出す。日露戦の折、バイカル湖上で列車を走らせた 1 件。これは可能なことである。寒暖計もない、先方の言うがまま毎日河川に来ては朝から足踏みが続く。火が欲しいが薪がない。誰が教えたか牛糞炊き、ほかほかと長く続き良好である。馬鈴薯でも入れておけばよく焼きあがる。寒風に吹き乾かされたものは、臭いもなく雑草の根の集まりを思う。

来る途中はよく牛糞拾いをする。外套の裾に 3 つ 4 つ入れてこの穴に集め、互いに体を温めあった。時には生物が来る。触って大笑いすることがあった。蒙古人の家を見たことがある。彼らの住宅壁には牛糞がベタベタ貼り付けられていた。冬期に備えた生活の知恵だったのだ。

栄養失調の体は空腹のため、腹を抱えて腰を曲げて歩く。力がないとかような体型になるものだ。夜間小用に起き戸外の穴に走るのだが、穴に届かぬうち催してくる。仕方ないからその辺に適当に放水する。戸外はおそらく 50 度を越えた寒さであろう。翌朝見るに一面の雪の上黄色な箇所が沢山できている。露兵より厳命が来た。だが止めるわけにはいかない。体が弱れば益々回数が多くなる。私は一晩 12 回の記憶がある。放水して寝につくとすぐ下腹に尿のたまるのが分かる。どれだけ疲労したものか、所長の厳命など聞くものか。だがその方法を変えた。入り口を出てからは漏斗で散布したように具合よくやろう。そして夜の吹雪があとを消してくれる。それが奏功して以後問題はおきなかった。



日中は耐寒に全力を注ぎ、夜は排尿で戸外に出る。雪雲の隙間、月が皓々と光るときはすぐ家族のことを想う。この月が鏡となり、何とか家族の現況を写し出してくれないものか。そうしてもらいたいと、幾度願ったか分からない。矢張りアバカン在住中、家族のことを話しているものは一人もいなかった。哀れさを増すと思ったかもしれない。唯黙々と働くだけである。

ある日作業から帰る途中、前方に数人の一団が、一人の兵を囲み二人掛けし、同僚は後方から盛んに兵の背中をたたく。だが兵の足は人形のごとく唯引きずられていく。何事かと聞いてみると、彼は岩手県出身で大のタバコ好き、朝食の僅かのパンとタバコを交換している。勿論露兵とである。疲労と空腹から小休止したところ、眠り、そのまま生きた人間の氷漬けになったのである。意識を失ったから早々に宿舎に帰り手当てをしたいという。後ほど聞くと、宿舎では同僚集まり全身マッサージを交代で行った。結果は皮下の毛細血管に血が戻り赤チンキを塗ったようになった。4～5日生き延びたが永眠したという。

この頃病室からは、毎日3、4人、多いときには8人くらいの死亡者があの世に旅立つ。私は400余人の内、何番目頃かなと話したものである。出棺は死体室から丸裸のままである。

同僚の死の模様を記録しよう。原因は栄養失調と虱から来る発疹チフスである。月に一度位は熱気消毒するが、虱の生存力のたくましさには驚く。何処かに隠れている。死亡の通知が来れば誰か二人が死体室の番人となる。衣服類はなく、パンツ一枚の丸裸である。私も当番が来て二人で室を訪れた。なるほど丸裸で骨と皮ばかりである。寒さのために凍りつき大の字に寝ている。腕や足を曲げようと思っても曲がらない。苦しかったろうと死体の頭を撫でながら、神や仏があるならば何とか救ってくれないものかと恨んでも見た。実に情けなく淋しい。私も近くかよくなるのか。余り寒いので一礼して帰った。翌朝早々に行ってみる。死体のパンツがない。聞くと前々夜も同様パンツがない。恐らく夜露助の奴ら盗んだに違いない。

病室に行ってみる。中央にストーブ1基、その周りは二段式の板張りのベットである。病人が一杯である。アバカンに来た430人のうち30人は本部に戻ったという。では400人のうち何パーセントがこの病室にいるのか考えながら、何も露助のため血を減す必要はない。ゆっくり休養した給え等と話し合った。だが後ほど考えるに、休養中に生命を縮めた者もいるだろう。あれほど一杯では虱の伝播が早いからである。死体が出ると虱はすべて出て行く、死体の衣服には虱1匹いないそうだから。

病人の次は埋葬である。零下40余度の土掘り、これは大変な仕事である。多分10



人くらいで掘ったと思うが、深さ30センチ足らず、その中に丸裸の同僚が眠るのだ。死体を板のモッコに二人ずつ重ねる。重くはない。8人の時には16人で担って入り口を出た。遠くより冥福を祈った。モッコは日本の手下げモッコを板で作っており、普通二人だが葬式には4人で運ぶ。二人を重ねても重くはなく、このモッコは土運搬に河川で使うものである。墓地には階級氏名を記した墓標を立てたが、死者100名くらいのとき露助は墓標を焼き捨てたという。今はおそらく草原で、跡片もないであろう。今まで誰がロシアに骨を埋めようなどと思った人がいるだろうか。満州の骨になる覚悟はしていたが、この理不尽さには何人といえども納得できないと思う。残された家族は、主人の死を知らない。心あらば魂よ、早く故郷に帰り死を告げて欲しいと祈った。

しばらくして赤フンドシの兵士が死んだ。この赤フンが死体からなくなっているという。露助の女がこの赤フンをマフラーにしているという笑えぬナンセンス。矢張り露助が盗んだもので墨で黒ずんだ跡があったそうだ。

## 哀れな元旦その他

正月元日の日であった。朝丸麦のオハギの支給である。鶏卵4個くらいの量である。何時も2食の支給であるから昼は何も考えない。夕飯になっても何の支給もない。聞いて驚いた。1日分を朝に平らげたとのことである。言われてみれば、豆の飴でビートの砂糖、主体は丸麦のオハギ。一人当たり目方で支給したものやら、カロリーで支給したものやら、元日から1食では前途が思いやられる。情けないが、後は水を飲むだけだ。

まだ極端な支給がある。ある日の朝食は、豆12粒と煮た汁であった。又ある晩は麦の荒びき、小さな皮の混入したままのダンゴ、直径4cm、厚さ5cm程のもの2ケである。これだけか、左様、なんとも方法なし。誰かが言った。ではこれは食べるものではない。なめるのだ。左とすれば寝ながら口を動かすことが出来る。なかなか良い考えだ。いうとおりにして眠った。

よく世間では牛馬以下の扱いを受けるというが、今我々はその扱いを受けておる。これが真実の牛馬以下であろう。

## 軍団との闘い

当アバカン地区は、寒さから押して12月下旬より2月一杯極端に寒かった。ベットとはいえ2cm厚位に板の上に毛布を敷き、その上に軍服のまま横になる。その上に汚くなったが外套を布団代わりとする。隣同士が腕を接触させる。かようにすれば案外暖

かなものである。然し、欠点もある。虱が横行して隣左右を渡り歩く。

朝起き腰を上げる前、上半身裸になりシャツの中で騒ぐ客の員数を調べてみると、毎朝 17、8を数える。減ることがない。体も丸々と太った奴だ。種々の罪名をつけて死刑にした。爪が赤くなる。不思議と思ったので、両隣と相談の結果同時に征服することを提言した。各々数を勘定させた。隣の男は 35 だ、また隣は 27 だ、私は 18 だ。すべて住居侵入血液掠奪人命損傷の罪で死刑になる。しかしながら、全滅とは行かない。何とかせねばならないと思ってもあるものは土室の熱気消毒のみ。これとて露助の命令がなければ出来ないのだ。虱ばかりで恐縮だが、まだこんな事実があるお話をしよう。

1月下旬と思う。朝点呼の号令で全員寒い庭に集まるとき、一人の兵隊は薄手の外套に軍の防寒靴に半分足を入れ、ドタドタと私の前に行く。外套の縫い目が遠くから見て何となく薄白く見える。不思議に思い近づいてみる。驚いたことに白く見えるのは虱の大小が白ゴマを散らしたようだ。余りのひどさに、君ちょっと止まれと止めて襟の折り目を伸ばしてみた。虱で薄白く一杯である。恐らく万を数えたのではあるまいか。不思議だが縫い目縫い目の 6 cm 巾位が一杯に大小が取り付いている。寒いから動かない。君早く消毒しないと君の命がなくなるよ。彼はすぐ消毒するといったが、おそらく彼もロシアに眠ったことであろう。

又私が体を損ねて病室に行ったときのこと、待ち合わせ時間に隣の若い男に虱の話をした。「居るか」「居る」「では窓際に来い」と二人で窓際に行った。窓際は 1 枚のガラス戸である。温度零下 15℃位だろう。君はジャケットを着ているのか、腕を出してみろ。袖先を折り返してみた。なるほど居る居る。尻を上にして頭を突っ込んでいる。では 1 匹ずつとって窓際においてみたまえ、盛んにとっておる。寒いから虱は動かない。左腕の 5 cm 巾位から 42 匹、続いて右腕から 37 匹、これも忘れられない数字である。これだから死亡者が出る。「君も注意しなければ発疹チフスに罹るよ。生きて帰りたいならば虱を注意せよ」若い 24、5の兵はビクビクして帰ったが、その後彼がどうしたか分からない。

## 下士の横暴

悪い条件が続く中労働は休まない。兵隊は疲労から動くのが億功になる。苦しくても動かねばならない。結果から見れば私は動いていた。虱にも注意していた故生きて帰れたと思う。2日も寝て考えていれば、3日目頃は歩くことが出来なくなるものだ。その結果、夜は小用にもいけなくなり、通路の丸太柱に音を立てずに用を足すものが出てくる。

かようなものの処罰は仕方がないが、何の理由もなく動作が緩慢程度で、下級兵を殴りつける下士がいた。スリッパのようなもので殴るようだ。その音の大きいこと、それほど虐めなくても良いだろうと思うが、御身後大切に帰国することが上下の区別なき希望であるはずである。

大阪出身の兄弟召集兵がいる。弟は病気となり班内に起居していた。この班の下士は、食料パンの配給には働かざる者食うべからずの標語にならい、この病弱の弟の食料を減食したという。鬼のような奴だ。弟はいま少し食べさせてもらえば生きて帰れるんだが、と兄に言って他界した。

私も涙が流れるのを止め得なかった。兄の心中いかばかりかと思う。なお更のこと鬼下士を憎むか心が強くなる。

## ドイツ捕虜と会う

彼は一般露人と同様の服装でカマキリの如き体を包み、腰には缶詰の缶をぶら下げ、カートンキーの靴でよたよた歩く。我らと大差ない歩き方をする。故国を忘れ、或は諦めて転向したものか、柳籠作りの指導者として、この収容所に来たのである。一人で何処でも歩けるようになったのを見ると、露人になったのだろう。腰の缶は何するのか聞けば食事用の入れ物である。何処に行ってもこの缶に食事を支給される。炊事から食糧を受けて、露命をつないでいるのかと考えると哀れに見える。我々捕虜と同じではないか。然し自由がある。だが又ノルマが有る。なかなか一生懸命働き、我ら数人はこの材料泥柳の若枝採取となる。1把を作り背負いドイツ人と同じくよたよたと雪上を帰る。この調子で彼は永久にロシアに住むことになる。我らは時至れば自由に内地に帰れるのだ。今は苦しい。彼は自由有るだけ我らよりよい。

## 身体検査とその後

ロシアの労働は共産主義に合致した方法で、各人は労働せねばならない。労働させる方法の根底は各自の体力判断が必要となる。身体検査は毎月実施される由なるも、適宜に施し、年1回のこともあるという。我らは適当だ。検査により、A 級 B 級は重労働、C は軽労働、D は軽労働及び半病人、D は完全病人の区別らしい。

以前私は B となり、河川工事に引張り出されている。12 月 20 日の移動が証明した。翌年3月ごろ、チャイナールの本部まで貨物自動車で輸送された。これが身体検査であった。大広間の建物に誘導され、入ってみると 12,3人が机に一列に並んでいる。我らはその前で直立不動の姿になる。真にパンツもない姿、やせた胴が丸裸で直立とは

哀れである。が一物も恥ずかしくてグンニヤリしている。何事にも向こうには軍医もいるだろう。二人の女医は何を語るか喜んでいるように見える。日本の浮世絵を見て比較しているのかもしれない。唯これで全体形を見るに過ぎない。指一本触れてみるでもなし、身体の太いもの細いものくらいの比較しか出来ない。聞くところ、ロシアには胃腸病や神経痛に類した病気はないという。道理で兵の中のリウマチ患者は病気ではない。と労働に引き出され痛さをこらえていた。結果は我々はどのクラスか分からない。若駒のせり市よりひどい検査であった。

私が満鉄在籍中同席していた、24～25歳の若者と帰り途ナホトカで会った。全く偶然に私の名前を呼ばれて驚いた。この若者は達者な体で元気よく、私に彼が作った煙草入れを記念にくれた。彼に聞くところ、いつもCクラスであったという。細身で長身の体である。露助の判定とは何れ雑なものと思った。

3月上旬になる。死亡者は132人とか、全く弱った兵隊を見て彼らは考えたのか、食事の支給方法が変わって3食支給となる。

朝は小麦の荒挽き(皮のままのもの)粥として飯盆に3分の1位、昼はパン120グラム、夜は馬鈴薯皮のまま煮、そこへ例の小麦粉を混入し糊状になったもの。矢張り3分の1位。薯をとればわずかに糊が残る程度の支給である。二色支給より逆に良好となる。兵の体は痩せ細り肉が落ち、背後から見ると鳥居に鈴が下がってぶらぶらに見える。自分の姿が分からない。後から同僚が心配して声を掛ける。

「桜堂、大分細くなったようだから気をつけろ」

私としては常に心配している。これを突然言われてみると、忠告に却って反発したくなる。変な気持ちだ。

「何を言っている。君こそ注意しろ。後ろから鈴が見えるよ」

これでは忠告が喧嘩になる。止めた。然し細くなったことは全員同じ。3月下旬で死者132人とか、400人の3割3分が死亡したことになる

## ロシアの土木と種々相(その1)

私は何番目か等不吉の想定をしているうち、寒気が緩み我々は助かった。早急に緩むものだ。これが春かもしれないと思う。作業は毎日河川工事で雪が解けてみて、なるほど川の形態で掘られている。がその跡は乱雑なものだ。想像するに、馬を利用して塵取りのごとき大形のバケツを引張り上げた跡がある。捨土はその辺に乱雑に投棄されている。堤内から堤外に引張り、その残りに捕虜を利用したと思う。然し、あの極寒の中能率など殆ど上がっていない。当然である。遂に露助はドラグラインを持ち出して、川底の

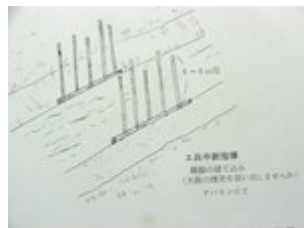
土を掘り上げた。我々には機械には出来ない、法面の土を掘りあげる土木作業が続く。能率は30パーセント位である。ある日、20人ほどで上流の木橋架設に引率された。

これは私の本業ゆえ興味を持って何なりと参考になると思ったからである。

指導者は露軍の工兵中尉である。現場は巾30m位と思われる。河床は整理されていた。先ず彼は末口50cm位の丸太2本を川床に下ろし、法尻に処を兩岸共掘ってこれを埋めるよう指示した。

掘削の深さなど考えもなく。唯丸太が地上に姿を見せないように両方共に埋めた。次に丸太の上1m間隔の程度に土を除き、そこを平らに仕上げるよう指示した。一丁の斧で露助の大工は削り方、私等は丸太を川中に降ろし方である。大工は55歳を過ぎた国家の支給になっているが、食料が足りないのでフラフラである。大工の削ったところへ脚となる丸太を立て込むわけではあるが、切り口が不揃いのため二人で挽鋸で切りなおすが上手には行かない。唯切って建てるだけだからなかなか土台と一致しない。

仕方ないからその下に木屑を差込み垂直にし、厚手の鉄板を切った三角形の釘を打ち付け、ようやく手を離せるようになった。危険で寄り付けない。かような手順で左右岸12本を立てて眺めた。大阪の工場の煙突のごとくナガイモのあり、短いものあり、この天端はどうするのかと見ていると、ヤポン(日本人)上に登って2人で切れという。2人挽鋸で切るのだ。誰も恐ろしくて登るものはなかった。ロープもなければ1mの鋸を持って誰が登ろうか。あきれたものだ。次は誰が工事をやったか馬鹿馬鹿しくて、翌日から河川工事に行った。この中尉は矢張り男だ。臨時に派遣された女医と(実は日本の看護婦程度という)問題を起こしたという噂あり、簡単に降格され少尉となった。その後彼は一般の服装で来るようになった。



## 降格とGPU

工兵中尉も少尉に降格されては、ヤポンの前でも肩章など恥ずかしくて付けられなかったと思う。悪事が露見すればすぐ降格か、一般人は遠い監獄行きとなる。我ら収用所の所長大尉も捕虜食料横領が発見され中尉に降格となった。日本人には考えられない。然し、規定があるはずだ。日本人ならばすぐその職を離れるが、彼らは仕方が



ない位の考えのようである。

ロシアにはGPU(秘密警察)がある。彼はよく我等の作業場に来て、タドタドしいながら日本語を使い、笑い話をして帰っていく。肩章は少尉である。聞くところ、彼の権力は素晴らしく強く、刑事であり、憲兵であり、検事の権力もあるという恐ろしい奴だ。

1日おきに遊びに来るところを見ると、何かの端緒をつかもうとしているようだ。日人の中にはからに通報しているスパイがいると評され始めた。後ほど分かったことだが事実であった。

ある大阪出身者で35~36才の者である。彼は21歳の時、警察を志願して2年位その職にあったが、考えるところあり、2年足らずで菓子職に転職、12~13年になる。私らと暇があれば菓子作りの話をし、空腹を忘れさせてくれた愉快的な同僚が帰国のとき、将校団に編入された。我らから離れていくのは彼は不満であった。そして何処に行ったか分からない。よくGPUは誰それと、親しげに呼びながら寄ってきた。然し、彼菓子職は一度もGPUと話などしない、何処から聞きつけたものか。

## ロシアの土木と種々相(その2)

大分横道にそれたが再び土木へ戻ろう。暖かくなるに従い例の河川工事は続く。法面づくりである。板のモッコで堤外に土を運ぶ。何処に捨てるも良い。枯れ草の原に目茶苦茶に捨てる。ノルマは半分に充たない。帰りはツルもスコップも土中に埋めて知らぬ顔。何もロシアのために血を流す必要はない。みんなで一致して埋めた。だが3食支給とはいえ少量である。働けば空腹となる。腹を押さえて歩く。そろそろ食べられる野草が出ないかな。皆の目は枯れた原野に目を皿にして探しているが何もない。牛馬ではないのだ。枯れ草は食えるものではない。探し求めて列を出る男に、斯様に言いながら笑いがはずんだものだ。春は一瞬にして終わったようだ。夏が来た。我等の言う夏と違い8月下旬には雪しぐれが来る。外套が必要になるのは9月早々、初冬が来る。我らには労働と食事と就寝の3つが循環する単調な生活ゆえ、月日等は忘れていた。通訳に聞いてはじめて大笑いする。疲労の体でも寒さと闘う難事が一つ減るだけ笑顔が見える。実にうれしい気持ちだ。この調子なら体調も良くなるかもしれないと思う。土木工事も着々進むにつれ、食事も多く支給されるようになった。弱者は自然に淘汰するような露助の計画かもしれない。死亡者は大体20歳台のものが多い。暑くなるにつれ我々はパンツ一枚の丸裸で作業進めていく。矢張りノルマは半分に堅持する。隣の班には将校団がいる。幾組にも別れ、年齢30歳、中には50歳の老将校も1人2人見える。私の弟の年輩だ。弟も風の便りでインパールにいたと聞く。彼は整備中隊である

から死ぬことはないにしても、今は私と同様苦役に服しているだろうか。30 歳代だから生きて故国に帰ってもらいたいと心願した。隣の将校班もパンツ1枚で横っ飛びして作業している。ノルマは私達の倍、100%らしい。何としても割り切れない私の心。隣の大尉に声をかけた。

私「大尉さん、どうです。あなた等はノルマを私らの倍も上げているようだが、身体の具合はなんともないですか。御身大切に故国に帰るためには少しでもセーブして働こうと、皆で話し合っている。が、あなた等の考えはどうですか」

大尉「私等は将校だと、ロシアの監督が厳しくノルマの完了には困っているのだ」

私「でも毎日 100%完了等、人間には出来るものではない。厳しくとも、そこを何とか工夫してはどうだろう。今の食事でそんなに働いたならば、秋にはキリギリスのようになり、厳冬は越せなくなりますよ。少し要領を考えた方がよいと思うが」

この将校たち、秋口には全員が栄養失調となった。小用の垂れ流しでふらふらとなり、何時もズボンは濡れ通し、哀れな姿であった。E級である老将校は死亡したということだ。

仕事途中ではあるが、通水試験をするという。所変われば何とやら、面白いと思って見物しようと待った。モッコで土を上げるより下げた方がより楽だ。これをやろうとの下心である。夕刻静かに水が流れてきた。明日も流れるなら前掲の上より下への方法を頭に入れた。明日は大変な水量である。工兵少尉は水が流れると喜んでいるとの通訳の話である。

私は僚友に上から下への方法を教えた。面白いほど流れる。が、監視の兵隊も来ることだし適当に残し、後はゆうゆうお時間までの方法をとった。私のやり方を見て左右の班は同調した。露兵が来たが知らぬ顔、彼は黙って過ぎた。これで良かろう。次の日から全部これを実行した。大笑いしながら要領よくやるわけだ。能率満点なれども、流された土は大変なものである。首謀者などといわれては大変なことになる。心配になってきた。数日後、今度は下流に集合となる。やれやれこれで心配がなくなった。心配が流れたとまた大笑い。水流が止まった下流を見ると、堆積土が一杯である。また毎日除却作業が続く。この土山をならすために牽引車が大きな鉄のバケツを引っ張り、平らにしている。見ると女2人の作業だ。汚れたワンピースに素足で運転する。たいしたものだ。また日本婦人と比較する。彼女にもノルマがある。一生懸命である。機械が故障したと見え、車の下にもぐり修理に忙しい。日本兵の傍であり、女の運転は珍しいからなおさら眺めたのだろう。若い日本兵はついに発見した。ノーパンであることだ。若者の話にはうってつけた。日本ならこれは男の仕事。この原野で女2人で作業するとは見

上げたものだ。彼女たちは日本女性の仕事を誰からか聞き知っていたのであろう。スターリンは全く悪い。小さな声で話す。幹部悪評は厳禁だ。GPUは来なかった。可愛そうな女よ。

10日くらいでこの作業を終わり、次は堤防を作れという。河より3mくらい離れたところに、高1m20cm位の盛土をするのだ。巾などは指示なし。出来上がってみると、上巾30cmから60cm位で、太いところあり細いところあり、高さも種々その見事さ驚くはかり。もちろんこれを作るには無茶に捨てた土を枯れ草の間から掘り出し、苦勞の末の勞作である。これ以上に仕上げる必要ないのかも知れぬ。計画性のない工兵少尉よ。内地なら人夫頭に劣る仕事だ。おそらくこの堤防一冬越せば崩れ落ちるであろう。「彼らが工兵中尉なら日本人は殆ど大尉であり、私は大佐級だよ」冗談飛ばし大笑いをした。写真がないので残念だが、ミニ万里の長城のごとく奇怪なものであった。

作業中一事件がおきた。監視兵が犬を撃ち殺したのである。この付近では動物を見ることは殆どない。珍しく犬を見つけ食料にと思ったのか、肉の良いところのみを外套に包み、残物は現場より遠くに捨てた。空腹な幹候下士はそれを拾おうと現場を離れる。露兵はすぐに発砲する。倒れて動かない。そのうち露兵は肉を抱えてどこかに行った。同僚が駆けつけ介抱する。幸い急所をはずれ一命は救われたが、他班の男でその後のことは不明である。結局場外または列外に出たものは撃たれる。実地に示された一瞬を見た。空腹とは恐ろしいものだ。また監視兵が空飛ぶ雁を打ち落とすことがある。彼らの射撃は上手であると同時に、弾丸使用の規定などないものか制約がないようだ。

入国途中のチタ市の近くだったと思う。物交に捕虜列車に近づく。制止が利かなくなると警戒兵はやおら腰の短銃を引き抜き、空に向かって数発を発射した。群集は波が引くように退却した。このときも同国人であるのに銃を使用すること、また弾の制約など考えたことがあるのか？ 日本ではとても考えられない。

## 捕虜と農作業

暑い最中、多分7月上旬と思う。ロシアが満州から掠奪したものであろう、稲粃を食料に配給してきた。粃では食料にならない。幹部は困惑したらしい。方法はないのだ。窮すれば通ず、兵隊の中に粃摺り臼を作った経験者がいた。これ幸いと種々考究の結果摺り臼が出来た。材料とてない中でよく作ったものと思う。

兎角出来たので少尉を先頭に農事班が出来、毎日の作業が続く。米飯等は1年近く口にすることがない。おかげで米が食べられる。毎日黒パンや馬鈴薯の食事の中で、

米飯とは米の油の濃厚さには驚くほどである。この作業中にまた1件がおきた。出来た米が案外少ないという。すぐ調査の結果、この少尉は作業毎に飯盒に1杯ずつ掠め取っていたことが露見した。農園に行く度に畑で炊いていたというに至っては彼も破滅であるが、恐らく彼も同僚に分配していたことだろう。第1貯蔵の方法がないからだ。空腹の2字は将校も兵も同じはず、ただ将校は権威の上にも耐えていらねばならないと思う。その後の彼の姿は見えない。

農園作業は兵も将校も全員希望する。何か食料にありつけるからだ。6,7キロの距離など苦にならない。来てみれば今日はキャベツ畑の収穫である。恵まれた作業ではないが、帰りには二つ位は持参する。入門の折露兵はこれを取り上げない、不思議であった。

畑の近くに数軒の農家がある。庭先には柳枝を使い、高さ2m程の堅固な柵がある。柵がない住宅もある。何か動物の飼育かな。柵をよじ登ってみる。中は野菜畑である。大体1軒2畝から3畝歩程度、中にはキュウリ、トマト、大根、白菜等10種ほど、当地は1毛作だから一緒に作付けとなるのだが、なぜこれほど厳重な柵が必要なのか。これが政府から許可された自由の畑とはいえ周囲には、沢山の耕地があるから拡大して作付けしたなら。また草食牛や羊もいない。何故だろう。しばらくしてこの問題が解決した。自己流の判定ではあるがこう結論付けた。ある同僚が柵を登ってみた。見たものは夫婦が畑で大根を抜き取り2人でかじっていた。その言い分が面白い。食べて見せると子供が食べてしまうから見せられないといったそうである。また近隣のものも本人が不在中に盗み去るに違いない、このように結論したが当を得ているや否や。

沢山の草原を自由に作らせ、自給させたらよいものだが、共産とはかくも不自由なものかと思った。早春まだ寒くて、戸外の作業はまだ一人苦痛を感ずる頃、収容所近くには一日中トラクターの音がする。夜を徹しての作業だ。3交代制である。1ヶ月も続いたであろうか。その面積の広大さに驚くばかり。これに麦を播種し、取入れが多少遅れ減収しても面積でカバーできると考えた。

在露中は食料の獲得が先決だ。御身御大切の毎日、途中の路傍にある白菜のごとき野草を食べ、ある少尉は中毒した。全員注意の通告があった。

また河川付近にはアカザが沢山生える。この葉を取り。缶詰の缶で茹で水洗をし味のない菜葉と同じ。ただ食べるだけ、アカザが2mの古木になると種を取って煮る。これまた音だけバリバリで、なんとも頼りないものだ。その頃、同僚の岡崎、桑折の両君(同郷人)は何処で入手したものやら、長さ6,7cmのトウモロコシやキュウリを私に提供してくれた。捕虜は1粒の米でも口に入れられるものは総て、我が身のために使用する。



何ぞ他人に進呈できようか。然し、彼は我が身を思ってくれたのだ。1年ぶりで初物を味わうことが出来た。感謝に耐えなかった。私は振り返って食料を他人に提供したことを考えた。ただ1回ある。即ち、例のビートを所内に持ち込んだとき、4、5人に分けたことがある。

## 捕虜炊事様々

捕虜の希望する職務は炊事兵である。時折食料をつまみ食い出来るから、他の者より精神的に余裕が出来る。将校たちも希望していたが、兵の手前自尊心が傷つけられる。痛し痒しである。私達Cクラスが炊事兵に選ばれた。幸運だった。空腹が満たされればある程度動けるが、空腹と満腹が位置を変えると体調が著しく狂う。縮んでいた皮が一気に伸びきったようだ。もう入らない。勿体ないほどであった。

元来、炊事に支給されるものは馬鈴薯、小麦粉の荒挽き(麦皮混合のもの)、岩塩バター1升程度、現物を見て、これが300人分の食糧かと思った。間に合うだけ水で薄めるわけである。

食料は1食分毎で、翌日に持ち越すことは出来ない。先ず、使役兵が井戸の水を汲み、ビール樽3本、馬鈴薯を洗い皮のまま五右衛門釜2本に投入する。煮上がれば1斗樽の小麦粉を1本入れよくかき回す。バター1升を2つの釜に入れ、蓋をして蒸し自然に冷えるのを待つ。

支給時の温度がむずかしい。暑すぎると薯と粥が分離して底の方に行き、芋ばかり2、3個残る。配給量はヒシヤク1杯程度の量だが、冷えの程度により薯に粥が巻きつけば大量に見える精神作用まで1杯が影響するのだ。

汁は岩塩を溶かしたもの。汁の実はその場の状況により、ある時もない時もある。キャベツの頃には下葉の青い到底料理などには使えない代物で、内地では畑に捨てるものである。これがカロリー計算とかで支給される。方法がないので洗って汁の中に入れる。茎が食べられる。次は葉はトンボの羽根のようになり。汁の中を泳いでいる。青物のない生活、食べられるものは何でも良い。いくらトンボの羽根のようでも結構配給した。量は缶詰の小缶1杯程度であるが、誰も不用とは言わない。大切に利用しているのを見、捕虜の身の哀れさを感じた。

時にラクダの頭の塩漬けが来たこともある。初めての支給だったそうだ。私に来たから露助が歓迎の意を表したのか、等同僚と冗談を飛ばしたが料理の方法が分からない。何れ煮るより外はない。炊事の上司と相談、大釜で煮ることになる。煮汁はお汁とする。肉は実とすると一決。窯に3頭を入れ煮上がるのを待つ骨はがしにかかる。煮



あがったとはいえ中々肉がはがれない。散々苦勞して夕飯の肉汁とした。みんなの喜ぶこと限りなし、肉とは意外だと。

次の日もまた同様肉汁だ。知らぬとはいえ、肉はよく煮上げると、骨と肉がバラバラになることを知った。夕食支給を終わり、宿舎に帰ってみる。室内に火葬場の煙突から出るような臭いがする。よく見ると、ラクダの骨を塵場に捨てたが、それを拾ってきて焼き、カリカリかじっている。私も火葬場を考えずーとした。道理で来るとき何故か塵場に人が集まっているのを見た。餓飢道という言葉がある。それに該当するが、或はその一步手前か、兎に角空腹なこと間違いなし、ただ自制しているのみ。

ラクダを終わり、次は羊の腸の塩漬けを渡された。これまた方法が分からない。ためしに思い、2cm くらいに切り焼いてみた。塩は誠に強く、硬いゴムをかむようでとても食べたものではない。しからばどうする。5cmくらいに切り、よく煮るべきだと一決。直ちに作業にかかる。水洗いをし、煮汁は利用するよう徹底的に煮上げる。また皆は晩に喜ぶだろうな、話し合いながら作業した。肉を味わってみると大変良好である。その晩はまた肉支給というので大変な喜びようだ。

この晩、使役の兵隊が戻ってみる。炊事の窓口で請求すると、先ほどまで保存していた皿の食事が無い。係りの兵の言によれば食堂には明かりがないのを利用し、彼の名を告げて受飲したものがいるので。盗んだのは将校だと専らの噂である。

翌朝のこと、一人の老中尉が炊事場に例の腸を持参して曰く「君らは何だ。皆に馬糞ならず羊糞を食わせるのか、これを見給え」と持参の腸を割った。腸の両切り口はつぼみ、草が膨れ上がっていたのである。昨夜は暗い食堂で喜んで食べたが、羊糞だとは誰が想像しよう。然しそれがための支障者は誰もいなかった。

私が炊事係のとき、一寸暇を見て宿舎に戻ってみた。下士ばかり4, 5人集合し、何か打ち合わせしていた。聞くともなく耳に入ったのは、脱走の相談だ。何時までもこのような生活が続くならば、思い余ってのことと思う。だが、面白い話だ。私もその中に入った。私は炊事の時間もある。ゆっくりは出来ない。大急ぎの回答である。

私「ここロシアのどこに当たるかだ。以前から見ているが、年中雪が見えるから想像するところヒマラヤか或は天山山脈かも知れぬ。私の想定からすればここは外蒙の国境付近ではあるまいか。左様考えると、南はパキスタンかインドの両端かもしれない。皆はどう思うか。(返事するものなし)では何処を目標に逃げたいのか」

甲「満州經由清津に行きたい」

私「食料はどうする」

甲「この収容所の監視兵から銃を奪い倉庫にパンがあるはず、それを持参し昼は草

原で寝て夜間行動する予定である」

私「ここから清津までどの位か、想像したことあるか」

甲「そんなことは分からない」

私「途中に地勢を考えたことがあるか」

甲「ない。わからない」

私「では少し私の少し考えることをお話ししよう。決行するなら幾分の参考になるだろう。ここが私の想定の外蒙の西端とすれば、清津まで2千里(私も分からない)くらいはあると思う。食料は途中の農家から調達できるが、恐ろしいのは狼だ。5、600頭の集団もいれば単独者もいる。湿地帯もあれば、大密林もある。冬将軍を参考に入れるがよい。もう少し密な計画でやりなさい」

誰も返事がない。炊事のこともあるので私は席を立った。その後の行動を見るに中止したらしい。老兵の言うことを感じたのだろう。決行すれば白骨を広野にさらすこと必定である。大体、彼らは若気の至りというが、無謀で考えは浅い。社会のことなど全く分からない。地理も同様だ。バイカル湖を見て日本海という。列車が何処をむいて走っているか分からないまま、ここまで来たのだ。一寸残念に思った。

## チャイナ本部へ移動

炊事兵は1ヶ月で交代するらしい。岩塩を取っていると、顔が何となく膨れる。体調を整えねばならないと修復に余念がなかった。

そのうち本部へ全員移動となる。わずかの装具を持って貨物自動車輸送であった。

1年ぶりに同僚に会う。元気か？体調はどうか？何の仕事か、等話がつきない。収容所内も整理されており、以前の面影がない。真っ黒い顔の兵が続々帰ってくる。炭鉱勤務という。勤務は矢張り、純労働8時間にして昼食の時間がない。彼らは習慣だから良いが、我らには不向きだ。炭鉱の前任者の説明によれば、地上勤務と地下勤務がある。冬の地上は零下50度にもなるが、地価は軍服だけでよい。私は地価を希望した。然し、地下に潜ったことも見たこともない。興味と暖かいということで志願した。万一のことを考えてみるが、露助は毎日働いている。死なば諸共、不運と諦めるほかない。割り切った心持である。露人の使用した古いカンテラがわれらのほうに与えられるが、ろくな物がない。先ず電池を背負い額にカンテラを装着し、生まれて初めて坑内に入る。先輩に続くが、暗い道坑(巾1.5、高さ2.5)を手探りで下る。額のカンテラは、天井のみを照らし足元は暗い。新米であるが故に、左の壁に当たり、また右に当たったりで満足に歩けなかった。

半盲人である。不便なものである。70mほど下り、車道があり馬車トロが動く。支柱用の坑木が散乱し、余りに簡単と思われる支保工である。が、これで大丈夫なものか、危険だと思う。

車道に沿って 100mほど先は切羽である。切羽には鉄製のコンベアーが仕掛けてある。車道の戸口に石炭が落下する仕掛けだ。我らに知人 5 名は、露人と一緒にコンベアーに積み込む仕事である。が、そのスコップは長さ2mもあるほど長く、またはスコップは30cm角と思われるほど大きい。今の体力ではとても動かさない。それで作業の時にはスコの先端に石炭に少々掬い、コンベアーに投げ込む。機械が動かなければ休む、動く間は働かなければならない。頭上のカンテラの動きで暗い坑内でも勤怠が分かる。一計を案じた。休むときはカンテラを懐の中に隠すが、頭上より外して手で持って働くがごとくあちこち照らす。体は休み監督の強力なライトを見た時は連絡し合う。坑内で怠けるには切羽に限る。暖かいし奥地帯なる故露助の目も届かない。或は又、大塊を2人掛りでコンベアーに入れて流下させると途中の鎖に引掛かり、石炭が山となる。動かなくなる。休みとなるが、度々これは出来ない。

流末のトロッコ積みを、1日一人の作業で大変苦勞した。日中は頭上の炭層を眺め、いつ落下して生き埋めとなるか、死に一步一步近づくような気になる。然し、露人も大勢いるし、坑内日人の怪我も少ないとのこと、日が経つにつれ考えが変わった。今は二度目の冬である。地上は？と見ると、いや寒いこと、アカバンで牛糞を炊いた時と同じ寒さ、矢張り地下が良い。着ているものは、木綿のシャツと軍服だけであるから。

ある朝、坑内の途中で用を足したくなり、少々離れた岩石の間で済ませ、出て来るとき、監督が大声で騒ぎながら私の手を引っ張り出した。これは怒っていると思う間もなく、ガラガラ大音を立て石塊が落下してきた。これが運命の分かれ道か。一方の天井が崩れ落ちたのである。露助の来るのが一瞬遅れていれば、私は土壌の下で永久に不明となったのである。監督に感謝した。

露人の 5 分の1も出来ない捕虜の身、監督を応援しようと皆で話し合っても、朝のパン 130 グラムでは動けない。この坑の露人は、日人に同情的であった。1日努力すれば翌日は駄目になる。同僚と相談し、監督に食糧の増食をジェスチャーを交えて交渉した。彼も同情的に納得した。翌々日から最高の食事をくれた。この収容所では、食階級が大中小の3種らしい。私等は大の組である。何となく心にゆとりが生じるものである。増産週間に当り、監督は奨励費を貰ったという。炭鉱では、1、2ヶ月に1回増産週間を設け、悠々ノルマを上げるらしい。

## 宿舎内の生活

夜が来る。夕食後は舎内で寝るのみ。馬車馬と同じ。疲労から動きたくなくなる。毎日の繰り返しであり、いかに能率を上げても報酬は零である。枕をして眠りながら考える。何百万の犯罪者を作り、この食事のみで働かせ、その結晶が政府の所得となればこれは世界一裕福な国家となるだろう。種々の想いが走る。寝ていると首筋に激痛が襲う。起きてみる。何もない。これは南京ヤロウだな。翌晩は小さな板を枕代用にやってみる、矢張り激痛。室内所々に淡い電灯がある。この光に曝さぬよう、蔭のまま取り出し急に反転して光を当ててみた。6, 7匹の南京が右往左往する。片端から討ち死にさせた。毎晩の行事となる。虱はおとなしく吸血するがこれは暴力的だ。この敵とここでいつまで闘わねばならないのか。然し、どうあろうとも生きてかえらねばならない。生きるぞ、死は御免だ。

## 1年前の同僚に会う

私が炭鋸コンベアーの落下口で、トロに挟まれ負傷したことがある。10日間くらい休んでいると、突然私の名前を呼びながら入室してきたものがある。誰かと見ると1年前ハイラル入隊のとき、事務室で一緒に考科表を作成し、種々我等の立場や今後のことを話し合った同僚だった。私が分遣する折、彼は暗号電報を扱う方面に回った。その折、彼に約束したのは、我々が果たして8月15日召集解除になるものか否か。電信を扱っている内なにか分かるものがあるかもしれない。その時は、私に連絡してくれと依頼した。分遣で私が山中にいる時、間違いなしとの電報をくれた男である。落ち着いた態度で訪ねてくれた。懐かしい会合で、又種々話に花が咲いた。彼は重そうに口を開いた。実は君にもう一つ骨を折ってもらいたいことがある。何事か、私も興味を持ち一体どういうことなのかと聞くに、「私は今青年同盟の盟主として、この収容所を管理している。君も同盟の一人として、一肌脱いで欲しい」という。これで大体の想像は出来る。

彼としては、直ちに承諾してもらいたいと思っていたらう。が、私としては想像の域を脱していない。そして彼への返事として、君のためなら協力するぞ。だが、同盟とは何か。そして綱領は如何なるものか。もしプリントでもあらば見せてもらいたいと注文した。彼は帰り際にその綱領のプリントを持ってくるといった。が、その後梨のつぶてであった。彼は京大を出て、満州大同学院の教官、30歳代の気鋭の士であった。帰国の折、私が乗船した時。誰かが乗船拒否されたものがあるという。下を見れば、一人の男が装具を背負い帰りかけているのを見た。彼ではないか、淋しそうな後姿が目につく。彼は独身者の筈、早く帰って父母の喜ぶ顔を胸に描き、ここまで来た。が、その

喜びも一瞬にして消え去った。舞鶴で米軍に調べられた折、米軍はすでに彼の名前を知っていたのを見ると、有名だったのだ。内地で彼は転向したという、又そうであって欲しい。

## 老大尉と従兵

退院後、私は50歳位の老大尉の従兵となる。退院したとはいえ、労働は出来ない。これ幸いと大尉付となり、2人で小部屋に住む。彼の名は茂木、群馬館林出身、収容所では何をして居るやら、朝出て夕刻帰る。労働ではないらしく、中間の仕事でもあるだろう。馬鈴薯を持ってきて煮て置くことなどを言いつけて出掛ける。煮ながら少々頂戴したこともあるが何もいわない。或る時、「君は麻雀をやるか」という。下手の横好きの話の末、「明晩やろう」次の日、待っていると、中尉2人が来て4人で始めたが、私も何年か振りの手合わせで、頭の回転が不良である。が、彼らは私より回転不良、ついに私の勝利となる。

この老大尉と同居中いろいろ話が弾み、私を感じた軍への不満を知る範囲で思うまま話し合った。第1軍律及び装備、第2パラソル列車、第3機械等である。在満日人に対する軍の指導の悪さを、彼は分からなかったようだ。然し、一兵隊を見る大尉は、何程か悔しかったのだろう。夜半小用に起きたとき目覚めている。翌朝はと見ると、目覚めて目が赤く寝不足状態である。何か悪いことをしたようで後味が悪かった。

## 軽労働と種々相

C級の作業は一部B級に次ぐ軽作業と、工場や病院の雑役に従うことになるらしい。退院後鉄工場の材料片付けに行ったが、気温が零下では鉄材を扱うには危険である。手に布を巻いて手袋代用にする。重いものは体に合わない。軽い物のみ整理した。昼頃露助の女の人がヤカンを下げ門の所で待っている。その内工場から男が来て、門の監視小屋に入る。女は懐から黒パンを出し、夫に何か話している。その態度がなんともほほえましく、夫の顔をなめたい様なしぐさである。ヤカンは何か。見ると白いスープの中に大根葉のごとき物が見える。羨ましい夫婦である。これに劣る日人は沢山いるのに、この夫婦の親しさ、私等の頭に焼きついた。粗末の中に何かがある。

病院を見る。昼食時多分10時頃と思う。D級の食事は4回である。スープやいろいろな食事、誠に少々である。我々なら、4食分を1回に平らげられる程度である。病人の前に並べられたパンは白あり、黒あり、それに塗布するものにビート糖あり、岩塩ありには全く驚いた。総て公平ではなかったのか。岩塩は少し褐色味を帯びているのですぐ



分かる。病人の心中を思う。同じ生活をするにも、買うところない国だ。

軽作業で荷を暮らしている時、内地への通信を許可するという話があり。皆が喜んだ。内容を聞くに、矢張り指定された文章を仮名で書き、その他のことは一切禁止という。何かの本で見たことのある手段である。考えてみるに、通信できることは嬉しい。然し、毎日死亡者の出ているこの収容所、通信を出してからもし自分が死亡したら、内地の家族はどんなだろう。父や夫、息子は生きてると大喜びをするだろうが、何時まで待っても帰らないとしたら、その悲しみは一人悲惨である。途方にくれると思う。

私は通信は出さなかった。同じように考えた人は出さない、出した結果、返らぬ人を待つ家族が内地には沢山いた。彼ら露人墓地の管理では、死亡の邦人の墓などはおそらく不明であろう。何せ無神の国家故、死せば犬猫と同然に扱われる。記録も形跡もなく、唯野草のみ繁っていると思う。

## 日人将校の装具検査

「全員装具を持って集合」との伝令である。庭先に集合する。装具検査という。然し、今までにどれ位掠奪されたものか？その上またここで検査される。露助の奴しぶとい奴郎だ。異口同音に庭に、我等の装具を調べた。然し、露助が見えない。どうした不思議である。2, 3人の日人兵と将校が、片方の端から盛んに兵の所持品を調べている。露助は見えない。日人のみ、隣の兵が靴下に米を一杯入れ後生大事に持ってきた。それを将校は取り上げた。兵も啞然としている。私はそれを見て憤慨した。露助の真似をしている。何ということか。上司への不信が高まった。このチャイナに到着早々の見聞記である。第一線将兵にはかようなことはなかったこと思う。

## チャイナゴールスカヤの街を見る

軽作業として町を歩くことが多い。作業に出て行く同僚を、水汲み薪切り材料整理など種々の作業が待っている。或る時、街の中心地帯を通った。人口4万とか。通りの延長は500m位、道の巾は50mもあると思われる。そのメインストリートの両側には、木造の住宅が隙間なき程に並んでいる。外壁は殆ど板張りで黒ずんでおり、平屋或は二階建てである。日本の町並みを頭に描き、ここに来て驚くことばかり。街路は雑草の原で、豚や鶏が三三五五遊んでいる。又、広告板やネオン等は目に入れたくとも見当たらない。人間はと見ると、子供ばかり。所々に老人がいる。窓からか顔を出し珍しい日本人を眺めている。唯一、黄色の見栄えする建物がある。これがこの地方唯一の配給所で、パン始め衣類の配給元締めであった。国家の組成形態から、斯様な形が自然

に出来たものと思う。

例えば、子供や老人のみとは一家の主人や妻はノルマを背負い、指定の作業に行かなければならない。残るものは子供と老人となる。商店はと見れば、ノルマによる配給がある。パンは勿論、生活品の総てが配給所となれば、商店は必要なく光眩むネオンや看板等は不要の長物となる。住宅は国民・労働者の避難所に等しい。一つの建物には、2家族3家族が割り当てられ、唯眠る場所と思うのみ、配給所はこの地区では1ヶ所、聞くところによればモスクー大都市には、種々階級のマーケットがあるらしく、指定階級により利用方法が違うという。日本では考えられない構図である。

## ノルマ作業とは

ロシアの労働にはノルマが付きまとう。即、標準労働量である。通訳に聞くところ、暑さ5 cmのブックになっているという。さもありません。ノルマの完了、未完了は一家総員の食糧や他の配給品に影響を及ぼす重大な要素である。我らはいつも135グラム程度のパンが支給されるのを見ると、老人の無料支給と同程度である。

私等5人で所長住宅(アカバン)の薪切りに行った。2人挽きの鋸で、直径90 cmほど、長さ6mくらいの松丸太を薪に切れとのこと。全く良質の材料である。これが薪か？一寸考えられないが、命令ゆえに薪に切った。惜しい材料である。私は鋸を引っ張る力がない。然し、挑戦した。矢張り駄目、古参者が切ってくれた。この住宅は8畳間1間であり、隅の方にはバケツ5杯のバターが入っていた。矢張り捕虜食糧の横取りである。彼は大尉から中尉に降格させられた。私たちのノルマは最低だったのだろう。(その1)

ある日、露人が早朝から2人で宿舎に来た。通訳に聞けば身上調査という。彼らはよく働く。夜の10時頃までペンを動かしている。余り働くので通訳に聞く。彼らのノルマは1日200人、そしてようやく100%を完了したと、喜んで帰ったという。(その2)

アカバン地区で、土木作業を始めるとき、前に作業していた露人たちのノルマの記録が黒板に書かれたまま残っているのをみた。矢張り、100%完了者はいない。60から80%の記録である。毎日重労働100%等出来るはずがない。(その3)

見渡す限りの草原に、牛や羊の大群が見える。各家庭より毎日追い出される動物を集め、牧童はこれを連れて草の良いところで食べさせる。牧童のノルマは、200頭を1日8時間放牧監視、夕刻各家庭に返すことで100%と言う。1頭でも失えば罪を受ける。迷い羊1頭を露人が屠殺し、皆で分け合っていたのを見たことがある。牧童が可哀想に思われる。(その4)

我らが3食支給されたときのことである。面前に、子供が来て我等の食事を見て羨ま

しように眺めて立ち去ろうとしない。通訳に聞かせたところ、彼は来年から労働できる年齢になる。労働が出来れば食事が、労働食の支給が受けられる来年が楽しみという。一寸日人の感覚では分からぬことのみ多い。(その5)

収容所所長や、作業の少尉にもノルマが有ったことと思う。裸体を見ると、何れもやせて肋骨がかぞえられる。炭坑夫も大方同様である。これに反して、女たちは皆丸々と太っている。人体構造の差異なのか。偉大な体に最低の服装、比較するものもない。これは普通だから満足かな。レースの肩がけ等は女の監査員位である。坑内には女子を使用すべからず、とロシアの労働基準法にあり、22年の新聞に日本語で記してある。捕虜に配布していて、現実には女子坑夫がいる。何がなんだか分からない。(その6)

構内の女子4,5人で休んでいる。私たちも同様休憩だ。ジェスチャーを交え、手振りや冗談中、一人の女が私のところに来て、襟をつかみ軽々と持ち上げ彼女の周りを1回転させて大笑いしている。その力の強いことにはビックリした。彼女の力の強さを誇示したかったのか、体格は私等の1倍半はある。誰かが言った。この女と夫婦になり、喧嘩でもしたら如何なるだろう。3間位飛ばされるだろうな。皆が大笑いしたが、彼女らは分からない。冗談はやめたが、彼女らは私等と話したいようなそぶりが見える。そこで、日本女性のことを話し始めた。彼女らは日本女性のことを東京マダムと呼ぶ。東京マダムは、お針、子供の世話、食事の世話でロシアのごとくこんなに働くことはない。ドレスもきれいであることを話した。彼女らは一様に驚きと羨望のまなざしで聞いていた。が、そのうちの一人が、東京に連れて行ってくれという。「よろしい」と言ったが、こんな豚のような汚い女を東京に連れて行っては物笑いの種、恥もかく、また捕虜は連れて行けない。皆で大笑いした。

## ロシア美人

炭坑の食堂を見る。素焼きの植木鉢のごとき平皿が沢山ある。いつ使用するものか分からない。従業員2,3人見える。一人の女は美人だ。白のワンピース一枚のようだ。彼女はこの姿で、零下40度の戸外のトイレに走った。私等は寒くて震えているのに、彼地のトイレは、垂れ流しである。何分にも極寒故、今放出し2,3分もすれば石のごとく固くなる。踏みつけても安全である。唯ワンピース一枚で放出する彼女の忍耐には驚く外はない。美人もつらいものだ。

アカバンで露婦人に会う。パラソルにワンピース、ハイヒールのロシアではモダンの服装である。腕に時計を2つつけているのを見て、何だ軍人の妻か。夫が掠奪した時計

を貰ったんだな。掠奪を思い浮かべて、美人落下、却って憎さを増した。彼地で、女らしき服装をした婦人を見たのはこの 2 回である。パラソル女にはノルマはないであろうが、食堂女にはノルマは逃げられない。

## 特殊作業と共産の組成

平和な重経済に生き、共産主義とは等考えても唯漠然としたことのみ考えたに過ぎない。彼地に生きて、初めてその実態が分かったような気がする。犬の遠吠えのごとく、遙か彼方から眺め、或はカーテンの外から判断しては、駄目なことは判然とした。一度、ロシアの一般労働者に接してみて分かるのである。捕虜は一般人に接することは厳禁である。我らは盗見し、或は彼らの生活の一部を見て漸く分かるのである。然し、まだ漠たる考えでしかないのである。ツアー時代は 20 数人の皇帝一族、及び貴族で国家を治め、他は奴隷であった。

わが国も殿様の時代、ほぼ同様であったと思う。この状態から脱出し、万人平等の旗の下、軍艦から一発号砲で赤色革命が成立し、初期の目的は達せられたが、皇帝に代わる権力争いが幾百万の同胞を血祭りに上げ、現在もその尾を引いている。矢張り国民は奴隷といっても良い程度で、住がないのに唯々諾々としているように見える。所謂外来思想、或は生活を導入されることは極端に排撃する。国外旅行等は許可されない蒙昧な人間を沢山欲しい政策であろう。身上調査に来た書記は、商業や経済等は何をするものという。重工業オンリーの政策は、時計、万年筆等は何ほど欲しかったものか。然し、珍品ゆえ、弄り回す、壊す、修理者がいない、収容所内ではこれら技術員は待遇よく扱われた。即、理髪、画家、運転手及び芸人等、彼らから見れば第 4 社会の人々が該当する。第 3 社会の人々は黙って働け、ノルマを達成せよ。さすれば一定枠の自由を与えよう。私はそのように感じた。

## 帰国と種々の事ども

冬の終わり、3 月中旬である。突然全員集合の通告があった。何らかのチャンスがあれば帰国できるかも知れぬ。毎日心中に願っていた。そこへ通告である。「それ来た。帰れるぞ」全員整列する。装具を持たない整列。何か頼りない。矢張り点呼だけで終わる。いつもながら落胆、然し今日は全員珍しく休日であり、これを利用して点呼する。人員把握には最適なんだ。偶然の一致にしては出来すぎである。何となく予感がした。帰国できるかもしれないと。もうロシアの生活は沢山だ。何の理由もなく捕虜とは？悲惨な生活は御免だ。



ようやく実現した。3月下旬、全員装具持参の上整列の号令である。今度こそ本物と喜んだ。通訳に聞くと帰すとは言わないが、バイカル湖の東へ輸送せよとの連絡があった由。これを聞き、帰れると決めた。何故と言うに、満州よりチャイナまで来るのに、停車ごとに本部の指令を仰ぎ、何回指令のために長時間停車したものか。我等の列車はこのように一つ一つ指令で動く。全員下車となれば万事休すが、下車さえなければ帰国できると考えた。我々各人の想定は、大変なもの。列車中の話の柱になる。大喜びで乗車する。帰りたい一心から途中の風景など目に入らない。シベリア本線の分岐点、クラスノヤルスクという町で、最後尾に連結された。将校警官の人々の車両が切り離されたのが分かった。何処で離されたのか不明である。心は性急で、途中下車がないことを祈りながら。バイカル等は何日に通過したか等は分からない。何も見えないのだ。でも日本海が暎の上に浮かぶ。そして、原爆後の日本のこと、家族のこと、万一家族が帰国していないときは、なんとしても再度満州に渡ろう等の話で専ら日を暮らす。

バイカルの東も無事通過、伐採の重労働も逃れたようだ。途中で停車すると、住民が列車の先頭に多数集まる。何事かと見ると、大取引である。食糧積載貨車より捕虜の食糧パン、或は缶詰を大量に民間人と取引し札を受領、ポケットに詰め込む。勘定するでもなく詰め込む。彼らは大多忙である。そこで感じたことは、住民はどうしてこの放出車両が来ることを知っていたか。何か以前に通知がなければ、こうも集合できないと思う。また、列車長をはじめ、露兵全員が一致した行動であり、その結果我等の食事が1日粥1杯で過ごすことになる。缶詰等はお目にかかれない。時計等はすでに掠奪された。彼らから見ると、日人からは食糧を奪うだけが残された手段である。徹底した掠奪が公然と行われている。以下に解釈したら当を得たものだろうか。日露戦争の結果、松山捕虜収容所を思う。物資不足の日本も、彼らには最上の待遇を与えた。彼らは捕虜になったことを喜んでいたという。

ある駅で全員入浴と言う。浴場は大工場のもを利用すると言う。シャワーである。両側は衝立で遮られ、床はコンクリート、一応整った湯場である。出発以来何日かロシアの垢を落とそう。3千人の使用に耐える湯が貯蔵されているものやら、不安がよぎる。大急ぎ体を洗い、私は終わった。間もなく湯は停止した。予想が当たったのだ。隣の若い男は、体に石鹼の泡をつけたままパンツの洗濯である。なんと馬鹿な男なのか。頭の回転の悪い男だと可愛そうになった。彼も帰国したはず。あのときのことは感無量であろう。また途中駅で20人ほど下車し、前方の車両からうどん粉を担いで工場に行った。パン工場である。2時間くらいして皆パンを抱いて帰ってきた。なるほどこれは現



物交換だと見た。日本ならば電話一本ですべての用事が出来るのに、現物を見なければ交換できないのかな？ 共産とは不便不能率なものだ。捕虜には内部事情が分からない。列車は去るが四方の状況がどのようなのか、殆ど眼中にない不思議なものだ。途中の地勢等は殆ど頭がない。ウラジオ、日本海、まだ見たこともない港が目に見えぬ。

## ナホトカ到着

4月3日と思う。夢に見たウラジオに到着したと思いの外、ここはナホトカという新港である。在満では聞いたことがない。また、満州の新聞にも見えない新港であった。秘密港なのか？ 何処となく未完成工事らしい所が遠目で分かる。一日も忘れない日本海に到着したのだ。日本はすぐそこだ。ここまで来ればバックはあるまい。幾日滞在させられるか分からないが、大型船が2隻も浮かんでいる。ロシア流に言えば、未だ返すとは言っていない。後ほど判明したが、彼らの日人教育の最終場所であった。不満な部隊は、矢張りバックさせられらしい。

海岸に来た。打ち寄せる小波を見て感無量であった。あちこちに浮かんでいる海苔やコンブ、早速取って味わう美味だ。塩の臭いが特に印象的だ。海藻採取兵が沢山いる。心中は誠に静かだ。落ち着いてきた。夕刻になる。宿舎がないとのことで海岸に野宿と決る。然し天幕がない。それでは砂に穴を掘ってみようと掘る。道具がない。5人で手掘りを始める。深さ約60センチのドームが出来、屋根には毛布を張り、採暖には河川から拾った石炭を焚く。かくして1夜を過ごす。1日1食でもさほど感じない。感じて海苔がある。海水がある。朝毛布の中から飛び出し、思うままの大気を吸った。すがすがしく嬉しい。

突然隣の友が大笑いする。「何だ、お前の顔は、真っ黒だ。炭小屋から出てきたようだ」顔を一撫ですする。相手も真っ黒である。何だ、お前も真っ黒だ。5人で大笑いする。海水がある。すぐ洗う。然し、今までと違いなんとも朗らかである。今日は、海岸で暮らし120グラムのパン2回支給された。しかも、副食物がある。ノリとコンブだ。誰も不満を漏らすものなし。

また、夕刻柵の中に集合せよとのこと。入ってみる。今夜は宿舎があると思い期待したが、ないとの返事。しからば如何にしようか。穴は掘れない。宿る建物の軒先もない。影となる場所がない。遂に、軒先の少し窪んだ雨水の流れる窪地利用を考えた。ここは人も歩かないから、軍服のまま、靴のまま、毛布を体に巻き、両端を手で押さえて横一列となって寝ることとした。夜中にそっと眺めると吹雪が舞い上がっていた。ロシアで

最低の一夜を経験した。これほど悲惨な一夜はなかった。4月と言うに夜は吹雪が吹く。日中は良い天気である。

## 宿舎生活様々そして帰国

宿舎のない日が続く。他には沢山の宿舎があるがすべて満員である。庭の一隅に、敷地と天幕を与えられた。天幕内は一団 70 名が座って一杯の大きさである。夜は予想通り横に臥することは出来ない。横になると他人の頭の前も後も足が来る。汚いなど考える暇がない。夜中の小用には、真暗なテント内ゆえ歩くことが出来ない。人の手や足を踏むなどは日常のこと、頭さえ踏まれたものもいる。「痛い、誰だ」の叫びは毎晩のことである。この狭い幕舎には降参した。日中は仕事のない毎日。幕舎外で、通る人を眺めている。何処のどなたかも分からない。1日2食支給される。ポミーと称するもの、日本のモロコシである。

まだ皮のついた粗製品である。通行人の多いのに驚く。何故あの船で帰そうとしないのか、心中穏やかでない毎日である。通訳に聞く、「日本人を返すべく、ここに2万人を集めた。が、日本政府は食糧難のため兵隊を受け入れたくない。それで送るにも、日本から指令がない。入港の船は遊んでいる」と言う。その船があれなんだと思ったが、何かがある。信用は出来ない。同僚も同様な考えでいた。柵内に起居するようになってから、毎朝歌の特訓を受けた。インターの歌、赤旗の歌、これを歌い終わらねば食事を支給しない。なんと作戦の上手なこと、箆旗を立て、インターを歌い、狭い所内を一杯に歩く。反すれば制裁が恐ろしい。またバックもある。体の運動として私等も歩いた。

目前の船を眺めながら、一小学校の校庭くらいに二万人を想像する。矢張り、銀座の歩道程度の人混みである。このような毎日が続く。今一度話そう。仕事がない。歌は歌わねばならない。露人と接触してはいけない。柵から出てはいけない。となると、鉄条網内に放牧された人間様だ。2食は支給されるが、空腹が襲う。炊事係がポミーを支給した。ビール樽を戸外に放置した中に、残り物が付着していたのを見つけた兵隊は、逆さになって入り込んだ。樽を占領しているのを見た。他の一人はこれを引っ張り出して、自分で占領しようと努力する。が、中々抜き出せない。多数の兵の前で演技を見せた。彼らは恥も外聞もないのだ。自制心を失っていた。また、チャイナ炭坑の休憩室でのことである。露助は新聞用紙にタバコを巻き、唇の焼けそうなところまで吸い、僅かな残りを捨てる。日本兵は競って拾い、すぐ口にする。彼らはこれを見て笑っている。私はこれを見て耐えられなくなり大声で言った。「乞食の真似はするなよ。彼らは笑っ

ているじゃないか」よく皆が聞いてくれた。その後、かようなことはなくなって嬉しかった。

まだ嬉しかったことがある。お話しよう。ナホトカで明日の日のみを思うある日、ロシアの婦人に3名の同僚と同行し、彼女の住宅に行く。8畳2間くらいのもの。室内には衣類入れらしい箱2個、ベッド一台、窓には草花の鉢が2ヶ、清潔な住まいである。何もないのに驚くばかり。彼女の服装はよく、ハイヒールであるのを見ると、役人か軍人の妻であろう。生活道具は何処にあるのか見えない。アカバンの鮮人住宅が思い出される。

スコップ一丁ずつ渡される。つれられるまま行ったところは、丘の中腹で少し掘り起こした草原である。ここまで掘り起こしてほしいと言う。これだけならお安い御用と相談一決、掘り方を始めた。天気晴朗にして波は静かなり。船は2隻あり何時の日か帰り得ん。しばしの苦勞ぞ。友と慰めあいながら、12時ごろには80%を完了した。休憩と思う間もなく彼女はジュエチャーで休憩と言う。いつ持ってきたのか、洋皿1枚にクリ飯と白パンを老兵の私に渡し、食べようと言う。思いもよらぬ給与の支給に感謝した。私はこれを公平に3等分して友人に差し出した。友人も喜んで食べ始めた。私も食べようと思い一寸婦人の顔を見た。彼女は優しい目でニコニコしている。日人の動作を見ていたのだろう。地獄で観音様にあったような気がした。食事も終わり友と相談、少しでも余分の仕事をして喜ばそうと決めて掘り起こした。彼女の望む面積より3割増しの仕事をした。これでよいかと聞くと、大変喜び又スコップを担いで彼女の住宅まで行った。そして帰ろうとすると待てと言う。待っていると、4cm立方程度の箱3箱を与えられた。一箱ずつ分けてみると、煙草のマホルカである。

今日はなんと良い日なのか。彼女に頭を下げて帰った。矢張り彼女は我々の動作に感心したのかニコニコしていた。帰りながら考えた。いつも前後を兵に守られて歩く。今日は兵はいない。本当に自由だ。御者のいない馬は走れぬ。道歩いてよいか分からなかった。身は軽く栄養失調の足も軽い。下手すれば脱走兵と間違えられないかと話し合いながら帰った。嬉しい1日であった。

舎内を見ると2万人の兵隊が右往左往している。小用足す隙間もない。僅かの溜桶はすぐに満杯となり、一面に流れ出し、不潔なこと甚だしい。露助は「200名毛布を持って集合」と言う。毛布はパンを受領するか、夜寝る大切な衣類である。これを何の為に持ち出すのか、不思議でならなかった。200人が毛布を担いで露助の後に続く。山を崩した場所に行く。彼曰く「この土を毛布にいれ担いで行ってトイレの汚いところを埋めよ」なんと恐れ入ったモッコの代用である。収容所では、毎日15名くらい死亡している

と言う。不潔な中にいつまで残すつもりか。日本が受け入れ拒否とは考えられない。船はと見ると、1隻の日もあり、2隻に日もある。同じ船である。1日や2日で舞鶴往復できるものではない。舟の出入りを見ても、日露間に何かが存在する。毎朝どなるインターの歌、気を永く永くと一人で慰めていた。いつの日か主客転倒する時を待とう。彼地に死亡したものはおそらく70万くらいはいるだろう。悔しさを胸に散華した人々のためにも、日本の復活を待ち、返礼せねばならない。

遂に乗船の日が来た。手の舞い足の踏む処を知らずとはこのことである。一刻も早く乗船しよう。予定時間が来れば乗船未了でも出帆させるという。兵を日本に返すために集合させたなら、何もこのようなことを言わず大人しく乗船させるべきである。栈橋ではまた身体検査だ。何もロシアから持ってくるものはない。あるとすれば虱くらいのものである。船中何日暮らしたか、馬鹿な頭が益々馬鹿になったようだ。嵐のため、清津あたりに退避したと聞く。DDT一杯の船底に身を横たえ、ロシアの様々の事件を頭に描く。嫌いなインターの歌とも別れたことが嬉しい。甲板に出る。嵐の後の静けさか、日本海の波は静かに見えるものは海ばかり。今少々で日本が見える。今は大海の真只中である。

恐らく日本も食糧で苦勞していることだろう。頭の中はどれから整理したら良いのか。港が見える。ロシアと比べると箱庭のようだ。私は生きて帰れた。生きて帰ろうといったが、帰れなかった同僚よ。我らは全く運命に翻弄されたのだ。我らは唯、君たちの冥福を祈るのみである。

合 掌

昭和24年12月記す

## (ブログ)シベリア回想録最終回

本日を以ってシベリア回想録は最終回を迎えました。この桜堂さんが書き進める世界は、困難の中に一筋の光明を見出せるものです。この説法に引き寄せられ、興味を持って掲載を続けました。文体、表現方法は一昔前のやり方ですが、私たちの時代の人間にはおおよそ理解ができます。ある人は「二等兵物語」に相通じるものがあると表現していました。

## 雑話追記

### ロシアの飛行物

チャイナの街を眺めている。よく飛行機の発着するのが遠めにも分かる。街の近くに練習場があるなど、よく見ると街の背面に広い草原がありそこが練習場だ。唯の草原を使用している。所々は草がなく禿げ上がり、飛行機は土煙を上げ訓練に余念がない。土質は相当硬土であり尚広い場所、斯様な処が日本にあるだろうか。彼地はブルで1日作業すれば翌日は飛行場になる、若い17,18の青年が訓練中であった。いくら爆撃を受けても心配ないと思う。夕刻終了した飛行機が住宅の背面に30機くらい並べられている。住宅より10メートルも距離がないが柵もなければ杭も見えない。きれいに並べているには驚いた。日本のイメージを考えこの操作を見、よく町民が協力していると考えた。柵もない飛行場が日本にあるだろうか。天然の補充手段が羨ましい。

### 黄熱病患者の幸運者

前掲風軍団との闘いの中、虱のため黄熱病に罹った人々は殆ど全滅した。第一薬がない。キニーネらしい、片端から死んでいく。その内の一人が真実幸運を掴んだ。生きて帰れたのである。彼の病中の話によれば黄熱病は間歇的に発作を起こして暴れ、1日平静になりまた暴れる。彼は発作のときなどは狂人のごとくなり、うわごとを言い暴れる。軽い体をベッドに縛り付けられる。田舎に帰ったつもりであろう。

「オッカー(母親のこと)今帰ったよ、腹が減ったからお茶漬け一杯くれ」ここまで来て全快した彼は、本当に幸運児である。山形県西置賜郡の男である。